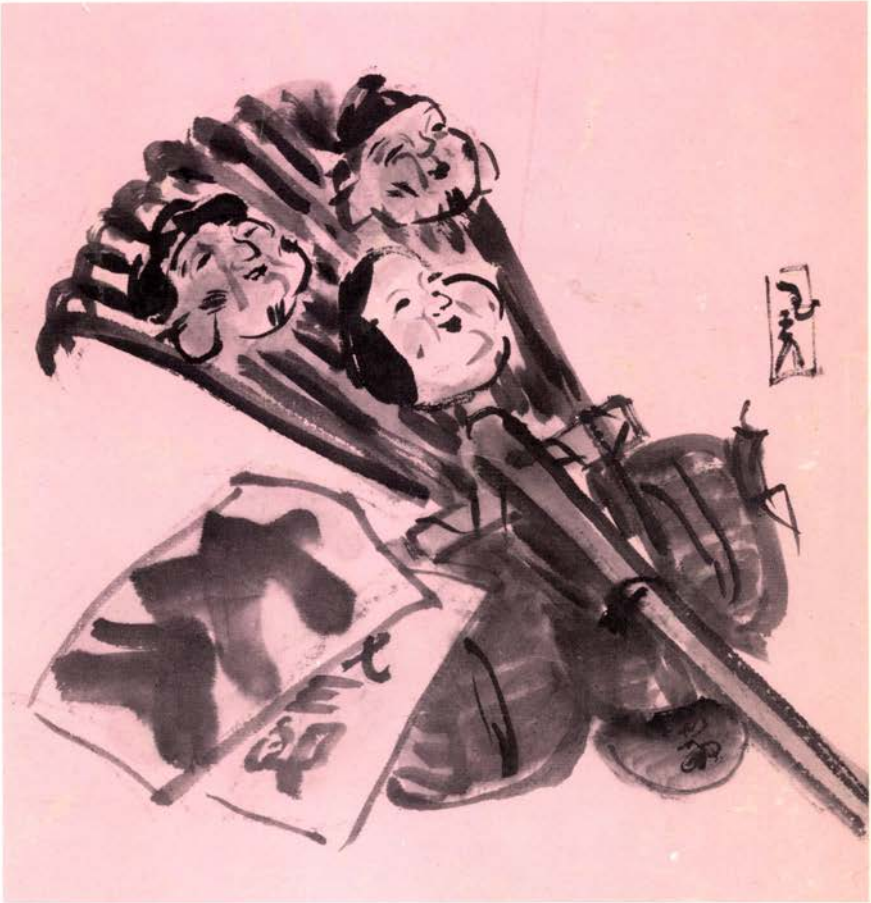
川柳塔

平成二年十月二十五日 印刷
平成二年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七六二号



日川協加盟

No. 762

同人特集・四季百句

十一月号

社　告

川柳塔社

川柳塔社では十月七日、同人総会で新規約を採択し、西尾栞が主幹と理事長を兼ねていたのを改め、主幹に西尾栞、新たに理事長に橘高薫風を選任するとともに相談役・副主幹・副理事長等の役員を決定しました。

今後、主幹が川柳塔社を代表し、理事長が社務を執行する常任理事会を統轄することとなりましたので、なにとぞよろしくお願いいたします。

ご　挨　拶

橘高　薫風

このたび川柳塔社理事長に就任することに相なりました。中島生々庵・西尾栞両理事長の貫禄には比ぶべくもありませんが、先ずは任期の二年間を、私なりに川柳塔のために尽力いたします。それは、今まで通り栞主幹の補佐に変りはありませんが、特に麻生路郎の精神の次代への伝承、女性の登用、そして本社と地方との一層の密接な交流をモットーとして参りたく存じます。大方のご支援をお願い申します。

☆新年号特集☆

川柳塔同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限ります。

■締切　11月25日（本社事務所宛）

年賀広告募集

本誌新年号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の紙上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は左記のとおりですので、よろしくお願いします。

★個　人　一口　二、〇〇〇円
（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団　体　次の四種といたします。
①1/3頁　六、〇〇〇円　③2/3頁　一二、〇〇〇円
②半頁　九、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　11月25日までに本社事務所へ

〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

男同士

西尾　栞

一鳥よぎらず
片雲とどまらぬ

秋晴の一日、即ち平成二年九月二十二日の午後一時、大和の国は宇陀郡室生村大字向渕の地に、川柳塔前主幹中島生々庵の句碑が建立された。除幕は上田翠光氏のお孫さんの将司君とひとみさんであった。

西田柳宏子氏の司会で厳かに和やかに式が進められた。

碑の句は前主幹の雄渾の筆で

生き甲斐は男同士が信じ合い

と言う句で、秋空に燦然と輝いた。句碑の裏面には柳友上田翠光建立という文字があった。この度の句碑建立の一切合財は翠光氏の企画で成されたことは誠に殊勝な事で、之には歴史がある。昭和十年頃、大阪松坂屋が日本橋三丁目にあった頃、麻生路郎が川柳塾をそこで開かれた時の同窓生の一人である。文字どおり川柳の第一歩からの柳友で、今思い出しても既に故人となった戸倉普天、寺井鋭々、川村好郎、戸田古方、石井白面人の諸氏のうち、上田翠光氏はたった一人の生き残りで、温かい友情をこの度発揮されたことになる。

建立地は鈴蘭の群生の南の極地で、五月頃は可憐な花をつけて芳香を放つ景勝の地、今は銀色にかがやく芒の穂が微かな風にゆれている得も言えぬ山里であった。

それにもまして道を距てて建った近代的な牛舎から五十頭に余る乳牛の鳴き声は句碑建立の讃歌であった。絞りたての牛乳の新鮮を賞味して今日の句会が始まった。

席題「牛」　阿萬　萬的選

(秀)　近寄れば近寄ってくる島の牛　紫　香

兼題「すずらん」　橘高　薫風選

(秀)　すずらんを活けて独りのカップ麺　章

兼題「男」　上田　翠光選

(秀)　嘘のない男の顔は美しい　狸　村

句会後、再びバスの人となって、恩師路郎の第一句碑

名も知らぬ山の起伏をうれしがり

を訪ねて、帰途についた。まことに有意義な一日であった。

座右の句

二階から一日降りず詩人とか　（栞）

私の句

火を焚けば喚声上げる兵馬俑　久保正敏

川柳塔　十一月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　男同士……西尾　栞…(1)
夢幻の如くなり……波多野五楽庵…(2)
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…(4)
自選集……(33)
■川柳太平記(150)　川柳の群像　金泉萬楽……東野大八…(38)
■連載　柳籠裏三篇研究（五丁）……(40)
■同人特集「四季百句」……(42)
水煙抄……黒川紫香選…(48)
秀句鑑賞「同人吟……西出楓楽…(37)
　　「水煙抄……内海幸生…(71)
句評リレー……藤井一二三・高橋千万子・奥谷弘朗・榎本吐来…(68)
銀河系……河内天笑選…(72)
■女性コーナー　茴香の花……八木千代選…(76)

夢幻の如くなり

波多野五楽庵

十月の句会に出席しようと兼題を考えていたら句会の夢を見た。句を創る夢もたまに見るが、そんな時に限って朝まで憶えていたためしがない。枕元にメモ用紙を置いてはあるものの、よって件の如しと申し上げるより仕方がない。しかし、今回の夢はよって件の如しと言えない所にフロイド的な考察を要することになる。

題を出された方はさだかではないが、間違いなく栞先生らしい。その題を〝野口〟と言う。夢の中でこの題の意味は、自然界の入り口と思いついたが、念のために広辞林を開いて見た。なぜか手元にあの厚い広辞林があり〝野口〟という熟語も記載されているのである。〝野口〟「自然な山野に入ってゆく入口、または山野と人間の住んでいる部分の境界線」と書かれてあった。私はそれをあたりまえの如くに受けとめ、句を創り始め、しかも東西

「天」……水粉千翁選…(78)
一路集「文化」……山田高夫選…(78)
「親しい」……柴田英壬子選…(79)
初歩教室「来賓」……辻白渓子…(80)
■川柳こぼれ話　川柳と季節……田中正坊…(82)
生々庵句碑除幕　記念句会……田中透太…(83)
川柳塔碑供養を挙行……(36)
平成二年度川柳塔社同人総会……(84)
二賞表彰本社十月句会……(86)
■ずいそう　こんぴら詣で（その二）京都……布施幸子…(90)
各地柳壇（佳句地十選／西口いわを）……(92)
■各地句会だより　川柳塔鹿野みか月……中原諷人…(104)
■句集紹介　小西雄々句集……小林由多香…(105)
柳界展望……(106)
11月各地句会案内……(107)
■編集後記……(108)

座右の句

八十になったら恋をしてみよう　（薫風）

私の句

無冠よし天より高き一樹あり　**越村枯梢**

の句風について考えているのである。

私の知っている関東・関西の句風とは、青森へおいでになった山田良行先生とお話した関東の句風は前句附からの伝統を引いているために、題を詠み込まない作風が多い。それに比べて関西の句は、折句が主流だったために題を詠み込むことが多い。どちらも川柳の伝統であるが、ベルリンの壁ほどではないにしても、金沢を境界に東西の川柳の壁があるみたいな気がする。という事であったが、そのことが夢の頭の中から離れない。

題の野口は詠み込んだほうがよい、と夢の中で自覚しているのもフロイド的なのである。しかも今までは目が覚めると憶えていないはずの句がハッキリと頭の中に残っているのは一体どうした事だろうか。

野仏と吾と野口の風に逢う

この野口が野分だったらと思いながら推敲したり、果して栞先生が抜句してくれるかなと考えているのだから夢もまんざらでないことになる。

いつまでも記憶に残っている夢は少ないが、夢に出て来た新熟語と鮮明に残っている句が夏の夜の物語として夢まぼろしの如く私の頭の中を駆けめぐるのである。

川柳塔

西尾栞選

米子市　林　瑞枝

ベビーベッドの横の小さな陶酔よ
ロマン追う傍で家計簿つけている
自分史の恋の伴奏低く鳴る
この栄華ロダンは何と呟くか
炎えるもの鎮めんとして藍を着る
野に咲いて惑うことなき萩の白

八尾市　内海幸生

感動のしすぎ一句も詠めぬ旅
ぬるま湯を出もせず一遍　山頭火
七五三帯結ばせずほどかせず
花札の鬼も南に棲むという
何も彼もうまくいったら憎まれる
紅葉狩り君の想いとは別に

大阪市　板東倫子

老人の性が論議になる長寿
自分史に落丁したい箇所がある
傷心に巻く繃帯が見当らぬ
無理強いはせぬと義理ある人が言う
お寺から墓地管理費の見積書
知らぬ間に認知していた消費税

七尾市　松高秀峰

叱られて叱って回る夫婦独楽
車間距離守って妻の長い道
自衛隊　右向け右の声がする
よう出来た嫁へ子供が授からず
ゴミ出しにお隣さんも男です
前向きに善処しますともう三期

岡山県　嘉数兆代賀

銀杏並木も人も無口で秋深む
八十歳の自転車　秋の風を切り
箸二膳　茶碗がふたつ老いの幸
肚の虫も時の流れに耐えて生き
無人駅　風もわたしも人を恋う
トンネルも迷路も抜けて来た余生

和歌山市　西山　幸

事終わり事が始まる数え唄
愚を一つ果たしてもとの零になる
にんげんに戻るお辞儀をしつづける
梨を剥く凡人らしいかなしみで
虫めがね覗くと泣いている笑顔
いつからか憧れている尊厳死

松江市　恒松　叮紅

父老いてズボンの線を大切に
リゾートの海で溺れているいのち
信号の青が続いて果報者
新鮮なトマトが熟れる過疎が好き
三姉妹一人も家業継がぬ指
愛たしか湯呑みが二つ置いてある

米子市　小西　雄々

法の網くぐる利口に利用され
潮騒が聞かせてくれる悲話情話
生者必滅　妻を失う日が怖い
イベントへ鴉も森へ還らない
温泉の解放感へ喜劇待つ
棘の痛さへバラの妬心を知らされる

岡山市　時末　一灯

傷ついた拳で厚い壁たたく
愛憎と忍耐という川泳ぐ
忘れられ忘れてもいる彼岸花
晩節を汚すでないぞ知事さんよ
厳粛に受けとめてます忘れます
消費税いつから認知されたかな

竹原市　小島　蘭幸

爆発をするかも知れぬ錨抱く
ロバと私の長い物語と眠る
塔は高くて私はいつも片想い
百万ドルの夜景と妻と子と僕と
鳥籠も虫籠も空　子は巣立つ
少年の帽子が丘の上にある

倉敷市　小野　克枝

涙して笑える友の手を握り
従いて行く妻は仮面を二つ持ち
伸び縮みする物指しをふところに
医者が好き入院が好き生きている
時々は休む時計を持たせよう
定年の駅へ一本足で立つ

米子市　林　荒介

萱の花仏と風を頒ちあう
横抱きにされて帰らぬ児を探す
駄菓子屋の棚にならんでいる昔
水涸れてふたたびダムの底を這う
引き潮に脚を取られたことがある
硯水にひとりの刻を深くする

松原市　玉置　重人

宝くじ一字違いを持ってます
怖いのは好き好き好きと言うパンチ

子に残す美田などなし余命表
栄転を送る空しい拍手だな
単身赴任　人情厚き流れ星
いつからか夫婦になっている歩幅

豊中市　安藤寿美子

高度一万　日本地図をたしかめる
柱状節理　地球の創世記をおもい
登山やめ熊のフンにはなりとない
リフトというずぼらなものに乗っている
秋風の中　温泉の湯のかげん
ものかげに秋がひそんでいる残暑

大阪市　津守柳伸

踏みしめる山の冷気と赤とんぼ
ぬくもりが伝わる山のすれ違い
おむすびが美味い海抜一、二〇〇
手に止まるトンボと山の昼下り
八月の紫陽花に遇う金剛山
道標に忠実だった山の足

下関市　石川侃流洞

女尊男卑かけこみ寺が入れかわる
金婚式ひょっとこ　おかめでよかったな
割り切れぬ数字ばかりが胃にたまる
性教へ雄シベ雌シベが死語となる
やることはやったと影に言い聞かす
救急車近所に止まり目が冴える

熊本市　永田俊子

空の無限に欲は出さない奴凧
いつかきっと指人形を踊らせる
いやと言えないから困るヤジロベエ
まごころの言葉に弱いもつれ糸
片隅に生きて律気な渡し舟
足裏の痛さを知った母の道

富山市　舟渡杏花

右顧左眄よみの甘さよ流れ雲
ふるさとに駈け込み寺のある安堵
人真似でいいさと墓の父やさし
連れ舞いが途中でつむじ曲げかかる
手応えのあるまで待ってやるつもり
おろかにもどくだみ憎んだ日もあった

堺市　中川滋雀

不動明王　烈火のごとき慈悲にふれ
言いなりにならずに済んだ自己嫌悪
悲しいほど弔辞の嘘に飾られる
歯に衣着せても舌がもつれ出す
笑顔には返す笑顔があるゆとり
遠雷となって枕を裏返す

美祢市　安平次弘道

保護色を信じ安易な道を選り
三文判それほど世間甘くなし
確率を無視して午後の雨に濡れ
因果応報少し届かぬ縄梯子
種なしの西瓜　未来を語らない

美人薄命　妻の保険を考える　　堺市　高橋千万子

開店粗品　百人様の百番目
裏切りを相性などと軽く言う
対話なき暮し時々メモをよむ
愛情も老化現象　日々無口
白蟻と一緒に住んでいた恐怖
新聞になかったニュース　週刊誌　　堺市　河内月子

バースデーケーキをさげて友が来る
辛抱の仕方を草に教えられ
ぬか漬けがうまい旨いと上機嫌
名水をゴクンゴクンと宿のげた
捨てるのが上手になったお母さん
雑草の強さ雨乞いなどしない　　豊中市　田中正坊

太郎つれ秋をさがしにいく散歩
そして秋　旅のプランが二つ三つ
零号の雁来紅あり秋の部屋
金文字の古き洋書の白秋忌
手垢つく辞書は私の伴侶です
家具の位置かえて見直す3DK　　奈良市　宮口笛生

ゴキブリが消灯時間待っている
適材適所などと会長押しつける
早々に酒が出されて座がなごみ
朝夕は涼しく候さんま焼く
時折りに妻恐ろしいことをいう
癌じゃないないないと嘘申し　　藤井寺市　吉岡美房

父の忌に西へ西へと飛ぶ蜻蛉
蒼天に秋を画いた鰯雲
健康な長寿ばかりがいたわられ
長生きの秘訣ばっかり聞きに来る
仲間からこぼれたくないにぎりめし
ブランコの誓いへ秋の陽が落ちる　　和歌山市　福本英子

御彼岸会まだ鳴き足りぬ法師蟬
曼珠沙華九月の風の絵の中に
今匙を投げたら困るのはわたし
正直に生きて寿命をすり減らし
ふっと息抜いてわたしも女です
スイッチオンまずクーラーが目を覚ます　　十和田市　斉藤劦

こんなにも質素な花が貰い種
ストレスと旨くつきあいハーモニカ
ネクタイのピンにもりんご　りんご好き
おちんちん可愛だなんて老いおむつ
少年の親で煙草をやめました
幸福の樹にお値段がついてある　　伊丹市　樫谷寿馬

震災の悪魔へ貢ぐビルが建ち

血圧の乱れる妻を眼で見舞う
秋仕度急げとばかり着く毛ガニ
日本人夫婦の別れバグダッド
休止符があって初秋の蟬しぐれ

笠岡市　松本忠三

煩悩が百八っとは恐れ入る
真剣に墓地を買おうかどうしよか
はにかみが踊る阿呆になれなくて
世話好きなわたし阿呆に見えますか
古里の敷居が高いこともある

廿日市市　林野甦光

美しく生れて明日を思いやる
謎のない女とビール苦くなる
手紙書くあいだ涙が出て困る
暇そうに見えても食っている老舗
気休めの旅イベントに誘われる

柳井市　弘津柳慶

善人の顔が揃って遍路笠
電話口　誰か居るのか生返事
法話へ未熟しみじみ悟される
老眼鏡かけて神父は聖書読み
サングラスはずせば柔和な眼が笑い

今治市　矢野佳雲

噂でも小指立てると人が寄り
老夫婦　一緒の時間考える
人面魚　仲間の鯉に袖にされ
私なら換えない種と握り飯
掃除機を持つと男は座を外し

名古屋市　越村枯梢

コーヒーとタバコがあって恙なし
棘のないバラを撰ってるあかんたれ
粋がってみても所詮は濡れ落葉
ここまでは嘘です句読点を打つ
そう言えば芭蕉も俺も伊賀生れ

仙台市　川村映輝

一日を快適にする万歩計
安達太良へ登って清い空を見る
肺癌をひとごとにしてタバコのむ
騙されて損してその上馬鹿にされ
日の丸の翻翻として文化の日

東大阪市　森下愛論

空白の時間人間ふと忘れ
飲み仲間一人欠けると出る噂
真向の視線感じて閉じる膝
新調の服モデルになった気で歩き
嫌煙権ベランダで喫うホタル族

倉敷市　稲田豊作

幸せは栗の実拾う里に老い
労りの言葉が欲しい齢になり
年寄りを畠の草は休ませぬ
お達者でと挨拶されて背を正す
借金のないのが自慢老い夫婦

五百羅漢に仏頂面もいるだろう
買物の暗算ならばお手のもの
一泊二日の旅でストレス消えますか
七つ若い妻がにんにく買うてきた
蓮根が残った僕のお弁当

呉市　槇田英詩

靖国の社　英雄たちの私語
襟足へ女形　女にない色気
来る来ない花ビラもう一枚欲しい
消ゴムで消せるミスなら咎めまい
縄電車むこうもやはり核家族

宇部市　平田実男

「まあええがな」が親を泣かせる子に育て
身体髪膚　親に貰うて子に移植
親の業継ぐと気易く言う不安
雨宿り庇の短い赤い屋根
冷房車から出たプラットの昼下り

大和高田市　岸本豊平次

紀子さまの笑顔がほしいうちの嫁
投げ返す石がポケツで風化する
手話の娘に人の情けを教えられ
花博でもまれ電車でまたもまれ
人を恋う心以上に花が好き

高知県　赤川菊野

まだ街にトンボが飛んで住みやすし

西条市　片上明水

通帳に妻が待ってる旅の金
強そうな雲の姿が消えて秋
トンネルと丘を残して砂場暮れ
港へも駅へも便の悪い寺

倉吉市　奥谷弘朗

垢ぬけのしない顔だとひやかされ
信じ合い家族で愛の灯を守り
計算に長けた男で煙がられ
甘言に脆いお方と見抜かれる
俺の句を覚えていたと嬉しがる

倉吉市　渡辺独歩

雑学をきく床几の熱帯夜
反戦の歌が地下から流れ出る
二十四時間闘う男に嫁が来ぬ
都市ゴミが押すな押すなで島荒らす
遮断機に憲法九条ひっかかり

倉吉市　野中御前

それなりに言い分があり嫁姑
信用はするがと返事してくれず
さりげない言葉のなかに針がある
据え膳に箸はつけない野良猫だ
リハビリ一首吊り肩もみ電気鍼

唐津市　田口虹汀

同じ物食べて値のはる奥座敷
ウェーブを秘めて隷書の味を見せ
低姿勢高望みせぬ水の性

荒砥では五十の坂はもう越せぬ
正念場　傘寿の坂をどう歩く　唐津市　久保正敏

ミサイルを減らす性能倍にして
褒め言葉聞いたことない五寸釘
少年に大志があった日のラムネ
赤絨毯よりも真面目に麦を踏む
ホタルより先に灯を消す山の家　唐津市　浜本義美

握るもの握り大物白を切る
ヤジロベー自由化許せぬ貌で立ち
もう四十未だ四十で独り居る
地球儀を壊してならぬキノコ雲
日本の印籠　海外派兵せず　松江市　柳楽鶴丸

大自然が親友であり悪友であり
ご存知ですか今鯰のブームです
自然が一番よいとスッポンポン
山頭火が好きで一人旅に出る
年毎に夫婦の色が出来あがり　松江市　舟木与根一

仏塔の高さも秋の身繕い
立派過ぎる殻が重たい蝸牛
フルムーン紙風船を膨らます
可愛い盛り可愛い口答え
女房が慌てないので男下げ　米子市　石垣花子

鍵掛けぬくらしがくにでまだ出来る
女手に甘くは無いぞ五寸釘
こんにゃくの泡も厨の詩が好き
六人を育てた自信腕に有る
正直な鏡はいつも恨まれる　米子市　菅井とも子

ラベンダーが富良野の秋をつれて来た
月下美人が呼んで今夜は眠らせぬ
八十の同窓会で詩を吟じ
あの人の思わぬ面を見る宴
浜千鳥　亡父の愛唱歌として残り　米子市　青戸田鶴

鬼ヤンマ子らは遠くに住んでいる
敬老の日だけ主役のおとしより
酒とろり夫のおしゃべりまだ続く
暑い夏友の訃報がかさなった
彫刻を前に批評家ばかりいる　米子市　田中亜弥

満天の星を指さす野の仏
鏡と笑うとても機嫌のいい朝だ
お互いの裏まで知ってうまがあい
追伸を書くのが好きな母の文
寝入りばなドスンと落ちる夢の音　米子市　政岡日枝子

青竹を踏んで塩分ひかえめに

赤とんぼ父の墓から離れない
飛行機に乗せ孝行と思うてる
初恋へ紙ヒコーキは墜落す
ふるさとの人の名前は皆言える

米子市　寺沢　みど里

電灯の紐つかめないままに秋
眼圧は平常ねむい日が続く
家系図を大事におもう小抽斗
大輪の期待へ水をやりすぎる
3Lの梨でご無沙汰ばらいする

米子市　澤田　千春

いたわりの風に出逢った朝の海
真実を書く　大きな山が動くまで
帯には足らぬ妻だがとてもいとおしい
いたわりがほしくて鬼が町に出る
つかれた日ふとB面の旅に出る

米子市　川上　より子

家長制度の風が吹いてる三十回忌
キャスト大勢われに明治の嫁の椅子
ほら吹きも古希を過ぎては芸に見え
法事客帰し家長テレビに還る
百日紅　太郎のエクボが深かった

米子市　光井　玲子

ぶらさがる腕が達者でありがたい
旅がえり何はさて置きかっぽう着
妻の留守何とかやっていたらしい
息切れのわたしを救う秋風よ
産声は予感的中　桃太郎

米子市　小村　てい子

花びらほどの幸せ続きますように
浮き雲の旅のプランにツボがある
満期の通知はしゃいでからの数字負け
歳時記や寺の座敷の筒井筒
いい返事わさびの辛さ無二の友

島根県　堀江　正朗

満七十八こころ澄みきる盃に
さらさらと茶筅に深む秋の音
闇の眼を閉じても思案なおあまり
戦盲と心に刻む字も忘れ
夏バテの呼吸に優し秋の詩

島根県　堀江　芳子

おたがいに甘えてばかり齢を読む
これでいい　ウン　駄目かしら　ウン　寝息
すこやかな乳房気ままな仕舞風呂
肩書きは要らぬ気楽なペンネーム
異議ありと入れ歯に刺さる落花生

島根県　榊原　秀子

畠打ちにきた小母さんの話好き
茹で栗をむきむき孫の話など
蠅一匹殺す平気な私の手
老人ホームに少し慣れたという便り
線香花火使い残して去んだきり

島根県　栂　みどり

ソーメンをすすり盆客腰をすえ
夕暮れへ烏も帰る孫も帰る
三日三晩干して梅の季無事終る
夏終る孫の宿題まだ峠
花ござへサラッと初秋の心よさ

島根県　松本文子

シナリオの通りに愛が終らない
くれよん画いつかゴーギャンへと続く
疑心暗鬼の言葉は井戸を出たがらぬ
くどくどと言わずに月は登りたし
防人も思い焦がれていた月だ

島根県　小砂白汀

せくな急くなせくなと急かす法師ゼミ
あのうあのう突然あんたが好きになり
朝まだきカラスの声も秋になり
イラクの反乱コンピューターも予想せず
猫の仔も通らぬ夜の信号機

島根県　松本はるみ

あの愛は偽りだったか飛行雲
恩のある人ひとりずつ死に給う
今頃がいいかもしれぬ旅ごろも
ご夫人が偉くて他人は遠まきに
体温も血圧もいいうちの犬

岡山県　直原七面山

百歳になってまだまだ百かいな
捨て猫を拾うて子供帰って来
小錦に似た妻に発破をかけられて
ちぐはぐな意見持ってて唯み合い
捨てられた男を笑っているカラス

岡山市　川端柳子

月丸し笑って済ますことにする
五七五ひとりへ立入り禁止札
母さんの涙で終止符打つ美談
夢しぼみさんざん苦労をかけました
菊匂う立居振舞おのずから

岡山県　荻野鮫虎狼

頂上に着けば孤独の風に逢い
座りたい椅子は他人の顔で居る
満足に大学出した化粧焼け
立寄れと言えば本当に立寄られ
倖せな余生になってから勤め

岡山県　二宗吟平

槌の音の合間を縫うて蟬時雨
上手より丸い心の筆の跡
八十の手習いワープロ齧りつき
ワープロの先生子孫で事欠かぬ
老人の過保護叩いた講演会

岡山県　小林妻子

稲刈って休耕田がほっとする
休耕田泣いてる声がきこえるか
大きくはなりたくはない誕生日

今日までも生き伸びていた罪だらけ
ひとつずつ消したい罪が又ふえる

岡山県　矢内　寿恵子

文化人の自負で生き抜く一行詩
一年草咲いて山茶花うらやまれ
ふるさとの老父と地酒と一代記
古時計　古い女とつつがなし
人並みに文化揃えて兎小屋

岡山県　山本　玉恵

薄いえにしの恋に酔わせた風の盆
円周の彼方で待ってくれる人
鬼になり蛇になり一人生きる日よ
言いそびれてからの女で貝になる
泥舟に命あずけて凡夫婦

鳥取県　松下　たつみ

満ち足りた日のジーパンがよく汚れ
孤独から逃げるお喋りだったのか
やりきれぬものに善意の行き違い
豊作の米より藁が希少価値
指先から秋がだんだん深くなる

鳥取県　林　露杖

大根蒔くどうかおしめりあるように
酸性雨だろと旱天慈雨として
ミノ虫の糸に長短風遊ぶ
惜しむらく担板漢のまま老いる
地球儀を回せば銃の音がする

鳥取市　両川　洋々

麻酔よりよく効く君の嘘でした
ナマズ待つ新居ローンは無いらしい
神様とパンツが不倫知っていた
わだつみの声に先生さいなまれ
コツコツと楢山行の金を貯め

鳥取県　土橋　螢

唇が触れる距離まできてごらん
薔薇を剪る鋏の音が露に触れ
少年に最短距離の道を問う
爆弾のようないのちの診断書
恙なくまだまだ夫婦しています

鳥取県　新家　完司

いたわってくれる鈴虫キリギリス
不本意ではあるがいっぴき蛾を殺す
反対の意見もとても良く解る
ポチ君は涼しい場所を知っている
恋文を書こう油のあるうちに

鳥取県　江原　とみお

神さまの選んでくれたトジ蓋だ
境界に棘のある木をうえていた
マイホームが遠くなる橋渡ってる
いつも僕は他力本願風ぐるま
山降りて山の姿に惚れなおす

鳥取市　小谷　美っ千

笑いころげて師走の無情呑み干さん

忙しくて隙間風にも気がつかぬ
身構えることに疲れた力こぶ
母の掌をこぼれた種が芽を出した
花の種　母の言葉を聞いている

大阪市　河井庸佑

引き返す勇気を持っている上司
口と腹違うと知ってあわてない
新しい古いもないと義理を説く
先輩のそのひとことにあるヒント
結論を急いで石にけつまずく

大阪市　吐田公一

サンマ焼く煙たしかな秋匂う
夫婦茶碗欠けても代えぬ愚夫愚妻
常連のひとりが来なくなった椅子
寒流でもまれ育った出世魚
眠られぬ子供に還る旅枕

大阪市　江城修史

生きる日の義理は欠きません腎不全
腎不全昨日があって明日がない
腎不全生きた証しは残さねば
敬老の労り遠くにペダル踏む
爽やかに生きたし今を限りなく

大阪市　本間満津子

きれいなので見違えたとはご挨拶
白魚をするすると呑む人に負け
ハミングが出てきて戻るマイペース
地におちた人情　僻地に来て拾い
久しぶりつらい話は明日にしよう

大阪市　神夏磯典子

こおろぎの声に残暑が消えてゆく
食べられる心配はなし水族館
御近所に馴染みの医者がいる安堵
友の訃へ命の重み噛みしめる
味噌汁がおいしくなった秋の風

大阪市　藤田頂留子

ひたむきな足跡見てる百度石
息災をごま木に祈る般若経
姿見に焼きつく亡母の帯すがた
親切な傘借りた上茶をよばれ
夢のつづき明日へ明日へと書き足そう

大阪市　北勝美

敬老日幼稚園から招待状
午前五時宗教時間を聞くラジオ
鬼灯のもみ出す種にもいる根気
秋雨を待ちくたびれて秋ざくら
病む妻に新米の新米水加減

大阪市　大塚節子

締め揚げてポンと叩いた柳腰
繕うて着て見る亡母の秋袷
清姫の思いも鐘と妙満寺
旅がえりもったいないがああしんど
夜なべする布裁つ母の鋏冴え

大阪市　中西兼治郎

ぽっくりと死にたいがぽっくりと死に
自衛隊スコップ持っていて平和
乗客が子供にかえる川下り
緑茶より番茶が好きな貧乏性
地上げ屋に移転せまられてる地蔵

大阪市　井上白峰

敗者復活抜いた刀が錆びている
誘われたグラスの底に義理ひそむ
相槌を打って竹光抜かされる
生き残る距離　保険屋に測られる
おとぼけの仮面の中にある秘策

大阪市　桝本蕗児

男とはさびしがり屋でいばり屋で
近頃の男に帰る家がない
天衣無縫ほんにあんたは御しやすい
活造り魚の泪みえぬかい
犬五匹ボール箱にて捨てられる

大阪市　冨上光代

文豪の足跡たどる京しぐれ
架けました余生の空へ虹の橋
その笑顔見ればファイトが湧く不思議
さり気なくいたわり置いて友は去ぬ
細腕で支えた過去の一頁

岸和田市　原さよ子

内孫も外孫もいる祭の灯
貧しさを知らぬ孫等の好き嫌い
異常気象それにも負けず虫の声
年毎に亡母の写真に似る私
写真では見合する気になってくれ

岸和田市　島崎冨志子

花博のこんなにおいしいかき氷
だんじりの笛の音六十の血をわかす
老い二人　夫が句になる余生です
からこうたつもりへ夫の生まじめさ
持ちなれぬポケットベルが気にかかり

岸和田市　古野ひで

秋風へ言葉いくつも用意する
義理と言う字の重さ気の重さ
子を思う親を子もまた親思い
子等守る広くて大きい父の靴
屑々と言われて貝は砂を吐く

岸和田市　高須賀金太

ビルの街窒息しそうな瓦屋根
スポーツカーで野良へ出勤しています
コンバイン縄もむしろも奪い取り
萱葺きがまだある里の人情味
辻説法いつも地蔵に聞かされる

岸和田市　岩佐ダン吉

ガスマスクの売れる地球は悲しいね
外で会う猫は他人の顔である
矢玉でもこいとおばちゃんツアーです

地蔵盆のあさ裕弥ちゃん逝きました
息をのみ敵の一手を待っている

和歌山市　堀端三男

何時でもどこでも定規を当てたがるお人
良いとこだけを写す鏡はないものか
前列の死角で居眠りする法話
軽い気で肩を叩いて叱られる
嘱託という名で社史を書かされる

唐津市　仁部四郎

名護屋城跡本丸薪能

太閤へビデオを送る薪能
太閤の夢を伝えて薪能
能はみな全て悲劇か薪能
薪能大幽玄へ火がたぎり
海峡を越す風を呑む薪能

和歌山市　牛尾緑良

川柳塔わかやま創立二十周年記念川柳大会

柳友来たる恋人よりも待ちわびる
優しい手固い手みんな暖かい
黙禱の静寂をよぎる二十年
それぞれの役で歓迎申し上げ
末席も上席もない酒の味

和歌山市　垂井千寿子

亡母に似た指で亡母には届かない
こんな時何も言わない姑で居る
冷房の部屋で熱帯魚の奢り
親友として口実を信じよう
初秋かな私と緑甦る

和歌山市　内芝登志代

さまざまな心支えてボランティア
困った子と言えば貴女の息子です
よく動く嫁でお産は嘘のよう
母さんを鏡に生きてきましたが
Uターン甘くなかった里の風

和歌山市　松原寿子

尾灯渋滞一途な愛も追いつけず
ききわけのない涙が背なへ届かない
適わない愛の禁句を呑んでおく
秋桜に夢の救いが少しある
シナリオを補う彩が見当らず

和歌山県　天満三千代

しきたりも消せる世代の波しぶき
酒を飲むこれも仕事の中にある
つぎはぎの堪忍袋持ってます
寝たきりへ長寿を祝う言葉選る
細い細い絆へすがる選挙戦

和歌山市　桜井千秀

よく通る声で秘密がすぐ洩れる
コピー機が奪っていった記憶力
三度目のお色直しも見てあげる
追い風におっとどっこい気を鎮め
これ限り止めたい酒がうますぎる

和歌山県　寺田裕美

門を出る時はファイトで鳴った靴
仕合わせを見せるカーテン派手に開け
わたしねェ続きは駅にきてしまい
身勝手な男へ火の矢を放とうか
ハイヒール土の温さがわからない

和歌山市　福井桂香

戯れて萩と見紛うしじみ蝶
喪の帯で女ひときわ美しい
たっぷりと筆にふくませ愛を書く
忙しいああいそがしいと母達者
発想の明るさだけが取得の娘

和歌山市　山川克子

太郎冠者　次郎冠者にも意見され
アンテナを張ってわびしいおもいする
ゴールデンチェリー名前に魅かれ鳥
他人から見れば結構な茶番劇
節くれた指で死ぬまで苦労性

和歌山市　青枝鉄治

石橋を叩く間に逃げた運
化粧した男面接受けにくる
二学期を待ちに待ってたかぶと虫
まあ聞いてと女よく食べよく喋り
化粧代だけは稼いでいるパート

和歌山市　田中輝子

一喝をもらう眠りが深すぎて
ややこしい話へ帯を締め直し
押し返す力を溜めている無言
履歴書をかく傍らにいて安堵
野良猫も生き伸びている温い路地

西宮市　林はつ絵

年輪に一つの死語が染みている
お互いの輝くものを見つけ出す
身代りのように盆栽一つ枯れ
赤ペンが老いたわたしに付き纏う
母の留守よその灯りが楽しそう

西宮市　奥田みつ子

いつの世も恋は劇薬　恋は蜜
馴れすぎて心が留守になってゆく
天下国家を論ず聞き手は妻ひとり
霊柩車後追うように赤とんぼ
隠しても浮かぶ喜び秋の天

西宮市　門谷たず子

神の掌の上を転がるさだめだな
つまずいた石から道は下り坂
網の目を繕うこぼしてならぬ倖せよ
幕降りて父はピエロの面を脱ぐ
遠い人へ雲の動きに似た思い

西宮市　西口いわゑ

りんどうを好んだ母の忌に生ける
留守番の花一輪とお茶を呑む
シナリオを行きつ戻りつして生きる

甘党に今日のところは合わせとく
女三人画廊出てから無口なり　京都市　都倉求芽

四季というにはこんなに短い春と秋
論議どうあれ日の丸は子にも画け
今日の金封は重い手で包む
白足袋のよごれ本堂の畳撫で
これでもかこれでもか笑顔のコマーシャル　京都市　山本規不風

かまととで騙されている夫だな
形見にはそぐわぬ書画を花芒
夫ゴルフお伽ばなしの人が来る
誰に似たのか他人のような顔をする
よろこばす嘘だと判っているけれど　京都市　松川芳子

百歳の笑顔家族の和の中に
キープしたボトルに自由奪われる
目の届く範囲の嘘は許しとく
コミカルに演じた嘘にだまされる
病床でしみじみ辿る運命線　羽曳野市　塩満敏

朝の陽よ父の苦痛を和らげよ
朝の陽にほっと一息つくベッド
壮絶な闘い見せて父は逝く
戦友が父にもたせた軍艦旗
台風も静かになって棺が出る　羽曳野市　田中透太

夕焼け小焼け赤鉛筆が欲しくなる
家裁まで引きずって来た狂い咲き
逢うて来た余韻　鏡で確かめる
愛ちゃんと息抜きしてるモカの店
五線紙に書けない父のつらい唄　羽曳野市　榎本吐来

殺し文句は妻には言わぬことにする
成算があるわけでなし宵の酒
席譲られた話を妻へ持ち帰り
夫婦箸　子の帳尻のことで揉め
その夜からまだ六十という鏡　羽曳野市　吉川寿美

冷蔵庫妻の油断が転げ出る
ハンカチで包む本音が慎ましい
その裏を知ってしまった不整脈
慰めの言葉いっぱい持つ他人
太郎と花子　姿が消えた祭り以後　姫路市　大原葉香

百までも生きたくはない今日の幸
電柱が迷惑してる選挙戦
襖絵に守られ夜の床につく
蟻には蟻の仁義あるらし譲り合い
倦怠期大きな海に会いに行く　姫路市　丁坪サワ子

谷底を見ると背筋の凍るバス

標高二千仙人の湯で星仰ぎ
中身の軽い小槌孫へは見せられぬ
均等法　勿体ないと母大正
母さんが大好きと書く日記帳

姫路市　中塚遊峰

点滴のお世話で夏も越し候
祭りずし亡母がつくったかくし味
弟が亡父の足跡みんな消し
忘れたい過去私を離さない
通い馴れ副院長の笑顔見る

姫路市　人見翠記

夕立に一息入れたり草も木も
しのび寄る秋の気配を風に聞く
棉の花　月見草に似たる姿なり
醍醐味は冷酒に鮎に川の床
団扇絵の涼しげなるを部屋に掛け

竹原市　森井菁居

旅人の証　土鈴が又増える
やんぬるかな青年の合理主義
Uターンを思いとどまる夕焼けや
ビジネス万歳　一期一会を大切に
長電話よろし長女の青春譜

竹原市　岩本笑子

露草のふれてはならじ紫よ
鈍行のそろそろ稲も見頃なり
似合わない靴だと思う向い側
みどり児よその瞳に写るもの聖し
うちの子のいない運動会の旗

尼崎市　春城武庫坊

花博を真似て猛暑のロングラン
夏送る祈り言葉よ風の盆
満月に影を貫って散歩する
平成予測　昔話はほどほどに
御大典こんな言葉がなつかしい

尼崎市　春城年代

少し難ありつがる林檎のお年頃
遠い記憶を九月の風がさそい出す
敬老の番組あふれいて疎し
二階と階下でぶっ倒れて昼寝する
両の手を握られてから思い出す

八尾市　宮崎シマ子

鼻低い天狗で腰もひくくいる
どの文もみんな貴方に当てて書き
女のくせにと母の口癖大ジョッキ
久しぶり逢うた友より若かった
検診の再度の通知来て慌て

八尾市　鷲見章

海遊館ふと水槽の活作り
祭壇で微笑んで居る登山帽
皮下脂肪ベルトの穴にある憂い
髪染めてカルチャー多忙ループタイ
部屋割りにまこと運良き窓の景

奈良市　天正千梢

世間と言う書物で勉強しています
北極星見失わずに生きて来し
しあわせを築く何度も手を洗い
石段の角やわらかし室生寺
月見草少うし夜が長くなり

奈良県　長谷川春蘭

好きは好きなりに飽きも来し冷奴
鮎ずしの吉野の宿の杉の箸
だめ押しの暑さを渡る歩道橋
まどろみつ時にうつつの団扇かぜ
ガムに似て味はいつしか無き夫婦

奈良県　田中紀美代

よく笑う一家の長い夕ごはん
靴なりと磨いて夫に発破かけ
まごついたままで嫁いで婆になり
堪能な英語でわざわざ恥をかき
由緒ある家柄らしき痴呆症

出雲市　金村青湖

風鈴が馬鹿正直に秋叫ぶ
風止んで蜘蛛の補修を見て飽かず
コオロギの声止み月より妻帰る
耳鳴りに負けぬ庵の虫しぐれ
秋には秋の齢重ねて菊の酒

出雲市　吉岡きみえ

光頭のあれがボスだろ赤い服
居候の猫と涼しいとこを選る
めんどうくさくなって妥協してしまう
いたわりのこころ　たくあん小さく切る
風鈴の音がかすかであさきゆめ

出雲市　園山多賀子

償えぬ罪断ち切れず芙蓉咲く
ふたごころ妥協の線に思慕一つ
原爆忌祈り続ける夾竹桃
ねむの花軽いいのちを蔑まぬ
過疎守る母在り国旗掲揚日

出雲市　石倉芙佐子

赫々と吾が身を染める曼珠沙華
秋桜　幻となる月の径
私には情け知らずの一段目
一段ずつが容易ではない蝸牛
目覚めても夢のつづきの花芒

堺市　板尾岳人

咲き誇る花を盗みに男下駄
コスモスが咲いているので旅に出る
夕焼けに花芯をのぞく赤トンボ
コスモスと太宰治と花鋏
コスモスが大へん好きな土門拳

堺市　柿花紀美女

自然保護　割箸論議までされる
ウサギとカメ例に引いても子等困り
ラーメンをさも旨そうなコマーシャル

鯨尺つかって母の座りだこ
老い二人切り売り大根冷奴

神戸市　中村ゆきを

大の字に寝て行く末の雲を追う
秋の夜の心に貨車が過ぎて行く
うつらうつらと病室の午後が過ぎ
優しさの裏目裏目に陽が沈む
コスモスを抱いて倒れた知恵おくれ

神戸市　山口美穂

飛行雲がわたしのイライラを笑う
じゃんけんぽん塾通いの子の憩い
門限はないけど老母が待っている
ストレスの訳を知ってる腕時計
脇役の気配り霞草の白

守口市　野呂右近

減塩の醤油で今日も冷奴
雨乞いはしたいが酸性雨はいらぬ
あんたもかわしもだ老妻拝む日も
尊厳死も話して二人の秋夜長
我にかえり天を仰いで消す邪心

守口市　羽原静歩

ブランコに明日の夢がゆれている
ロンドンもパリも近い糸電話
始発駅終発駅も萩の花
遍路笠　一期一会の空を見る
蔵書印昔の恋が生きている

箕面市　椎江清芳

見栄と無駄積んで長持唄がゆく
凡人が村一番の樹に登る
親と子の対話を真似る九官鳥
神様も夏はビールを召し上がる
汚された川で河童の五月病

箕面市　坪田紅葉

川床のせせらぎ涼し鮎の膳
車窓より山の表情　夏の風
涼しさに話もはずむ川の床
川柳と俳画たのしい老後です
墓まいり今年も元気で皆揃う

吹田市　栗谷春子

火の夏を越した命を量る秋
人間は出来たが惜しいことをした
そうめんと蕎麦でもめてる夏休み
ラジオ体操まだつづいてる安堵する
信じては疑いうたがいつつ信じ

吹田市　茂見よ志子

預かった孫に宿題ついてくる
通勤に便利な路地裏出たがらぬ
婚の荷に新車もあると村雀
乾杯へ前途の暗いのも交じり
利回りでどうのこうのと釣りにくる

吹田市　井上照子

ボランティア我が老い先も斯くあるか

鬼あざみ針何本も貴婦人か
大凶を恐れる五月母が逝く
占いも百度まいりも裏切られ
ローテーション組んでベッドの母を看る

松原市　佐藤奏月

古手紙　恋の化石を見るように
新居からテレホン愛があふれだす
娘の家のピアノはすでに他人めく
息子が一人できたと思うことにする
お初人形泣けば私の首うごく（文楽「曽根崎心中」）

松原市　小池しげお

甘い話へ片足だけを乗せておく
庭園を賞めると下駄が置いてある
ポチ袋千円札が二枚ある
予約席連れの女がよく喋り
心配をするなと警察から電話

豊中市　辻川慶子

缶ジュース山には山の風があり
輪を潜るイルカに遠い海が見え
日帰りの小さな旅に萩の寺
声援はどんじりの児に天高し
よそ事と軽く読んでる週刊誌

豊中市　吉田あずき

二十一世紀蟻より賢いキリギリス
レジの籠　家族構成見えて来る
女三人あれだけ笑う事のあり
政治家の呵々大笑に御用心
あずけてる片腕時々不在なり

弘前市　真喜内實

野の花の一つにそっとなるもママ
向日葵もそよぐ風ならママを招べ
娘を送るあわい一つの恋のよに
父の眸をはばかるりんご母手入れ
シャープペン誰にも青い心を出す

弘前市　村田善保

葉鶏頭時雨れて秋の彩となる
喜寿傘寿米寿　余韻の如き味
玄米と目刺しの朝に幸があり
花の種蒔いて楽しい夢に酔う
幸せな涙で頬も温かい

寝屋川市　江口度

風鈴も無口になった熱帯夜
足跡を残しかわうそ消えていく
いやなことすぐに忘れる紅生姜
悪妻かゴールを少しずつのばす
美談じみ怖いと思う肝移植

寝屋川市　柴田英壬子

菊ひらく話をこじれさせないで
生駒山系偲ぶ人あり今朝の靄
夜間飛行　恋知り初めて覚えし名
秀才へ貢ぐ女のつまみ喰い
素晴らしい頭脳は助手が持っている

寝屋川市　稲葉冬葉

ウインドー最短距離にある高値
気持はあるが世間が狭いことを言う
冷凍のパンのようには生きられぬ
家を出る決心　妻よお前もか
厚化粧おとせば歳だなあと思う

寝屋川市　岸野あやめ

花博の花は私語する暇がない
孫連れて海遊館は別世界
女房はつまり豆腐のようなもの
週二度の郵便船を待つ港
豪華船神戸の水を仕入れてる

和泉市　西岡洛酔

霜月を変らぬ歴史の星が降る
日溜りを少し空けとこ孫が来る
嫁の座の資格へ秋の茄子を漬け
断絶の親子に過保護の甘い過去
ストレスに狼煙を上げた胃の痛み

高槻市　川島諷云児

自分でチンしてくださいと妻のメモ
身の程を知り風下に住み馴れる
限りある余生を急かす鳩時計
片意地を張ると道幅狭くなる
すぐ怒鳴る癖が抜けないプッシュホン

高石市　浅野房子

秋風に人が恋しくなる子猫
雑音に紛れ忘れていた痛み
詩心枯れてしまった秋桜
多情多恨泣くのは私だけでよい
ねむの花咲いて心に灯が点る

宝塚市　丸山よし津

しみじみと健康の良さ回復期
ピーポーの音にたじろぐ人の群
使わなくなって切れ味悪くなる
蹴り上げた毬は戻らず空は澄み
振り向けば影はしっかりついて来る

有田市　松井かなめ

神前の誓いわるびれもせず離婚する
引越し車　神様抱いて発車する
花博の蝶の館で蝶が死ぬ
話はずむと手の内見せて馬鹿にされ
天神さんの近くに住んで無信心

茨木市　井上森生

旅を練る岬伝説とシーグルメ
天高くまだまだやりたい五十肩
五十路とて負けぬ流行のスニーカー
二人には花と緑と愛の年　（祝結婚）
頂きの風を気にせぬ雲の上　（祝定年退職）

静岡県　薗田獏沓

減反の田で汽車を見送る案山子達
栗のイガ笑って見送る汽車の客
関西弁身につけ旅の装を解く

ネクタイの歪み直した赤い爪
罪深い人間　羅漢の前を行く

広島県　藤解静風

誘われてみたい今夜のおぼろ月
床に入ると用事を思い出す妻で
にっこりと笑ってナース針を刺し
生活のリズムとなって薬のむ
晩成の相へ期限がきてしまう

海南市　三宅保州

交際の広さに欠けている深さ
窓口は一段高くなっている
消すことはできぬが忘れられる罪
ブラックコーヒー飲んで私に鞭を打つ
妥協する度に曲ってゆくレール

香川県　松村迷観子

せめて子に老いの荷物は負わせまい
超特価　大の男が近よれず
逆縁という順番に狂わされ
女性上位そこから非行の芽が育ち
アメダスが明日の行事の邪魔をする

倉敷市　田辺炙六

虫鳴いて暑さしのいだ御挨拶
人を恋う笛が上手に吹けません
星影のワルツで同窓会終る
花嫁の化粧に団扇風をやり
虎杖笛旅愁孤独の背を裁く

和歌山県　岩崎瑞穂

遅すぎた決断幸運去ったあと
返答が咄嗟に出ない血のめぐり
正論を吐いて淋しい孤独感
花形もラーメンすするドサ回り
酒呑まぬ男の聞かす渋い喉

島根県　西村早苗

夢が消えて大きな欠伸出る
寝るだけの家だとふっと愚痴聞かす
踏台にオヤジをさせてネジを巻く
忘却が続くわびしい七十一

今治市　越智一水

花ばさみ恋の来る日ははずむ音
恋に爪つませてうとい世の動き
泣きごとの電話自信をもてと言う
田をひとつ売り奥さんと言われ出し

岸和田市　福浦勝晴

うたた寝の素足に絡む秋の風
なつかしい思い出となる辛い過去
帯留を咥えた口で指図する
金釘流で思いのたけを置き手紙

大田市　藤田軒太楼

次の手はとっくり打ってある余裕
珍客は予想通りのお酒好き
言い度くてうずうずしとるじれったさ
ぎこちない話に嘘が盛り込まれ

うっかりと滑った口がふさがらぬ　玉野市　小谷仙山

老夫婦事有る事に小そうなり
根掘り葉掘り他人の事は面白い
お隣へもらってもらった釣成果　諫早市　原田メイシュン

美人ではないが俺にはすぎた妻
年金のくらしに孫の多すぎる（十三人目誕生）
パチンコで負けたが演歌覚えて来
倶会一処　俺も会いたい人がいる　町田市　竹内紫錆

幼稚園　祖母が録画の腕を上げ
握り飯でいい運賃はドンとかけ
ドーム球場が日焼けを薄れさす
かなの名を貰い合格すぐ見つけ　倉吉市　渡辺菩句

波が僕に歌ってくれる唄書き留める
運がいいのは枯山水の石になる
エンジンを動かすコーヒー呑んでます
庭の木に珍客つくつく法師さん　静岡市　渥美弧秀

ブランコを漕ぐ孫だけの蒼い空
自然流の暮し豊かな詩と楽
ベッドから浮雲を追う視野一ぱい
ショパン弾く窓に吹く風秋運ぶ　静岡市　安本晃授

欲のない笑顔が妻にある平和
告白をしてから独楽はよくまわる
古里の納戸に母の涙壺
過去の傷舐め合っている欠け茶碗　唐津市　山口高明

父さんがトイレへ新聞持ってゆく
ピカソより吾子が描いたクレヨン画
縫代におんなの妬心隠れてる
女には無い淋しさがある男　唐津市　浜本ちよ

夫の影にまつわりついて行く余生
法師ぜみ秋はそこにと慰める
あでやかに咲いて見せるも虫の為
甘党と辛党同じ胃を痛め　出雲市　久谷まこと

変身をしても周囲は振り向かぬ
古里に残した恋は色褪せぬ
待ちぼうけ母は白髪に気を配る
老いの字がやたら目につく長寿県　出雲市　小白金房子

屋上の夜景わたしをはなさない
タレントの税は笑顔でかせいでる
無花果へ期待夫婦のパック詰め
掃き終えた庭へ木の葉のうきもよう　出雲市　園山良子

バーコード秘密抱えてピーッと逃げ

白線の内側いつも揉めている
老眼鏡あなたの傷も見えてます
愛されているのにひと言多い妻

岡山市　井上柳五郎

よくのびる爪に月日の早い老い
町内に有名人と自慢げに
とりあえず電話ですまぬ義理となり
思い出へ歩み寄らせる虫時雨

岡山県　岩道博友

恥ずかしい記事の想い出　古日記
蟻の列　薬を播く手がうら悲し
同窓の名前が三ヶ日まだ出ない
つまずいた石にも定位置あると言う

岡山県　花田たけ志

楽観へ数字がけげんな顔をする
相談をふところにして乗る話
これからの調子に水を差しに来る
年金が暮しの上限知っている

岡山県　松本元江

そろりそろりと衣替えして山暮れる
螺旋状に木葉狂女のように舞う
りんどうのむらさきに合う里の径
今ここにある幸せと向い合う

竹原市　信本博子

大三島吟行
夢乗せてフェリー滑る銀の海
ひょうたんもむすびも楽し瀬戸の海
楠の昔話にあきもせず
水軍の魂ふわり付いて来る

竹原市　岡本清水

むずかりも泣くも笑うも孫は星
ボケ初めまだまだわしはボケとらん
農業を継がぬ子二人頼母しき
桔梗とや内気な乙女　陰に咲き

西宮市　瀬尾六郎太

皮肉だね呉越同宿　甲子園
先取点ものかわ若さ甲子園
このところ世界地図をばよく学び
千夜一夜　I&Qお静かに

西宮市　秋元てる

歯ぎしりも総入歯ではままならぬ
縫い上げてにっこり母の糸切歯
汚染でもこの地球がいい住み馴れた
出世がしら何時尋ねても留守ばかり

大阪市　黒田真砂

オバタリアン自認している旅鞄
ぼちぼちの余生へ憎い消費税
欲しいものまだまだあって死に切れず
時代錯誤して老兵は消えて行く

大阪府　坂口公子

選ばれる花の舞台の裏の舞
帯巻くと亡母を頼りの手が恋し

あんた誰とは五十年振り同窓会
折れ釘流ひょんなところで愛されて
大阪市　渡部さと美

おんな変身　一斉秋へなだれ込み
ドライフラワー仕種もうつくしき老後
口許も目もともゆるむひとり言
角の家の人間模様秋深し
大阪市　寺井東雲

恐怖症エレベーターも遠慮する
赤い糸長くもつれて親なやむ
忍の字を胸にいだいて苦労する
うれしさは三途の川の橋が落ち
大阪市　塩田新一郎

櫛の歯がポロポロ集う同期会
少くて淋し多いのも嫌な血圧剤
もう少し金がほしいとこれ本音
赤い花にはきっと秘密の恋がある
大阪市　町田達子

天衣無縫聞こえはよいがちと軽い
セピア色の写真もいつかクイズめき
若者が燃えるロックのコンサート
知らぬ間に日日煩悩に負けている
大阪市　橋元美恵

マンガ読む男に恋はしないもの
母さんのおにぎり知らぬ非行の子
日曜の幸せポーズ　レストラン
母さんの負けよ　と包丁はずんでる
大阪市　冨岡温子

お祭りの浴衣は母の手にかかる
言い切って今更兜も脱がれない
赴任地へ先に流れていた噂
親しさに甘え節度が破られる
大阪市　北山悟郎

わだかまり一言だけでは溶けもせず
動かざる山が病いに動かされ
八月に戦傷しきりにうずき出す
早い朝何時もより義足弾んでる
大阪市　清水利武

「コウリヤ」と泉の町を山車走る
今日止めよ明日はやめよと喫う煙草
親と子の絆が乱れ親を消す
喜びを語る人なき一人旅
島根県　石田清泉

のせかけるつもりはないが褒めておく
旱天に台風が来て愚痴こぼし
台風の前ぶれ術なく待つばかり
さいころも丸く転がる術を知り
島根県　藤原鈴江

あの時の告白今も眠らせぬ
若い気で唄いましょうよ支那の夜
ご自慢は亡母の形見の二重あご
友病んで私の片腕だるくなる

ばっさりと髪切る勇気猛暑です　島根県　北川民子
薬瓶ぶらさげ芙蓉の道かえる
カンナ燃ゆ乗る人もなし無人駅
歳月は流れ風鈴吊り忘れ　鳥取県　土橋はるお
がっぷりと親父の海に組んでいる
荒壁が父の似顔絵かも知れぬ
嫁に来て漬物石で試される
よっこらしょ父がカメラの中にいる　鳥取県　谷口次男
ウナ丼を食いライバルに果たし状
砲火止み月の砂漠が流れ出す
親切で幽霊に足つけて貸す
赤信号点滅させてホタル飛ぶ　鳥取県　さえきやえ
しおんが好きしおんの咲いた秋が好き
秋かいどう咲くと亡き師のほほえみが
朝々の鏡がこわいことをいう
足るを知るメガネに秋が美しい　鳥取県　乾喜与志
青い梨瑞みずしさを秘めたまま
仏様にみちびかれてる技がある
八十歳のノルマ一合だけにする
大根を食べる夕餉がにぎやかい　和歌山市　木本朱夏

ゆく夏を未完のパズル抱いたまま
吉祥天望みを抱いてよろしいか
竹人形紅い帯なら欲しかろう
桃剝いてうすき縁と思うなり　和歌山市　山田高夫
親離れ子離れ舫い解く港
中東の地殻変動余波が来る
泳いでる夢をみている冷凍魚
過労死という人間の使い捨て　神戸市　仲どんたく
何トンの中の一尾として食われ
おたっしゃで友から水をあけられる
三猿のマスクにあらず風邪の朝
酔眼の袖を引かれた無重力　東大阪市　崎山美子
帰るかと思えば座り直すだけ
風鈴が安眠している熱帯夜
エリートの個性は高い評価える
子育ての台本親の夢ばかり　貝塚市　行天千代
若い声といつも電話でまちがわれ
夾竹桃　水間電車をすれすれに
日の恵み花も子供も良く育ち
お人好しの家系がつづく孫もまた　河内長野市　井上喜酔
駅前の今日のおごりは口封じ

マスコミを敵へ回して気が強い
青空で背伸びがしたい登山靴
葬式の帰りにステーキフルコース
高知市　北川竹萌

行き迎え自由に朝の散歩伽
言訳の正しさ許す目を合わせ
故郷遠く定退の地に家を建て
曼珠沙華囲む彼岸の墓参り
富田林市　片岡智恵子

ふと虹に出合って得をした気分
流行の川は激流濁流に
夕空に残暑のほてり月やせる
遠い日の機影を想うくろい鳥
富田林市　松本今日子

雷の落ちないうちに寝てしまう
ワープロは嫌い万年筆が好き
雨不足心変りの出来ぬ花
駅弁を一人で食べるキッチンで
出雲市　板垣夢酔

金銀賞キラキラ照れる菊の鉢
糸切った気ままな凧の水遊び
柿熟れて女も熟れて嫁に行く
玉子焼上手に嘘を包み込む
米子市　茂理高代

モナリザの笑みを真似てる今日の縁
盆が来てかなしさ背おう赤とんぼ
天高しお面も並ぶ秋祭り
水かれて水かけ観音熱を出す
米子市　金山夕子

ポリープに足を掬われ三枚目
病院の天井見てた十五日
見舞客　家族の愚痴も置いてゆき
こちらから折れるほどの人でなし
米子市　白根ふみ

清らかに生きるせりふを一つ持つ
遠景に少うし苦い水がみえ
曖昧な頷きはせぬ友の肩
精霊の心のこりか岸へ寄す
広島県　田村新造

古希祝う酒しみじみと妻と酌み
動乱の昭和を生きた古希のしわ
また一人シベリアの友欠けて秋
牛の仔を売るのは孫の留守のうち
岸和田市　清野こう

祭提灯ゆれて祭の日が迫り
伝統を守る祭の子の法被
安否知る友が送ってくれた梨
貧乏性の母で一日落着かぬ
寝屋川市　平松かすみ

マイカーで一日孝行して貰い
九十の目標すぎてどないしよ
長生きを愚痴るもったいない話

高齢の姑を連れてる三姉妹　豊中市　一瀬福一

内の娘に限って限ってが怖い
手の中の己が鼓動の螢持つ
山売って風の行方を見失う
その先は知らぬ親子の肩車

弘前市　小寺花峯

三食を欠かさず今日も鳩が飛ぶ
さて乾杯持ったビールの泡が消え
原色を出せない妻の厚化粧
青空の下では蝶を殺すまい

奈良県　中原比呂志

家と駅　腕も違っていた時刻
税務署の表彰もなく定年日
失業も納税の義務つきまとい
職安の机で希望すれ違い

茨木市　堀良江

いつの間にか人のお荷物背負ってる
よい人に拾われますよう忘れ傘
スマイルとパールお疲れ気味の秋
閉会近しハイビスカスは真っ盛り

川西市　松本ただし

新しい言葉に脅えてゆく孤独
青磁にも泥人形にも馴染む土
口裏を合せば闇が深くなる
平等の尺度が狂っているあせり

悲しみに一線　広角に生きる
虚と実と鷺草は今翔ばんとす
この辺が他人と急に口を閉ず
映像は桔梗の青に染まりたり

守口市　結城君子

葬式が終ると仏あくびする
一言も重いと言わぬカタツムリ
ホッチキスで時々妻の口封じ
娘の結婚俺もとうとうペンギン鳥

黒石市　相馬一花

野良猫に高血圧の棒を振り
直線の箸なればこそ美味い膳
咳をする母に電話が長くなる
子が巣立ちだんだん小さくなった鍋

福岡県　横地正好

遠いでは遅刻の理由にはならぬ
悲しさを笑い飛ばした父も老い
台所男は冷蔵庫だけに用
留守頼む犬 猫 鳥に老い二人

藤井寺市　福元みのる

私の地図に咲くのは曼珠沙華
風やさし九月のミシンよく走る
猫の声猫なで声の友がいる
秋桜やっぱり電話まっている

松江市　竹内寿美子

奈良市　米田恭昌

カラオケの社長の十八番とっておく
四面楚歌社長となって知る孤独
窓際の人にも配る熱いお茶
泣き顔が美しすぎる不幸せ

寝屋川市　堀江光子

マンションの黙ったままの長い留守
のうのうと留守番という夏休み
押入れに物ありすぎる探しもの
投函をしに秋風の人となる

豊中市　上田登志実

主婦の座を下りて嫁にも遠慮がち
馬鹿にしていた年金で救われる
病気して禁煙をした儲けもの

岡山県　池田半仙

立山の雪も旅情の一頁
招待状結局金の要るはなし
落柿の数にあきれる当り年

和泉市　岡井やすお

泣かそうと仕掛けた国が泣かされて
赤十字のこころ示せば怖くない
総論は即決各論には時間

鳥取県　津村八重子

ハンドルよ急くなお守りゆれている
生れかわって落葉よ春にまたおいで
ジャンプ傘短気なおれと馬が合い

岡山県　千原理瑛

お金では買えぬ幸せありがとう
探しもの眠れぬ夜にもってこい
整理整とん　うっかり出来ぬ探しもの

伊丹市　山崎君子

熱帯夜丑三つ時の水の味
墓まいりも一度燃えろと彼岸花
水とんぼわたしと同じ頼りなさ

和歌山県　西口忠雄

結婚もところてんならまだ早い
記念写真気性あらわす中と外
トラクター離さぬ嫁の免許証

十和田市　阿部進

心にも綺麗な花の種をまき
ゆとりなどないから土日ゴロ寝する
里の母　蕾の孫に夢たくし

境港市　細木歳栄

再会の余韻に浸り飲んでます
再会を約せど明日の運命など
変心を責めてみたとて褪せた花

岸和田市　芳地狸村

印結ぶ女行者の青い空（大鳴山登山）
好きですと一度書きたいひとがいる
短冊へ奈良で選んだ墨をする

大阪市　松尾柳右子

四世代気ままに生きて百を越し

定年のない手職にも医者通い
人生の妙味楽しや友があり
大阪市　坂本仙吉郎

山陽は母を背負うて箕面の滝
花博を子に連れられて車椅子
山のエリアに煙吐かない義経号
河内長野市　植村喜代

岩湧山もう頂上は秋かしら
再会に戸惑うている不思議
その先は聞かない言わない他人の仲
大阪市　松永すすむ

皿一枚割って地獄の井戸の底
ママの顔見て迷い子が泣きだした
泣いていた子が笑いだし皆笑う
岸和田市　三輪通彦

強がりを言いつつ子には期待かけ
主婦の眼になって娘も値踏みする
趣味多彩呆けるひまない老いの日々
倉敷市　井上富子

いい知恵が浮かんだらしい指が鳴る
時々は苦汁を呑ます喉仏
内縁と呼ばれて生きる泣黒子
出雲市　竹治ちかし

かき捨てる恥は沢山持っている
やり残す事多くして季はめぐる

我が傷は隠して他人の傷覗く
鳥取県　羽津川公乃

こだわって下着は白と決めている
もう一度夢が見たくて賽を振る
夕鏡いくさの済んだ顔のぞく
守口市　森川まさお

月のない飛驒の土産屋戸をしめる
手前味噌という名の味噌を句の友に
高山の駄菓子屋お茶をいれてくれ
出雲市　小玉満江

ベートーベン聞いて書棚を整理する
墓掃除キラリ蜥蜴におどかされ
八月の忍耐今は暑さだけ
鳥取県　田村きみ子

合格の涙娘よアリガトウ
くやし涙それは一時だけにする
クッキーを焼いてる姑は楽しそう
大阪市　神保拓生

曖昧な笑いで愚痴を聞いて置く
淀川を見下ろす土手の彼岸花
笑ってる君も何時かは呆けて来る
島根県　高野律子

真実を語る言葉は一つだけ
無理ばかり一人占めする母の肩
笑わねば今日一日が又暮れる

自選集

中東の戦に遠く酔うている
一も金二も金三も金卑し
消費税誰も言わなくなりました
年金の一万円ははかな過ぎ
生きても地獄死んでも地獄阿呆かいな

工藤甲吉

少年の意地後添いと折れ合わず
橋がつき瀬戸の花嫁もう居ない
男らは戦が好きで黒い布
髭面に信頼できるのも外科医
夕焼の歌は知らない塾通い

月原宵明

中秋の空気がうまい肌ざわり
よき兆　叫び続けた核　領土
アメリカの怒りへ国連従いてゆく
乱高下株は糞とも宝とも
玉ねぎを吊して一千万の土地

大矢十郎

御先祖の位牌に生きざま覗かれる
どちらかが馬鹿になっている夫婦
巣立皆させてふたありだけの話
うす味の情けしってるめし茶碗
無理通るとっても淋しい煙草の火

岩本雀踊子

昔から大事にしてる男下駄
そうだったのかと思いなおしてから芒
困ってる人と相合傘になる
大工さんがじろじろと見るうちの家
ふる里の音によく似た雨が降る

小出智子

踊る馬鹿いるから笛を吹きたがる
熱帯魚煮ても焼いてもいただけぬ
ユーターンした娘がシャネル匂わせる
国ゆたか酒の消費が伸び続け
切れそうで切れないくされ縁続く

小林由多香

O型の妻で残高気にしない
何が白露か寒暖計は熱帯夜
のど自慢　九十二歳が鐘鳴らす
駅長の帽子は大事にとってある
風九月　朝顔ひそと咲き終る

松川杜的

標的は第二志望に置いてある
富士山が画ける　クレヨン買うてやる
弟さんは話がわかるいい人よ
奥さんにレールを敷いておく野心
九分九厘　医者に一厘預けられ

遠山可住

旅に出るプラン机上で終りそう
敬老日だけはとし寄り気が晴れる
昔なら無礼　言葉選り給え
ひとり暮しの効能　時にはうらやまし
好景気つづく日本へ矢がささる

藤井明朗

黒式尉はずせばまろい秋の風
鬼の面外して青い海に佇つ
賞賛へ天狗にならぬ身を慎め
やっと素顔で宝の山に佇ちつくす
鬼の面つけて通した日を思う

野村太茂津

マンションに住んで足から陽が昇る
定年の楢山までのスケジュール
灰皿へ煙草もみ消す赤い爪
同郷の訛りが温い屋台の灯
貰い手の無い娘へ老後養われ

有働芳仙

まだ生きとれと健康を与えられ
喜寿傘寿の関所を咎められず出る
ぽっくり寺まだまだお参りはしない
結構なことには呆ける暇がない
としよりに効果は薄いコマーシャル

金井文秋

生かされている仕合せに気がつかず
空間をクッションにして生きている
すがすがしいじゃないか賞なぞない僕だ
貶し合うことも夫婦の楽しみに
笑うまい父を着て立つ木偶の坊

久家代仕男

スポレクの標語が走った日々思う
喜びは素直にうれしい席がある
又今日も不自由な足連れている
秋高し妻とやっぱりぼやき合い
気がかりな言葉は伏せとく意地はある

児島与呂志

蟻の列乱してしもうた竹箒
平熱に戻って落語面白い
優秀な奴から欠ける同期会
電話一本かからず留守居無事終り
定年へ働きすぎの腰痛む

野田素身郎

樽の水に九月の深さ知る
虫めくる九月のページだとおもう
この色の九月を溶かす曼珠沙華
山少し九月へ高くなって旅
一灯にペンは九月の重さ知る

水粉千翁

ああ我も押えのきかぬ炎なり
風九月訪れ人のない小路
悪の字を積んでも悪になりきれず
夕焼小焼　父の遺言がまだ来ない
あの蟬も経を習っているのです

波多野五楽庵

看護婦の若さに朝があけてくる
食べて寝て食べる養鶏場に似る
食欲がないぜいたく自分を叱る
食事ごとに通うてくれる妻待ちわびる
同室五人それぞれにある人生

入院（白内障手術）

正本水客

手きびしい鏡で秋を見ています
鏡拭く指から夏が遠くなる
手鏡に危ないものが見えている
夕焼けの余熱を溜めてゆく鏡
よんどころなく秋の鏡と妥協する

八木千代

朴葉みそしみじみ香りなつかしむ
しみじみと山の冷気が快い
晩鐘へ大和三山無に還る
此のひとの無口の底の目を怖れ
秋の夜　憑かれしごとく旅人読む

藤村〆女

種の無い手品知ってる亡母だった
睡蓮を宿に仲良く鯉一家
批判はどうあれ真すぐい道を行く
体験をペンに喋らせ語らせる
見て見ない振りをするのも親ごころ

本田恵二朗

後を押す亡妻の影あり余生とや
台風が過ぎて六甲美しい
満員の背で読んでる漫画本
終点の茶屋で休息してるバス
井戸水を汲んで夕焼け見て帰る

黒川紫香

旭町　豆秋さんが酔うてはる
あの世から多久志名で来る丹波栗
小松園来たので句会始めます
梅里さん山中節をやってえなぁ
大萬で好郎はんを待つあわび

高杉鬼遊

口八丁手八丁　包丁錆びつかせ
個性あり過ぎて読めない字が並び
腕前はさておき口数多すぎる
涼しさを五百羅漢の暗がりに
嫁姑笑ってつつく秋ナスビ

西田柳宏子

求人広告バイトはビラで用が足る
普茶料理の味が引き立つ寺の石
人妻の愚痴がこぼれたクラス会
台風のニュースを晩酌聞いている
作文へ書かれて困る事がある

辻白渓子

コマーシャルの意味を老妻から問われ
白いものばかりが目立つ老眼鏡
老後のこと考えたらと子に言われ
秋の灯に妻には妻の趣味があり
残ってた覇気を老妻危ながり

阿萬萬的

川柳塔碑供養を挙行

川柳塔社同人・川柳愛好家の物故者を祀る「川柳塔」碑の法要が十月六日午後一時から、西尾栞主幹はじめ同人・誌友有志と新合祀者遺族らが参列、高野山奥の院大霊園の高井良行副園長の読経により挙行された。

今回の新合祀者は、昭和六十二年十二月以降に死去された別項の二十二名で、菊田いさむ夫人の英子さん、尼緑之助長男の礼次氏、栗原隆夫人の富子さんら遺族四名が参列、川柳塔社関係では大阪府・和歌山県のほか島根県・倉敷市・竹原市から四十名が参加した。

当日は台風の通過が予報されていたが、法要の時刻には晴天に恵まれ、終って一行が奥の院に参詣する頃は一帯が深い霧につつまれた。

なお、参加者有志は普賢院に宿泊し、翌七日早朝、前高野山真言宗管長の森寛紹師親修の勤行に参列した。

〈新合祀者〉 大山と金・草刈堕駄・市場没食子・木山遠二・井阪東天紅・尼緑之助・新谷笑痴・脇田米朝・川村好郎・岡崎祥月・中村優・長野文庫・高橋操子・竹中綾珠・中田白李・土居耕花・高鷲亜鈍・栗原隆・新谷忠昭・吉原紅月・菊田いさむ・米沢暁明

—同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

西出楓楽

今回は、うしろの方から読みはじめ、秀句をピックアップしました。

炎天に負けぬルージュを描いて出る

金村青湖

だらしない身なりでいると、生活も怠惰になってきます。そして暑さも倍にも三倍にも感じてしまいます。自分を励ますために、ルージュを描く動作が生き生きしています。

胃袋へクスリがたまり秋になる

松本はるみ

夏を乗り越すために頼ったクスリ、その中には食欲不振を補う胃腸薬や、ビタミン剤もあったことでしょう。けれど結局、それらはさしたる効き目もないままだった、という状態が、とてもうまく詠まれています。

平凡を積んで女房は幸とする

竹治ちかし

貞淑でしっかり家庭を守っている奥さん像が、くっきり浮き上ってきます。現代では、見られなくなりつつある女性の生き方と言えましょう。

矢をつがえ私のねらう的がない

一瀬福一

肩の力を抜いて生きれば楽になるものを、自分でもどうにもならない、持って生れた性格なのでしょう。関接的な表現で、いらだちが的確に言いあらわされています。

生きるのが上手時どき馬鹿になる

田辺炎六

前の句の作者とは、対照的な生き方と言えましょう。年をとるほどに、このように生き上手になりたいものです。

あいまいな長い一日蟻地獄

森川まさお

誰にでもときどき、こんなあせりの日があるのではないでしょうか。蟻地獄にはまり込んだ様子と似ている、という見つけがよく効いていると思いました。

良い事がありそう淡い花選ぶ

茂理高代

淡い花を選ぶとは、心にくい表現です。はっきりした個性の強い花より、何もかも包み込んでくれそうな淡い色の花。予感はきっと的中したことでしょう。

無抵抗主義を理由にして無策

山田高夫

無抵抗主義の本当のところは無策、ということを見破られるか、温厚なお方と見てもらえるかは、人徳のちがいでしょうか。

良識のボーダーライン下降する

板東倫子

一歩外に出ると、この句の風景がそこここにあります。さらりと詠んであるため、かえって読む者に、作者の怒りや嘆きのため息が伝わってきます。

相槌に疲れ公園散歩する

田中輝子

さきの〝時どき馬鹿になる〟作者と同様、上手に生きている人と見受けられます。前者はたくましさ、この句にはペーソスが感じられます。

胸三寸あらたな空気つめておく

津村八重子

ものごとに行き詰ったり、スランプに陥ったとき、いつまでも胸の中にもやもやを詰めたままでいると、その状態を抜け出すことが出来ません。胸三寸にあらたな空気を詰めて心機一転にのぞむところに共感を得ました。

酸欠の街で噂に耐えている

小谷美っ千

ひとの噂になっているときの、気づまりな様子が、酸欠の街で言い尽されています。

天を仰いで駄目な男の溜息よ

槇田英詩

自嘲の句でしょうか。けれど背を丸めて俯いてつく溜息でなく、天を仰いでついているところに、明るさと救いを感じました。

川柳太平記（150）

川柳の群像

金泉萬楽

東野大八

考えるうちにジャンジャン株上る　萬　楽
相場欄隣の株がよく上る　〃
北浜にあいそがつきて底となる　〃
北浜の柳へ欲を忘れたし　〃

いまや悽まじいばかりの財テクの時代である。それだけに筆者のあたりでこの風が吹くと、しきりに「金泉萬楽」の柳号が見え隠れするのである。

「いい柳号で羨ましいですな。お名前を見ただけでもホクホクしちゃう。それに株屋さんときている。大いにあやかりたいですな」とむかし大陸川柳同窓会の集いの折のスナックで、そう水割りを手に話を交わしあったのがこの人との初対面。その折、二、三人の華やかな女性にとりまかれてござった。以来、筆者ひとりのこの人へのニックネームは、アチャコの相棒漫才師の「エンタツ」。

「女とは可愛いいものである。男を愛し、女は愛される、というのが真実である。女とは怖いものである。女を裏切れば、夜叉の如く荒れ狂い、疑心はいよいよつのる。女とは強いものである。表面なよなよとしていても、意外に辛抱強く、いざといえば度胸がすわる。女とはわからぬものである。口を出る言葉は、嘘かまことか、その表情は喜びか悲しみか。ああ女とはわからない。女は魔物若く見え老けて見え　萬楽」

（『北はま』女百態）。

女性を侍らせ、ごきげんの丹前姿の〝萬楽師匠〟は、こんな一文があるだけ、けだし相当な〝女遍歴〟の持主らしいと、右の初対面のあとでイヤでも推測したことだ。

こういうお人柄をそのままに、この人の句は軽妙洒脱ユーモアと軽味にかけては番傘社中では〝散二川柳〟と好一対だろう。昭和38年から43年代まで、番傘一般近詠選者を務めたが、これは岸本水府在世の頃で、誰しも本格川柳の旗手は萬楽と認めていた。川柳人萬楽にとってはこの頃が絶頂期であったろう。

本名金泉光三郎。明治32年8月22日大阪市生れ。昭和3年大阪中外商業新報（現日経新聞）柳壇に投句。昭和5年番傘川柳本社同人となり、同8年には初投句の右の柳壇選者となる。同9年北浜川柳会、同18年尼崎川柳会、同28年年大阪証券新聞の各句会選者および柳壇選者となる。

この間、番傘誌上では殆ど休みなく近詠投句。同29年ふたば川柳会（豊中市）、同35年日赤病院番茶クラブ（高槻市）を指導。同40年大阪瓦斯「がす燈」柳壇選を水府から受継ぎ、番傘折鶴川柳会会長、ふたば川柳会顧問となる。また、同年大阪川柳人クラブ会長に就任。著書は『川柳萬楽句集』『萬楽句集・わが家』『萬楽句集北はま』などがある。

北浜の株屋生活六十年、川柳生活六十五年。

昭和34年岸本水府は萬楽川柳をこう語る。

「萬楽君の句をほめる人は多い。特にファンが多いようである。私は萬楽君の句をほめる人の気がわかる。ほんとうに萬楽君の句にはユーモラスな句が多いからであろう。今の川柳に笑いが足りないという人が多い。笑いの句を持ち前という作家は萬楽君一人ではないが、川柳のニュアンスに笑いを忘れてなるまいと言いたい折から、萬楽君の句を褒めることは、今の作家へ鐘を鳴らすことになる。今の川柳には萬楽製の味の素がほしい」

「萬楽氏は本格川柳の主張者であり、旗手として番傘の最先頭に立って全同人を率いて行く気概ある、堂々たる主張を持った作家であることを改めて感じる。本格川柳、番傘川柳を熱愛する信念、熱意は番傘同人、全柳界の知るところである」(昭和47年・近江砂人)。

「すぐ上る株とは無理な相談所
株売れと人間ドックから電話
投機株おんなに稀なよい度胸
ピアノ買う替わりに日本楽器株

萬楽句集『北はま』に収められた北浜百句は株式ブームといわれるいまも、生々として投資投機人の心理と株の町北浜の匂いを発散している。ガス会社を退き江口証券に入社、投機顧問として、証券の大衆化に励みつつ、株界の表と裏を詠んだ数千句から選んだ、北はま百句を、萬楽は証券関係者に特に読んでほしいと句集を配った」(磯野いさむ)。

「昭和62年1月25日、この日は「折鶴新年会と金泉萬楽会長の米寿を祝う会」である。正午近く心斎橋に近いさる料亭に、私達20数名が集まった。その席上へ「本日早朝、萬楽逝去」の悲報が入った。時も時、一同呆然として思わず息をのんだ。

萬楽さんは小柄であったが、昔から実にお元気だった。私はその活躍ぶりを渓んで、ひそかに「スーパーマン」と呼んでいた。

もっとも最近は萬楽さんの健康が、昔ほどではないとの噂を多少耳にはしていたが、まさか急にこんなことになるとは夢にも思わなかった。(中略)

私は昔から「金泉萬楽」をなんと縁起のいい雅号だろうと思いつづけた。しかも本名が「光三郎」。「光」とは「満」に通じる。金の泉が光を放ち、かつ満ち溢れる—である。だからこそ萬楽さんは北浜で大活躍されたのは、一つにはこのゲンのよいお名前が大いに幸いしたものと思う。

また、萬楽さんとは、この30年来、全国各地で催される川柳大会へよくご一緒した。日によって萬楽さんは真面目くさった、妙に取り澄ました時もあったが、時と場合に応じて飄飄とした、巧まぬユーモラスな一面をお見せになった。

ある時、どこかの大会の後の清興のステージへ、乞われるままに萬楽さんは、宿浴衣に尻からげをしてひょこひょこと現われた。一同固唾をのんだとたん、両手を交錯させながら「ムチャクチャでございますがな」と、ポーズをとった。場内は爆笑、また爆笑。なるほど全国に数多くのファンがいるのは、これあるが故だなとつくづく思った」(古下俊作悼文)。

「しかし岸本水府の逝去のあと、萬楽が近詠選者を退いてから、番傘川柳からユーモアと軽味の句が急速に減少の傾向をみせ始め、番傘の句風に変化現れると他から言われた。昭和生れの作家と感覚派作家の台頭による流れの変化、時代の変化だった。(中略)萬楽の本格信念は、生涯変わることがなく、専ら『折鶴』誌上によって、晩年も唱えつづけた、強い闘志を秘めた、偉大な存在だった」(磯野いさむ悼文)。

▼次回は「**平松圭林**」

柳籠裏三篇研究（五丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田甫

81　**江口は白象糀町は鼠**

紀内＝謡曲「江口」によると、摂津江口の遊廓に普賢菩薩の化身である遊女がいて、西行と問答の末、白象にのって西の空に飛び去ったという。

白象に乗って江口を駆落ちし　明三桜3
白象に乗るまで面白い化身　三二17

また、江戸山王祭には麹町から唐人行列が出たが、その中での圧巻は、竹細工の上から鼠色の木綿で覆った大象であった。

木綿十三反ほどで象が出来　筥四11

主題句は、この白象と鼠象を対比させただけのもの。

七久保＝賛。

祭にもけだものを出す麹町　九21

岡田＝賛。江口のこと『十訓抄』などに見ゆ。なお一言、礎稿に遊廓とあれど、当時は廓をなしておらず、遊里とするか、あるいは「江口」とした方がよろし。

82　**嚢中のぞうりを子供直す也**

紀内＝不明。

西原＝寺子屋帰りに「鼻緒」が切れたのを懐に入れて帰り、それを子供が自分で直したというだけのことではなかろうか。

佐藤＝「下足を直す」というのは、芝居用語で、上席へ移動することをいうが、これは単に「直す」とか、「お直し」ともいう。主題句は、一家総出の芝居見物などで、子供客は下足札をもらわず、草履を袋に入れたまま移動することを言うたのではなかろうか。

八木＝本句、花咲一男『江戸の呉服店』に引用あり、越後屋の句としておられる。「越後屋には下足番はなかったようですが、各々受け持ちの小僧丁稚が客の履き物は袋に入れて保管したこと、次の四句で分かります」と。

呉服屋は履き物までも袋入り　苔翁一一秋2

主題句

のふ中に履き物のある呉服店　天八仁5
袋から出すと呉服屋辞儀をする　明四礼9

岡田＝やはり越後屋としか解せず。越後屋としてよからん。

83　**寝所の開眼をするきつひ事**

紀内＝「寝所の開眼」の意味が分かりません。不明。

西原＝三つ布団であろう。女郎にねだられて遂に三つ布団を買って与える。それに初めて

寝るを大仏開眼を援用した。これは大変なことだというのである。

我が夜具へ女郎を寝せるきつい事　二六42

大野＝寝所…寝具披露に及ぶには、表面は何気なくとも大変なことであった。

七久保＝西原氏説に賛。積夜具の客である。

岩田＝「敷初」の儀式を開眼供養に例えたまでと思います。「きつい」は善悪に関らず、程度のはなはだしい様を表わす言葉、「きつい事」は〈大変なこと〉〈ひどい事〉〈あきれた事〉〈すばらしい事〉などの意。

84　**秘事ハまつ毛を動ヵしてそびき出**

紀内＝そびく　人をそびくと言ふハ傍牽の義なるべし又ソビヲカフともいへり撩守の意也といへり（『俚言集覧』）

ないしょのことは、まわりの人に気づかれぬよう、目くばせをして相手を誘い出して、さてそれから…ということであろう。

西原＝賛。ウインク。

青木＝賛。ウインクぴったり。

七久保＝蛇足ながら「秘事はまつ毛」という成語あり。

岡田＝同。当時「秘事はまつ毛」の諺語をよく使用した。

85　**世をすてぬので何ンのかの後家いわれ**

紀内＝「女やもめに花が咲き、男やもめにうじがわく」のたとえどおり、女やもめはにぎやかなだけに、またいろいろと噂のたてられる種がつきない。

「世をすてぬ」は尼になるということではなく、俗世間にまだ未練たっぷりの様子という軽い意味と思う。

西原＝世をすてるは、赤い信女となることである。それもしないし、髪もざっくりと切らないので、話題の主となる。

佐藤＝賛。西原さんが具体的な例をいくつかあげたが、やはりそうでなければ、他人には世を捨てたか捨てないか分からぬであろう。小生、落飾せぬ後家と思う。

岩田＝礎稿賛。「世を捨てる」は出家することを言うが、この場合「世を捨てぬ」は単に〈出家しない〉という意味ではなく、それを逆に用いて、この世に執着している意味合いをこめていると見るべきであって、礎稿の述べた所が適切と思う。

岡田＝「世を捨てる」は佐藤説が原義、ただし摘髪程度でよく、岩田説のごとくなり。

86　**年わすれ生酔水をあびせられ**

紀内＝『俚言集覧』に、「志ハす油をこぼせば火に崇、俗間にシハス油をこぼせば火に崇るとて水をあびせてまじなふなり」とある。

師走に油をこぼすと火にたたり、またその厄払いのためにこぼした者に水をかける風習があったことが分かる。従って句は、年忘れでしたたか酔った一人が油をこぼし、水をかけられたという意である。

年忘れとうとう一人水を浴び　四19

青木＝賛。

師走だと忠盛水をあびるとこ　五五30

忠盛も師走はひどい水を浴び　拾五19

佐藤＝礎稿に感嘆。なるほど青木さんの例句によっても礎稿の適解なることが知れる。

七久保＝賛。現今のように娯楽の多い時代とは程遠い江戸時代のこと。年に一度の年忘れで派手にランチキ騒ぎをしたのである。

岡田＝ひどく酔狂の結果、行燈を倒してしまったのであろう。

▼お知らせ　川柳塔社の会計担当が十月より高杉鬼遊から春城武庫坊・川島諷云児に交代しました。よろしくお願いいたします。

同人特集

四季百句

一九八七―一九八九年（編集部抄出）

春

医者は慰者也というドクターと春の宵　西尾栞
お達者のへいへいへいと春の風　水粉千翁
春うらら思想が右へずれて行く　石川侃流洞
花暦　分相応な春を待つ　西山幸
チアガールのリズムで届く春の風　福本英子
蓋取れば木の芽が告げる春の幸　本間満津子
胸襟をひらいて一気に春を抱く　松原寿子
春だより日本は長いなと思う　河井庸佑
春の水　水車小屋までまっしぐら　渡辺独歩
三月の女のウソのやわらかし　宮西弥生
おかげさま六たび迎えた春やはる　山内静水

春一番　誰かの絵馬の落ちる音　有働芳仙
月うごき春の一樹はおぼろなり　林荒介
四月馬鹿　単細胞を試される　柳原静香
四月吉日　猫が五匹も子を産んだ　宮口笛生
輪の外にいてへのへのもへの書いて春　稲葉冬葉
春や春　産湯の孫が光ってる　玉置重人
春めくや上着を畑に置き忘れ　小谷仙山
ゆたゆたと生きとし生きる春の川　高杉鬼遊
春よこいこいブランコ揺れている　越村枯梢
春の陽へ猫も夫も背のびする　越智一水
仮面脱ぎ忘れて春はたけなわに　春城年代
唇を許して春の野へ駆ける　中原みさ子
春おぼろ記憶おぼろの数え唄　永田俊子
病院の七階で見る春の街　川崎秋女
春の雪　絵になりたくてなりたくて　小池しげお
知恵の輪がするりと抜けた春の風　都倉求芽
春日遅々しずこころなく腹は減り　中川滋雀
すれ違う会釈に春の香がこぼれ　奥谷弘朗
春愁の飴玉一つ口にあり　小出智子

夏

唐突な告白を聞く夏の闇　野村太茂津
ドレミファソ五線譜にない初夏の風　柳楽鶴丸
七月の雨を憎んでいる渡し　板尾岳人
新しい靴で葉月の旅に出ん　波多野五楽庵
まっすぐに生きる真夏の影法師　岩本雀踊子
夏だ夏だと向日葵さんのはしゃぎよう　田中亜弥
やがて夏ねぶた絵武者に目を入れる　斉藤劦
夏休みひまわりほどに子が伸びる　小島蘭幸
サルビアの情熱　夏の陽を弾く　森井菁居
黙とうをすれば広がる夏の雲　舟木与根一
夏休みがとても嫌いなカブト虫　新家完司
忠実な影だけ連れて夏ごもり　西出楓楽
戦友の三倍生きた夏が来る　堀端三男
けだるさで計ると遠い夏の道　桜井千秀
威勢よく飛び込んでくる夏祭　佐藤奏月
高原の夏は短いバスの旅　藤井明朗
逝く夏をハモニカ吹いて惜しみけり　谷垣史好

秋

ひと筋の川の心の秋になる　正本水客
秋の日はつるっと落ちて酒になり　工藤甲吉
天平の屋根がすらりと力む秋　遠山可住
日日好日　秋の色紙に掛け替える　松川杜的
秋ですよ窓は汚れていませんか　江原とみお
秋日和　日本列島静かなり　安藤寿美子
野望ある男と秋の酒を酌む　月原宵明
風鈴を外せば秋がなだれこむ　久家代仕男
白い杖鳴らすと秋が返事して　堀江芳子
ひまわりの影うつむいて風も秋　藤村〆女
紀の川の水が写した秋の雲　児島与呂志
秋茄子の紫紺いよいよ自我に入る　林野甦光
さわやかな秋に押されてフルムーン　神夏磯典子
十月の蚊にも血を吸う気迫あり　仁部四郎
バイオリンの秋の旋律目を閉じる　柴田英壬子
秋風のどこかに亡父の祭笛　春城武庫坊
秋の本屋で少し充電しておこう　吉川寿美

晴耕の鍬の先から秋深む　恒松町紅
なにごともなかったように秋の天　松田中正坊
少しずつ荷を軽くして秋の道　菅井とも子
秋深し風が多弁になってくる　奥山美智子
行く秋に源氏絵巻はしずかなり　奥田みつ子
願いごと叶わぬままに風は秋　嘉数兆代賀
スキップをしてみてごらん秋の天　後藤正子
秋の月むかし地主と小作人　田中叶
さよならが素直に言えた秋の風　森田熊生
天国はかくありなんか秋の色　岸本豊平次
小さな夢育んでいる秋のペン　松本文子
老眼鏡拭きつつ秋の夜が更ける　藤井一二三
時雨れるにまかす祇王寺　秋の色　阿萬萬的
秋の朝　隣の声が透き通る　黒川紫香

冬

新しい屋根とわたしも冬を越す　八木千代
冬の蝶　八つ手の花にひとり言　山本規不風
遮断機の向こうも寒い冬の貌　福浦勝晴

冬枯れのベンチいつもの人が来ず　野田素身郎
冬の庭　石は主役を取り戻す　若宮武雄
銀杏散って冬の構図を確かめる　安平次弘道
宗教家ぶって動かぬ冬の蠅　樫谷寿馬
盲人にそっと触れてく冬の蠅　堀江正朗
牛の瞳に小さな冬が拡がりぬ　林瑞枝
赤髭も偽医者もいて冬の朝　羽原静歩
冬木立みんな祈りの影となり　青戸田鶴
冬が来る前に笑顔を貯めておく　牛尾緑良
珍しい人来て冬の酒となり　宮崎シマ子
冬の陽が何か忘れたままおちる　吉岡美房
雪溶けにどんどん流す冬のうつ　小林妻子
こころからライバル褒めて冬おわる　林はつ絵
冬至かなストンと話打ち切らせ　高橋千万子
冬の月抱いて静かな水たまり　小砂白汀
十二月　広告塔も寒かりし　西口いわゑ
十二月売る目買う目が殺気立ち　小林由多香
十二月八日を知らぬそれも良し　大矢十郎
見える風見えぬ風吹く十二月　橘高薫風

黒川紫香選

熊本県　大川幸子

愚痴こぼし合ってたのしい屋台の灯
豊作へ案山子もやっと役を降り
ひとときを陶酔夕陽の美観
出しゃ張って他所のトラブルまで背負う
何時の間か夢の世界に居る読書

千葉県　上鈴木春枝

相槌の打てない事もある孤独
少しずつ無慈悲となって行く噂
気まぐれに曲ってみると行き止まり
心配をさせぬ電話に心配し
引き受けてさてそれからの向い風

尼崎市　児玉歌子

意外だな敵の背中が温かい
足踏みをさせた男が煮え切らぬ
秋の香が少し匂うて来た日記
後継者だけに困った酒の量
関係がまだ断ち切れぬ蟬しぐれ

佐賀県　寺中三枝子

宿カリも無聊むっくり貝を出る
ひとつなくしたボタンを街へ買いに行く
恐いもの見たさ番組選っている
盃を差しつつ嘘を聞いている
こころ根の良い嫁と居て肥えてくる

八尾市　高杉千歩

辞書にない言葉探しはもうよそう
自動ドア飢えた心をはじき出す
ライバルを意識している赤い靴
それからの話へはずむシャボン玉
一本の焼松茸へ不意の客

富田林市　池森子

欲望があって小粋に帯しめる
いたわりのかたちに置いてある茶碗
ひざ元へカーブを投げてくる息子

胸の奥からだんだん秋が深くなる
淋しがりやのわたしを秋が好きと言う

名古屋市　藤井高子

すかし絵に私の明日を読んでいる
自己暗示かけてでで虫今日を出る
近付いて見れば鬼にも泣きぼくろ
日本は地球の臍と読むおごり
ポケットの穴を転げた軽い嘘

広島市　流奈美子

相槌のよさへ無口も弾み出す
ご協力願うと寄付の額も添え
女系族父の背中が淋しいね
飽食の驕りへ皿がひび割れる
晩鐘やいのちを刻む告知かも

摂津市　木下道子

冷静に驚いている受賞談
お祈りが長くてそっと目を開ける
じゃがいもは笑くぼの顔で掘り出され
ナイヤガラ仕掛花火の火の雫
若者は破調を好む盆踊り

今治市　野村京子

善人の父がストレスだけを溜め
妻が旗たたんで残す一行詩
母の手に悔いを溜めてる返し針
雪月花おとこの愛おんなの愛
少女の恋一つ消え一つ浮き

大阪市　新井朋子

嘘ひとつついて揺れてるやじろべえ
風車　心に風が吹かぬ日に
厄日だな今日はとことんついてない
私は嘘つきですねうすわらい
空を見ていますすべてを包みこむ空を

静岡市　沢田きん

落ち着いてみれば些細もない悩み
清らかな愛を大事に詰める壺
読経へトンボ和尚の肩で聞き
言い訳が嫌いな虫で損をする
渡る世に鬼はいないと信じたい

大阪市　上田柳影

飲む同士飲めぬ同士のツアーの席
風邪ひいているのに診察室寒い
しあわせの一つ料理のうまい妻
舌先で嘘をころがす葉鶏頭
鈴虫のコーラス涼し旅枕

熊本市　宇野昭代

丁度いい時に番茶と妻が来る
男やもめに縁談すすむ菊日和
しんがりに居て責任を背負わされ
木犀の香に立ち止る白い杖
傷心を捨て切れぬまま旅終る

兵庫県　森脇和子

再会の握手へ弾む舌の先

温泉へ行く約束をして浮かれ
皿そばの好きなお方と寺詣り
満天の星の一つが味方です
門限を子がたしなめて平和です

岡山県　森下正子

古希迎えそれでも女紅をさす
喜びも悲しみも傘は知って居る
幸せは金では買えぬ友が居る
苦労など人には見せぬいい女
苦虫へ笑い袋をそっと入れ

久留米市　鶴久百万両

やがて秋ピカソに夢をもらう旅
火を抱いて危険水位はすでに越え
結婚五年　阿呆な男に飼育され
定年後の趣味は仏画と日本画と
俺の罪晒す勇気もなく老いる

尼崎市　森安夢之助

お隣へ自家菜園の汗を分け
亡父の匂が残っている床柱
いつまでも未練が残る忘れ傘
花博の花お国語で話しかけ
切り札をもっているから平気です

尼崎市　野瀬昌子

鳳仙花思いのままにはぜて行き
秋晴れに物干し竿は忙しい
月見草悲しい女想い出し
お隣は旦那が何時もゴミを出す
新聞の四コマ漫画で世相知る

尼崎市　鈴木良征

南方の海を見てから眠れない
野次将軍の異名でしがみつく議席
寝返った男の叩く陣太鼓
コーヒーのおいしい店で駄ボラ吹く
月に暈てるてる坊主のうかぬ顔

鳥取市　萩原美雪

大好きな人をぴったりマークする
おんな心はダイヤと愛が大好きだ
貧乏性ですぐソロバンをはじいてる
飯時にぴったり友がやってくる

堺市　楊井二南

いらだちが帰り支度の顔に出る
生真面目な顔　冗談が通じない
髪染めているので辞退出来ぬ役
趣味の無い老後余白をどうする気

尼崎市　的場十四郎

愚痴もつと三面鏡に叱られる
長いもの巻かれて帰る頼りなさ
ひたすらに真夏咲かした夾竹桃
外食にすると食欲出す息子

東予市　小山悠泉

捨てた筈の故郷を想う祭笛
水すましの思案へ丸い輪がくずれ

首縦に振らず張り子の虎の意地
懸命にすがって生きる豆のつる
羽曳野市　芦田絢子

車間距離おけばやさしい人なのに
別れ言葉上手になって秋が来る
何時からか君の好みになっている
灰皿の灰捨てかねている独り
大阪市　亀井円女

人が好きお蔭で心忙しい
好きなだけ流す涙が残ってる
野良猫に毎晩餌を置いてやる
温もりがまだ消えませぬ亡母の部屋
岐阜市　渡辺杏村

カレンダーあと一枚と告げている
来年も生きるつもりでハガキ買う
クリスマス　ディナーに誘う子がほしい
老夫婦で過すしかないお正月
尼崎市　尾宮弘治

聴こえない振りして猫を抱きあげる
バス停に姑が私の傘を抱く
人前で弱気を見せぬ泣きボクロ
成功の噂　故郷の寄付がくる
尼崎市　住谷石舟

部屋中をころげ回って孫昼寝
御多分にもれず吾が家も妻強し
ひっそりと妻が謀反を企てる
孫帰るしばらく話題ある夫婦
寝屋川市　河合時弘

微熱つづきもしやと思う夜半の妻
子の帰省　無口の妻のうきうきと
終章へやっと歩幅の合う夫婦
留守番をする日は妻の休息日
藤井寺市　高田美代子

暗中模索おやおや私の貌がない
少年A　Bで済まされない罪だ
月見酒わたし今夜は泣き上戸
こぼれ萩　愛の雫が寒くなる
和歌山市　山口三千子

屑籠にストレス溜まるひとり部屋
陰口を言われるうちは脈がある
知られてるから迂闊には動けない
パートナー偶には替えてみたくなる
鳥取県　西浦小鹿

札束を数える指が冷えてゆく
そろばんで再計算をしてしまう
手垢つくほど一冊の本を読む
さよならに負けないように僕走る
鳥取県　西川和子

邪魔になる枝にも花が咲いている
いきさつを壁に尋ねることにする
よく熟れた実が天ぺんの枝にある
いい話聞けば涙が出てしまう

静岡市　柳沢たま

無事に暮れいやな事だけ流す風呂
上に媚び下にも媚びて役を維持
気が付けば帰るはずない主を待つ
苛立ちを吸った煙草の数が告げ

姫路市　松本一郎

自分史の本音余白に書いてある
休日の雨は眠りを深くする
無人島をレジャーランドにする平和
三次会まだ嫌な奴ついて来る

寝屋川市　宮崎菜月

月下美人おもろいほどに子をつくり
籠いっぱい挿して淋しき花もあり
ひとつ夢その根の深きかなしみか
罪ひとつ神の温容につつまれる

砂川市　大橋政良

疵だらけの脛を語ろうとはしない
両手では足りない欲が顔に出る
濾過されたことしか耳に入らない
散歩から帰るとパンが焼けている

尼崎市　山田保蔵

威勢よくテテカム鰯売りにくる
駅止めの孫を受取る新大阪
誕生日ひとりベンチで缶ビール
あすはどこ外食ばっかり若い嫁

鳥取県　黒田くに子

人様の土地へソロバン玉はじく
遺言のような手紙を書いている
ピンチに逢うたび故郷へ電話する
白状をしなさい楽にねれるから

貝塚市　池田寿美子

スケジュール旅の出逢いは風まかせ
打明けてゆっくり孤独かみしめる
何よりも自然の風を大切に
せめて半歩前に進んで生甲斐を

鳥取県　山本正光

寝れそうにないので妻の鼾きく
ふかし芋まだかまだかと箸を刺し
朝起きて寝るまで愚痴を聞いてます
手紙書く閑はあるけど走りがき

米子市　新正子

酔ってるな愛していると夫が言う
ひたむきに生きた証の指の節
カーテンがゆれているから居留守だな
君に書く文字の乱れは直さない

米子市　足立由美子

どしゃぶりに閉じこめられて本を読む
一輪の野菊が心和ませる
劇薬と大きな文字で書いてある
現代が産んだ言葉に慣らされる

聞き流すことも覚えて灯がまるい　旭川市　朝倉大柏

肩書が妻の口ぶりまでも変え
隅っこにいても烈しい風当り
結局は始めにもどる無為無策　酒田市　永澤裕子

令夫人ぶって温みのない言葉
こと毎に餅を搗いたは過去の里
まだ少し残る意欲の種火持ち
一芸も秀でず三度の食作り　鳥取県　石尾かつ乃

痛む指かばい献立軽くする
合鍵がたやすく出来るからなやみ
武器になる女の涙ためておく
亡母の背で甘えた記憶夏まつり　鳥取市　岩原喬水

蛙の子　蛙にならぬ反逆児
浅知恵と欲ボケ詐欺にひっかかり
親の真似する子どうにも叱れない
コツコツと貯めて女にはぎ取られ　十和田市　阿部喜久江

新しい出逢い心が揺れ動く
便利さにどっぷり浸り不満抱き
子沢山寡婦が二の腕まくりあげ
盲点をずばり突かれて困り果て　鳴門市　八木芳水

独り居へ泣きも笑いも壁が吸う
言い訳を半信半疑聞いておく
釣り竿に話す男の懐古調
また一人消えて戦時も遠くなる　熊本市　黒田緑

果て知らぬ幻影を追う命かも
何とでもその他大勢だから言え
靴下は右と左を知っている
その程度ですかと軽くいなされる　尼崎市　佐野六浦

如才なく買物をする妻の知恵
定まらぬ悩み心を封じ込む
裏返しされて手足をもがく亀
補聴器を掛けて祝詞を聞いている　泉佐野市　真崎浪速子

便利さを買われ会社の生字引
咳一つ残して母の拒否続く
特急という風残す通過駅
途中下車ふと中元を思い出し　広島市　名和喜一郎

熱帯夜救いは君のきれいな目
ネオンにはまだ馴染めないきれいな目
たしかめた愛の余韻に目がきれい
好きな訳その一　君の目がきれい

西宮市　菊池トミエ

出歩いて留守番電話まかせきり
母の日に電話をすれば母は留守
朝顔に水だけやって留守頼む
かたつむり家の重さをひきずって

尼崎市　長浜澄子

握手した肩が泣いてる嫁ぐ朝
赴任地へ人生流転の靴を脱ぐ
窓の風つまみがうまいビールほす
偲ぶ夜の線香花火に似た運命

出雲市　原章峰

すきのないエスカレーターに気をつける
吊り皮の都会としばしゆれている
薬袋抱いていのちの軽さかな
私の敵はわたしと言い聞かす

熊本県　高野宵草

寝たきりで平均寿命支えて居
定年で辞めた職場があたたかい
地すべりを起こさせといて砂防ダム
二三曲出てから幹事呑みはじめ

神戸市　岩田信義

騙し船上手に折って嫌われる
年金を積んでゆっくり踏むペダル
切札を握りつぶしている平和
英語にも草書楷書があるらしい

佐賀市　古川一徳

ひとり言ちらりと見せた人間味
靴の紐固く結んで二度の職
何もかも許すと道が広くなる
若者に口を挟んで嗤われる

河内長野市　大西文次

末っ娘も嫁ぎ話題のない夫婦
年寄りを遊ばせといて人不足
目も耳も一足早く秋を知る
余命より預金の残が気にかかる

堺市　井上たかし

台風の目玉テレビが見せてくれ
台風一過ほどく荷物が多過ぎる
台風の跡コスモスのただ健気
一日の疲れ溜った靴を脱ぐ

熊本市　北川一進

釦つけ彼のが一番先になり
筆不精　返事電話でしてしまい
大物があちこち回る選挙前
下の子は泣くだけの知恵持って居る

尼崎市　吉永伊三郎

座りだこ貫禄負けで痺れ出す
故郷にはまだ夕焼けの唄がある
ラジカセの童謡　孫はヘッドホン
下り坂つまらぬ意地の向う疵

枚方市　中山おさむ

お爺ちゃんの顔が見えるかサクランボ
しなやかな妻の手綱がほどけない
極楽の話相づち打っておく
紀子さまの話題に弾むバスガイド

岡山県　土居ひでの

彼岸花　亡母のロマンを秘めて炎え
庇い合う夫婦であしたの歌がある
追伸へ健康メニューがそえてある
紅引いて駅まで走る迎え傘

岡山県　後安ふさえ

雪月花　時は流れ人は老い
旅三日隣にたのむ鉢の水
照る日曇る日　人の暮しも又同じ
待ち佗びた雨も三日でもう飽かれ

岡山県　福原悦子

それぞれの趣味に生きてる凡夫婦
手探りで行く余生にも味があり
切りつめた予算を作る母の知恵
いたわりの言葉耳底まだ残る

守口市　森川春子

アスレチック　パパにコーチをする気なり
欠伸してたまった返事書きつづけ
体調がよくなりつけるイヤリング

熊本県　岩切康子

転作で畑の蛙が遊びに来
池の鯉何やら言って慰める
自家用車の孤独大声で歌う

尼崎市　木下義嗣

待たされる残暑厳しい駅の前
嫁姑あっさり同士で仲が良い
いい話　風の便りを持って来る

尼崎市　明壁敏之

暑い時季死にたくないな通夜の席
外食し帰って茶漬たべている
引出しの隅でゴキブリ年をこす

尼崎市　中澤向西

飛び込んで見たい美人の赤い傘
這い這いの幼児に這い這いして遊ぶ
あっさりと別れた後がもの淋し

岡山県　清水悠貴女

名月と歩いて窓の灯に戻る
さりげなく話題をかえて髪を梳く
どの彩を溶いても馴染む白い画布

出雲市　伊藤寿美

残留妻の帰国確かな日本語
無人駅風と乗り込む盆の僧
過疎を捨てみどりを守る会に居る

和歌山市　森茜

指定席まちがえて旅のスタート
大井川ざーと洗っていった雨
子が住めばよその町とは思われず

納まりがつかなくなった世界地図　八尾市　片上英一

またしても口約束にしてやられ
カマキリのなきがら一つ冬仕度　京都市　小林英子

紅殻の格子が好きなわらべ唄
より戻す昔むかしの想い人
自動ロック鍵を忘れて来たバッグ　鳥取県　太田幸枝

泣き顔に涙の出ない孫の欲
ふれ込みの割には軽い荷が届き
手も触れず別れた人を偲んでる　米子市　小西五十鈴

つたの葉は隣の壁と知らず這う
失礼な渡した名刺折っている
人形をつぎつぎこわし子は育ち　和歌山県　森三枝子

どんな字を書いても浄土へ行く祈願
便り書く横で字引が正座する
朝寝坊頼りの時計知らぬ顔　和歌山市　田中みね

二者選択答え出ぬまま夜が白む
愛の証を日毎はぐくむマタニティー
浮世の義理一つ果たした日の安堵　田辺市　染道佳明

カスミ草でよいと夫言うている

花博の話戻ってから聞かぬ
月に出す手紙をためている小箱　鳥取市　美田旋風

いい意味に取られ黙って笑っとく
太陽が昇ると心弾み出す
今日生きた自信明日を弾ませる　兵庫県　倉垣恵美

品質の良さはお客が決めるもの
大役の案山子が小屋へ帰りつく
わたしにはお洒落と思えぬカーキ色　豊中市　田中道胤

回り道し過ぎて今に行き着かぬ
おみやげの思い出飾る飾り棚
ライバルが次々変る出世株　姫路市　谷清柳

結び目がなかなか解けぬ白昼夢
吊橋がゆれて弾んで夏帽子
世を拗ねて河童お酒に溺れ死ぬ　枚方市　森本節子

季のうつり教えてくれる虫の声
もてなしは麦落雁に宇治のお茶
末枯れた葉にまだ朝顔花つける　鳥取県　中村幸代

時雨きて独り芝居の幕が下り
コバルトの海を見に行くのも二人
風揺らぐ銀の芒野からの声

一本のタバコを分けた友に逢う　富田林市　山原昭水

童謡を歌う八百屋が通ってる

この目なら付いて行こうと決心し　鳥取市　西村黙光

張り子の虎でかいラッパが威勢いい

ストレスは一升ビンへ詰め替える

サツマイモそんな縁談娘に欲しい　鳥取県　大角正道

駆け出すと星も駆け出す空ひとつ

身がってな恋を続ける夢の中

縁側で彼女と母が笑ってる　島根県　加本義良

過疎の村夕焼だけが赤く照り

生きてゆく演技続けている闘志

人生の今三塁を蹴るチャンス　静岡市　片平静代

ふれ太鼓　街は相撲のはじまる日

菊人形　水をかけると息をする

下手くその寸志と書いて万の金　島根県　菅田かつ子

定退を当てにしている子守唄

ベテランに聴いて心が楽になり

戒名を唱えて母が遠くなる　堺市　神原文

もうすぐ成田　化粧直しをしなくては

素晴らしい夕餉になった塩いわし　岡山市　中嶋千恵子

かくし味程度の妻でこともなし

夕焼小焼　山の彼方の夫を恋う

運動会 孫に約束 天高し　和歌山県　三原三究

まだ惚けぬ証拠クイズがよく解ける

目覚ましをかけてそれより早く起き

満たされて話す言葉も平和主義　鳥取県　乾隆風

おじいちゃんの入れ歯が洗面所にある

看護婦に甘えていたら妻が来た

これっ切り出世をしない団栗か　竹原市　古田比呂子

頂上の感動母も子もヤッホー

旅の子にテレホンカード持たせたり

星空を見上げる確かなるあした　松江市　佐野木みえ

傷心の影が私をつきまとう

秋刀魚焼くにおいが秋を連れてきた

一冊の本読み終えた満足感　八尾市　籾山隆

私から話題が消えてゆく怖さ

七曲り野麦峠をバスでゆく

痛ましい記事は素直に読み返す

台風の余波に風鈴愛想いい　和歌山市　前田美子
グチ一つ言わぬ背中へ手を合わす
やめてから株の暴落妻が聞く　出雲市　森山健歩
童唄聞こえてひとを裏切れぬ
通せんぼしている方が泣いていた
偉そうに見せる努力は惜しまない　大阪狭山市　桜井荘次
空白を埋めると眠り深くなる
行間にうずくまってる影がある
渦巻いています出どこのない噂　豊中市　三宅つえ子
初恋の坂で車椅子濡れている
嫁と姑よそ事なれば肩を寄せ
車椅子ここは素直に雨宿り　静岡市　永倉柳華
万一を思う日もある恐怖感
泣き笑い出合い知ってる駅の椅子
雨漏りをうれしがる孫古い家　鳥取県　西原艶子
耳飾りすれば見つめてくれますか
磨いても美人に見せぬ鏡です
亡父の背を語る老母の眼は確か　鳥取県　浜田民子
どさくさの中で逢いたい人さがす

宿命か裏道ばかり歩いてる
逆転のチャンスねらって球投げる　姫路市　福本好花
辻地蔵花より帽子がほしい顔
娘と喧嘩　階段下りてもう直る
殿様が通った旧道細いまま　島根県　兒玉幸子
孫とふたりパズル合わせの留守居する
秋茄子の色あざやかに食すすむ
先客があり玄関の立話　川西市　田中喜俊
シルバーシートやっと空いたが次で下車
金婚を互いに忘れ老夫婦
帰省する息子の好きななすび漬け　八戸市　島田昭治
形見分けいいのは出さぬ嫌な嫁
そう言えば孝行らしいの二度三度
半生の余白もヒットないだろう　兵庫県　酒井靖子
わかやまにて感激
師の風がこんなに温い雑魚の席
師と握手温さじーんと伝いくる
楽しくて人生の夢追いまくる　橿原市　西本保夫
あやまちを堂々と言える立志伝
男手が居ないと釘打つ音もせず

自然とは不便ながらも美しい　広島県　森川抜智

フセインが二人居るとは知らなんだ
兄弟が三人　初盆で顔合せ
木曽の雨よく売れている五平餅　新潟県　高野不二

死んでから惜しまれるとは気がつかず
一応は水着ぬらして帰って来
無駄話ポケットベルに見ぬかれる　静岡市　三浦つね

ちゃっかりと小銭貯めてる孫が居る
バーゲンの季節外れをたんと買う
カタカナの野菜の名前出てこない　和歌山市　北山好笑

まな板の音にも秋の深みある
老人の教養講座菊作り
捨て猫が顔一ぱいに泣いている　静岡市　浅子まつゑ

音がして見れば静かな遠花火
標的はどこにあるのか水鉄砲
その内に長生税を取られそう　鳥取県　武田帆雀

年金を越さず余さず菊五十鉢
野良猫の舌舐めずりに凱歌あり
囲の蛙ぴょんぴょん翔んで鬼に遭う　熊本市　遠山夏生

付添の方に限界先にきた
子に出会い咄嗟コノヒトオトモダチ
小抽斗の中に女の過去がある　大阪市　今西静子

臆病な犬の散歩は進まない
主治医の無言が恐いレントゲン
父の敷くレール無視するのも世相　米子市　中井ゆき

夕ぐれの街は他人の顔をする
そっけない返事この子はかえらぬ気
赤とんぼ風に吹かれてゆくだけか　八尾市　向井しづ子

鉢の水枯らして枯らしてつく花芽
まつたけ飯新米で炊く朝の夢
扇風機さわやかに見えれどくしゃみ出る　大阪市　森崎忠禄

大阪が何んで好きやと言われても
地元でも潜って迷う梅田地下
OLの歩幅見事な淀屋橋　岡山県　伏見すみれ

無人駅正確な時計のある安堵
みちのくの旅は芭蕉の碑を拾い
勝つ事を信じあの頃耐えに耐え　京都市　本荘福子

影二つ脚の短いのがおやじ

午後六時鍵っ子の待つ駅が有る
母八十老人扱いいやと言う　静岡市　小木久子

堪える事がすべてだなんて佗びしすぎ
鉢合わせした気まずさをテレ笑い
受付の機転　部長を留守にする　寝屋川市　井上すみれ

口ほどに悪女になれず眉やさし
孫八人下になるほど現代人
夜通しの激論消した朝の雨　今治市　藤本のぶ夫

半音のずれを気付かぬまま夫婦
疲れると人間臭い音になる
値の高いほうはなるほど美しい　大阪市　尾崎黄紅

老いらくの恋を笑っていたのにな
簡単な挨拶でした十五分
剣戟の上手な方が斬られ役　島根県　今川三津江

お天気がつづき疲れた畑仕事
農作業済んで寒さは急ピッチ
一年の早さへ歳がついてくる　宇部市　中村三良

男と女の歴史に彩をつけ過ぎる
椅子取りゲーム何時も立ってるのは男
ほどほどの酔いで勘定し始める　静岡市　青柳金吾

恥ずかしい思いばかりの回顧録
便利さになれて五体が老化する
お見合のランクだんだん下げてゆく　姫路市　福島姫女

秋天の雲の動きに邪念なし
おとなしい犬がせがむは散歩だけ
通学路　明日から目覚ましいりません　鳥取県　美浦美代子

子は鏡　かがみが憎い事を言う
亡夫に代わり鬼面をつけて子に対す
ぶつかり合う夫婦独楽なら楽しかろ　相生市　中塚礎石

行商の荷物が背なを丸くする
風化した戦陣訓を言いたがり
正論へしっぺ返しの辞令うけ　八尾市　松本芙美子

吊橋をそろそろ渡り秋の風
かずら橋かけ声だけが先に行く
日焼した娘の肌にふれてみる　藤井寺市　田中孝子

さすがに残暑早朝チチと虫の声
アジサイの毬の雫をそっと掌に
旅一人　湖面の残照みつめてる　鳥取県　山内芳江

喪の列にカメラを向ける無神経

合鍵をもらい人生狂い出し
医者と手を切ると不安がつのります　鳥取県　今本早苗

赤紙という令状を見ぬ平和
シグナルの青しっかりと見て走る
ぴったりと合ったパズルへ日が暮れる　泉佐野市　大工静子

友の茶菓　昔懐し障子センベイ
好物はお粥　佃煮　塩昆布
買物に百　拾　壱円まぜて持ち　唐津市　福島紀一

中東に織田信長の快気焔
米買えと瑞穂の国に無理ばかり
天性のえみで紀子さん親しまれ　広島市　森田文

あの時の余韻引き出す服を着る
針に糸通る寸前孫が起き
目に見えぬ糸が引くのかカラオケへ　岡山県　大石あすなろ

スタートは横一列であったはず
朝の雨　今日の予定を狂わせる
千金の夢を買うてる宝くじ　吹田市　山本希久子

朝シャンに今日の流れを変えてみる
交番の地図に仔犬の家がない
叱られる方も本気と知っている　豊中市　滝北博史

定年後妻ものすごい巻き返し
若さですただ冒険にあこがれる
忍耐は袋の中で歌になる　唐津市　野田旭恒

湾岸の波高うして油上がる
寝顔見て未だ残り香のある女
放たれた風船祝うセレモニー　岡山県　杉本伊久栄

バスの旅なんと美味しい缶ビール
縄ノレン上司と気安く肩を組み
花博も暑さと疲れただけのこと　大阪市　小糸昭子

義理という帽子かぶった影法師
てきぱきと段取すます嫁が来た
一本釣　海の男の意地を見る　静岡市　中西雅

予報にもめげず旅する雨夫婦
留守居して孫にあわせる夕御飯
遠来の娘の名もいえず惚け笑い　唐津市　浜本治幸

一言が言えずに重い荷を背負い
縄のれん欲求不満の捨てどころ
遠回り出来ない老いの坂登る　米子市　小塩智加恵

趣味講座おしゃべりだけが楽しくて

子や孫をあてにはしない独り言
電線の雀の学校　門が無い　　箕面市　岩津　ようじ

最下位に馴れトラファンのおおらかさ
イヤリングいい話だけ聞きたがり
酒の量減ったと妻が心配し　　東大阪市　大平　太一郎

健康の鍵かけ忘れ三次会
青い鳥追いつづけつい八十路越え
辞表出す背にまた人は教えられ　　芦屋市　根来　敬

届かない便り待ってる薬指
走り読むメモが会議をふるえさせ
腹を読むつもりがなんと読まれてる　　鳥取県　中藤　俊子

粗大ゴミ歩け歩けとせきたてる
垣根ごし隣の孫に声掛ける
ポケットで小銭も踊るうれしい日　　大阪市　山北　三三三

方便の嘘も嫌いで一人切り
生き過ぎて保険満期が来てしまい
君が代の歌詞を忘れて惚けている　　鳥取県　久野　野草

日曜日シーツを白くしろく干す
故郷に秋の味覚と母が居る
演技なら雀百まで楽しくて

星博士　新星探して不帰の旅
逝く夏を惜しむ蜩遠く鳴く
国境を越えて医療の素晴らしく　　岡山県　牧野　秀香

萩桔梗好きなお方のお人柄
潮時を心得ている母出番
風鈴が九月の便り待って居る　　岡山県　後安　江山

霊安室に息してるような母が居り
安らかな顔へ施す薄化粧
残されし老父の夕餉の菜つくる　　羽曳野市　徳山　みつこ

吊ってある玉葱落ちて夢破れ
背を曲げて胡瓜も暑さに耐えている
安らぎに孫の幼い写真見る　　富田林市　浦田　トシヱ

夏背広東京暑くないですか
自由とは不自由ですね妻の留守
きたなそうに一円玉をためている　　今治市　渡辺　南奉

小利口な親の横面金で張り
平常心になるまで両手胸に置く
入れ物があればある程物増える　　唐津市　山口　ふさ子

孫やっと赤川次郎に昇格し　　枚方市　山崎　彩子

西安も北京も晴れて旅終る
シルクロードおしるし程に足を入れ　堺市　宮本かりん

履き慣れた靴がやさしい顔になり
理屈より大きな声に負けました　河内長野市　柏木靖子

故里を思い出させる風に逢う
旅鞄楽しい話詰めてある　兵庫県　北川とみ子

弱点を庇うてくれる姫鏡
定年を祝う二つの飯茶碗　今治市　渡邊伊津志

腹立ちを入道雲が描き上げる
ボロ隠しする鏡台を買って来る　鳥取県　横山房子

どの星も光り涙をしまい込む
青リンゴやがて恋して紅をさす　東京都　山口新子

小走りの秋の向うは何だろう
逃避ぐせ抜けない女の山手線　岡山県　福原辰江

風鈴を買う気にさせたこの音色
味噌汁の匂い平和だと思う　広島市　中村要

老人会七人の敵はみな女
医学書を読めば読むほど寒くなり　藤井寺市　中島志洋

クラス会世話をやく人やかす奴
久し振り妻と腕くむ月の道　羽曳野市　福田悦子

コーヒーをホットに変えた秋の風
ふるさとへ帰っておいで祭り笛　箕面市　中嶋民子

噛み合わぬあなたと私の記憶力
楽しさを零さぬように締括る　兵庫県　奥野テル

園児みな素直に動く保母の笛
閑のある女噂の風に乗り　寝屋川市　北岡波留吉

先輩が扇子で招くよい話
駅前に追手が先にいた不覚　岡山県　江口有一朗

ワープロへ老いの指先ぎこちない
大空の広さへ希望の灯を点し　東大阪市　松山隆

曲り角盲導犬と信じ合い
ヘソクリはこれでしまいと中身見せ　鳥取県　中西智恵子

あでやかに米寿祝ったちゃんちゃんこ
追憶へ亡父の形見の日記帳　静岡市　増田扶美

故里の土の匂いの芋届く

山の冷気一人占めして深呼吸　大阪市　川原章久

遠慮せず切る他所事の花鋏
湯疲れを知らぬ女に星が降る　大阪市　武田昌三

ワンシーン友情出演芸が生き
ささやかな年金証書と共に老い　泉南市　坂根流水

端金握って頑固身を守り
壇上にのぼれば格好つけたがり　八尾市　吉村一風

墓参り若い他人が会釈する
下心あるので椅子は浅く掛け　池田市　岡本吉太郎

ふる里の掲示板には画鋲のみ
古希が来て動かぬ妻をもてあまし　静岡市　宇佐美寿美

呑みこんだ愚痴へカーブを投げてみる
星の夜のゆかたの夢も遠ざかる　島根県　松本聖子

シャボン玉になってみたいと思う空
停年になったらしようと手を出さず　出雲市　岸桂子

仏飯のゆげに安らぐものがある
あの人の癖だ切手をなめて貼る　和歌山県　吉田武治

年金で生きる幸せズック履く
くずし字が下手で人生堅く生き　大阪市　清水絹子

鯛焼きの餡に魅せられ列に入る
おかず屋さんにヒントもらって献立表　岡山県　富坂志重

美しい嘘にはだまされておこう
結び目がとけた所で昼にする　大阪市　家村高雄

年度末　舗装工事のここかしこ
水族館　休館日でも泳いでます　藤井寺市　武部敦子

トイレから出ると止った電話ベル
裸婦像に語りかけてるベレー帽　島根県　渡部好栄

送る子にそっと手わたすおこずかい
食卓へ一番乗りするペットです　広島県　岸田武

旅に出て人の心がよく読める
クラス会名刺を出して座がしらけ　河内長野市　岡崎実

愛人が派手で社業火の車
姿見に写った私いい女　島根県　佐々木芳正

外孫の知恵に驚くぬたくり絵
人情に触れて左遷の荷をほどく

CTに写って困る君の影
愛情を封じて体重増すばかり
弘前市　肥後和香子

横に寝て居るのが母で良く眠れ
雨の朝忘れた傘を思い出す
鳥取市　前田一枝

とっときの笑顔でファミコンせびられる
お追従　目は正直に笑わない
神戸市　木村貴代子

日記には書かれぬことが多すぎる
悪友の視線の動きじっと見る
鳥取県　野口重富

洞川の吊橋揺れて胆冷やす
肩書きのない弔電ははねられる
吹田市　西岡豊

萩咲くとママの和服が目をさます
通院の廊下　友情温める
鳥取県　伊吹富恵

本当のことは言わないまま辞める
責任を持たねばならぬ女がいる
鳥取県　大坪天涯

さしさわりない返答しとく電話番
手の掛からない死に方を語り合い
羽曳野市　麻野幽玄

どん底の暮しは靴の裏が知り
唐津市　入江喜久亭

御近所がやくざと知らぬ昼の顔
青森県　波　ただお

秋虫が涼しい合奏してくれる
没の句を諦め切れず読み返す
今治市　和田宏

地味好み子供もいると見られそう
赤とんぼ庭に来てから詩が生まれ
鳥取県　鈴木芙美

銀行に預け粗末な暮しぶり
朝市の真赤な柿が先に売れ
唐津市　山下剛司

食欲の秋を横目にダイエット
呉服市義理で誘われ目の保養
熊本県　立道善太郎

昭和二年初貯金たしか十五銭
ふる里の元気も入れてゆうパック
熊本県　増田一乗

納棺の石打つ妻のひとしずく
その責のずしりと重い子の名刺
鳥取市　近藤秋星

特産地に住み交際費が高うつき
特養行ドラマが変っただけのこと
鳥取市　森山豊子

見離した神へも一度すがりつく
二十一世紀へ虹色の夢見て生きる

借家住み何は無くとも車持ち　静岡市　大石たき
もっともな話に膝が寄って来る　米子市　服部朗子
つっけんどんな夜の取次電話
若い日の思い出連れて赤トンボ　鳥取県　木下芙葉
一人寝は月をながめて熱帯夜
候補者は一年さきの票を読み　鳥取市　中居武士
冷房で仔猫のクシャミ拭いてやり
ふる里はダムの底かよ声もなく　松江市　原長三
町内の役員一人来て敬老日
家計簿のヒューズが切れて夏おわる　茨木市　藤井正雄
雨宿り傘持っていておつき合い
パン屑と昆陽池に行く孫の守り　大阪市　平井露芳
花博のついでに天保山でも並び
螢まで平家　源氏に負けて居り　田辺市　山本貞伊知
ゲートボール昨日の話つづけよう
ただいま留守ですビール飲んでいる　岡山県　平田たけよ

定年のない地下足袋にある根性
何もかも手がけて父の太い指　寝屋川市　坂上高栄
全員の出席うれしい新学期
真面目さを出席率で評価され　島根県　岩田三和
今日もまた万歩あるいた夢日記
静けさに不安感もつ文明よ　高知市　山崎一求
オシッコかウンコかと聞く孫の守り
会費から割算をする酒肴　鳥取市　谷口侑里
泡のような話本気で聞いている
青蛙窓で私に話しかけ　南国市　窪田和広
万円の竿です雑魚を釣ってます
ダムまでで止まった鮎の志　静岡市　大村正雄
胸借りて朝の稽古にある気迫
お見合で一目惚れして五十年　奈良市　井上大
盆済んで寺も本家も夏休み
暑い上も一つ暑いイラン発　鳥取県　上田俊路
気休めに時々煙草止めてみる

もったいをつけて洋酒の封を切る　寝屋川市　豊福路子

棘を抜きながら子への意見書かいている
留守の間の頼りにしてる夫の下駄　鳥取市　松本伊都子

人生のドラマを閉じる鍵一つ
洗濯の泡が家族の汗を消し　鳥取県　石谷美恵子

魚市場したたる汗が競りおとす
倉の鍵あくびしている持ちぐされ　唐津市　野崎ハル

村はずれ老婆の信仰地蔵尊
朝市は小さな町の情報場　島根県　福間博利

八十の母もやっぱり試着室
手のふるえ猪口にふれるとぴたと止み　豊中市　みきわきみ

来し方は鬼にも仏にも会った
あと十年何んで禁煙せにゃならぬ　池田市　林すて

この年でよく歩けたと脚撫でる
いやな事みんな忘れて唄歌う　鳥取市　中澤正恵

角かくし載せて父からすねられる
披露宴親のなみだが胃へたまる　八尾市　橋本信江

尾長鶏　雄が優雅に身を飾り
一か八　翔んで見るかな老いなかば　松江市　松浦登志子

野仏にハスの葉の傘そっとそえ
甘いねと声ききたくて梨送る　唐津市　池田遊女

可もなしさりとて不可もなし我が夫
スネの傷一つ二つは青二才　大阪市　岡田一枝

天気図の列島まっ赤に燃えている
週刊誌ペラペラめくる好奇心　大阪市　乾哲静

嫁が来て他人の味を喰わされる
見え透いた御世辞に悩む立話　藤井寺市　菊地繁男

負け惜しみ笑ってつくろうやせ我慢
まァまァと宥めるてのひら年の功

◆ジュニアーの部

私には花博も遊園地だよ
転校しちょくちょくお金が減っていく　大阪市　新井晶子

マルちゃんのいつもの笑顔可愛いね
メガネとる素顔はぶきみ丸尾くん　大阪市　福西範子（中二）

句評リレー

七・八・九月号から

藤井一二三
高橋千万子
奥谷弘朗
榎本吐来

念願の橋を渡って根をおろす

寺田裕美

一二三　聞いた話ではあるが、ある人の句が秀句に入選、作者の考えもつかなかったような深い解釈で選評、激賞され、面映ゆい思いをされたとか。この逆もあることを恐れます。この句は、過去のものとしてより、未来のものと解した方が句に生命があるのでは。

千万子　人生半ばにして念願成就、拍手を送ります。あえて言うならあまりにも素直、もう一捻りと欲が出ます。

弘朗　この方の句は、よく分かる素直な句のようで好きですが、あまり素直すぎるのは千万子さんに同感。念願の橋を渡ってからが大事です。頑張ってじっくりと根をおろしてください。

吐来　過去、未来というほどの振りかぶった姿勢は感じられない。茄子か胡瓜に擬えたお伽の国の長閑さといった軽いタッチの句。作者の真意に反する受けとめかも知れませんが…。

一二三　諸先輩の言われるとおり素直に作っておられます。これは作者の日頃の生き方を表すもので、そこに願いがあるものと思う。

千万子　気取らない句で好きです。句評リレーで私の未熟をはずかしく思います。

弘朗　よく分かる素直な句で、あまり素直すぎると評しましたが、この句は私に処世術を教えてくれた、教訓の句として頂きました。

吐来　俎上に載せられた句も作者も、真向うからの風を受けては戸惑うだろう。この句は、自然を愛し、人生を愛し、川柳を愛する人の呟きに近いものと受けとめたい。そしてここにも川柳のいのちがあるのでは…。

前向きが過ぎてリズム狂わせる

宮西弥生

一二三　血気盛んと言うか、それが若さの証明であり、尊いのではあるまいか。中六が少し気になるが、作者に何か深い考えがあるのでは。

千万子　第一線で働いておられる弥生さんの移り変りのはげしいファッション界の実感が出ており、前向きがよく利いています。後ろ向きの私にはリズムが消えました。まだまだ前向きで頑張ってください。句の中六は、一二三さんと同感です。

弘朗　何でも前向きにものを考えて、バリバリ行動する時が花です。若い時のリズムは、狂っても苦になりません。中六は、私も気になりますが、心に晴々としたものを感じさせてくれたいい句だと思います。

吐来　各氏評に賛。無論、前向き必ずしも若者の特権ではない。中年には中年の、初老には初老の、やっぱり前向きがあり、そしてそれぞれに、それなりのリズムの狂いもついて回るから面白い。

一二三　ファッション界の若く華やかな職場に生きる作者が、その目をとおして自戒の句であろうか。年齢と共に何事も用心深くなる自分が悲しくなる。

千万子　前向きが大切だと思いました。

弘朗　リズムを狂わせると締めくくったところが、この句のポイントのように思われる。着想もリズム感もよく、実にうまい句だ。

吐来　リズムを狂わせた前向き過ぎを反省するよりは、狂ったリズムに自らの前向きを歓ぶこの句のニュアンスを嗅ぎとりたい。

遍歴を隠すピエロの薄い眉

小西雄々

一二三　運命のままに、心と別の生き方を余儀なくされた者として、それをピエロの薄い眉で見事に表現されているが、句に少し余韻がないような気もする。

千万子　五七五とよくまとまった句で、一二三さんと同感。ピエロの薄い眉が少し弱い気もしますが…。

弘朗　遍歴は広く諸国をめぐり歩くことを言うのであるが、作者の実感句だと思う。ピエロの薄い眉と表現されている所がこの句のミソで、表現の巧みさに敬意を表します。

吐来　薄いのはもちろん、化粧したピエロの眉だが、私には紛する当人の眉ずばりとすら思えてくる。この句を受ける下五としては、最上の語をもって来たと私には思える。

一二三　先輩の句評を見て、自己の未熟が思い知らされる。言い切ったところに、膨らみがないように思えてならないのだが…。

千万子　下五のむつかしさを知りました。

弘朗　作者をよく知っているだけに、句評がやりにくい面があるが、巧みな表現でよくまとまった。佳吟であることには間違いないように思う。

吐来　この句は言い切りというよりは、むしろ曖昧に逃げたという感が深い。そしてその曖昧こそが、半生を世間から隠し、自らをも欺く、恰好の薄い眉に通じるのではあるまいか。ややオーソドックスであるかも知れないが、深い境地の句であると思う。

人形の眉もしずかに忘れられる

八木千代

一二三　句の意味は判じ得ないが、静かな時の経過を人形の眉で表現した、作者の感性に脱帽する。最後は「忘れられる」でなければいけないのだろうが、五七五が日本人の呼吸であると学んできた私には、少し抵抗を感じるのだが…。

千万子　勉強の足りない私には、今一つつかむものがなく迷います。三人さんの意見を聞かせていただきましょう。千代さまには申し訳ございません、お許しください。

弘朗　この句を見て、川柳も変ったものだと淋しく思っている。私が路郎先生に習った当時は、想像もつかないような表現である。

最近はこの種の句が上位を占めているが、私は「俺に似よ俺に似るなと子を思い」のような句でないと川柳とは思えない。

吐来　弘朗さんの厳しい評は分かるが、ありきたりの表現から一歩抜けたい願望は、川柳作家の誰もが抱くところ。人形の眉の謎が、句の表現の模索につながるのではとの好意的視角も持ちたい。選者泣かせの句であることは事実だが…。

一二三　句評リレーの責めを全うできぬ自分の不勉強を恥じる。新しい傾向の句であるだけに、作者の意図まで入り込めない。象の鼻を撫でているようで、句の良さが分からないのが残念である。

千万子　一二三さんと同感です。

弘朗　自分の不勉強を棚に上げて、馬鹿の一つ覚えのようなことを言ったもんだと反省

している。

吐来　新しい句の一つの方向が、極めて主観的なものであるかも知れないとは思う。問題はその感性が如何に第三者の琴線に触れるかであろう。この種の句は独立の句よりは連作の中にその生命を見出すことになるのだろうか。一句で句意を断定することは困難だ。

善悪にふれてはならぬ自動ドア

安平次　弘　道

一二三　人間すべて、罪を背負って生きているものであるとか。入る者は拒まず、許し合える心の広さがほしい。自動ドアで感得された作者に拍手を送りたい。風の音にさえ生きてゆく指針があるように思える。

千万子　一二三さんと同感です。私も拍手を送ります。一面、余計なことが頭に浮かびます。悪のはびこる近ごろ、自動ドア、自動販売機と悪人も無言で大手を振って泳ぎまわります。コンピューターの自動改札機のように止めてほしい気もいたします。

弘朗　善悪をどうこう考えていては、自動ドアには対決できないであろう。作者の表現力に感服させられた。よくまとまった佳吟だと感じている。

吐来　自動ドアには、素直に動き、反応せねばならぬという、何よりも大事な使命がある。いや、それ以外の動きをしてはならないのだ。自動ドアの擬人的捉え方に加えての戒律的表現が効いた。

一二三　現在の社会は個人単位で、ドアにしろ販売機にしろ、他人とのつながりを拒否している。ドアを開ける時の手触りにさえ趣がある。世間が淋しく悲しい方向に進んでいるのを嘆く。この句を読んでいるうちにそのように感じたが…。

千万子　弘朗さんの句評のとおりですね。

弘朗　老人は呆け防止に川柳をといった向きもあるが、弘道さんの表現力を学び、精進の大切さを教えられた。

吐来　目先の小事に煩わされない懐深い在り方を求めた自戒の句と見たい。さりげなく自動ドアに託した句調が光る。

あらいやだ天気予報と宝くじ

松　本　はるみ

一二三　句の頭に話し言葉を持ってきたことで、句を新鮮なものにしている。読む者をして意表を突かせてしまう句である。作者の心がストレートに入ってくるとともに、表情が浮んでほおえましい。

千万子　サラッとして若々しい句。一読した時、ユーモアを感じた。何べんも読んでいると今一つ迫るものがなく、少し物足りないように思った。

弘朗　この句は発想がユニークで、話し言葉で入った「上五」に感心した。川柳もここまで来ないと進歩、上達がないのかも知れぬと思わせてくれた好きな句だ。

吐来　句頭の話し言葉とナンセンスがうまく嚙み合って、味のある句になった。肩の凝らないことも川柳の生命の一つだ。

一二三　千万子さんと同じ意見。間口を広げ過ぎているようで、底の浅いきらいがあるように思えるが…。しかし今後、このような表現の句もどんどん出てくるのでは。

千万子　軽い感じで川柳の味が出ている。物足りなく感じたのは私だけでしょうか。

弘朗　吐来さんの句評を拝見して感心した。やっぱり川柳は肩の凝らないことが、生命の一つであることを痛感している。

吐来　真向うから是非を論じては、かえって興醒めというべきだろう。この句のユニークな表現、さらにある意味ではナンセンスな句意をも含めて、川柳の太い生命の一つとして肯定したいものだ。

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

内海幸生

溜息は二酸化炭素を吐きすぎる
新井朋子

まず巻頭句から。溜息は自他を問わず、一害あって一利なしである。分かっていても、つい出てしまうのが溜息であろう。しかしながら溜息には進歩はない。自戒・他戒が含まれていると思うが…。

珈琲を両手に包み人を恋う
中尾まゆみ

両手に包まれた珈琲の香がほのかに漂っているようです。両手からたちのぼった珈琲の湯気はメルヘンの世界に広がり、きっと恋しい人を包んでくれることでしょう。

陰になり日向になっていて他人
児玉歌子

これほどリアルに本音を表現されたことに敬意、ベタベタになりそうなものをサラリと言ってのけられている。美代さんの句「皆んなみな笑顔みんな皆他人」を思い出した。

温い風ばかりと出合う里の道
流奈美子

故郷の小川のほとりか、田圃道であろうか。幼いころの想い出を胸に歩いていてバッタリ出会う幼なじみ、友人・知人は申すに及ばず、見知らぬ人の挨拶さえも素朴で温かい。

限られたスペースで一句でも多く鑑賞するため、あえて句評は控え、自分好みの句を次に選ばせて頂いた。

無事だったから怒鳴られてる交叉点
麻野幽玄

リゾート地　田を売り客になれず生き
永沢裕子

これ以上言うまい蛇口にお湯が出る
高野宵草

エンジンを止めれば視野が広くなり
西川和子

精霊流しためらう舟も二つ三つ
片上英一

ひとり居の寂しさ無駄な灯を点し
河合時弘

横文字で書いてある娘の日記帳
佐野六浦

真相をよく知らぬからよく喋る
古川一徳

山の川　過疎まで褒めて旅の人
井上たかし

喧嘩する相手があって今日も暮れ
今西静子

気まぐれに料理を作るイヤリング
森山健歩

後ろから時計の針が追って来る
森山豊子

せみしぐれ浴びて先祖の背を流す
前田美子

一等地の横のたんぼでみのる稲
岩津ようじ

OB会死ぬまで会社と共に生き
岡本吉太郎

自分史に朱線引くこと多くなる
野村京子

ごめんなさいと妻に言われた事がない
萩原美雪

知らない人と言葉を交す一心寺
高田美代子

いい出逢いでしたと頬へ風の私語
森脇和子

中流を維持する妻の手内職
片平静代

みの虫をぶら下げたまま木の枯れる
山崎彩子

人恋しワイングラスも秋になる
中村幸代

川柳塔用箋（一冊二〇〇円）
送料　一冊二五〇円・二～三冊三六〇円
※数量がまとまれば、「ゆうパック」で

銀河系

河内天笑選

岡山県　清水　悠貴女
肚からの対話それから弾む毬
新しい風がほしくて髪を染め
耳底の子守唄には背かれぬ

大阪市　板東　倫子
人質は矢張り男が選ばれる
蓑虫に化けて浮世にぶら下がる

米子市　中井　ゆき
背伸びをしても貴方の視線つかまらぬ
寄らないで火の輪廻している私

和歌山市　木本　朱夏
薄情なおとこの爪が美しい
平手打ちくらったような暑さだな

名古屋市　藤井　高子
老い哀し大事な時も寝てしまう
人の輪の節に三二七拍子

堺市　中川　楓
激しくてそして悲しい曼珠沙華
文明の屑が地球を覆い出す

兵庫県　遠山　可住
布教師の親しい笑みと猫の目と
手っ取り早く銀行へ銃を持ち

和歌山市　山田　高夫
負け惜しみ言うから傷が深くなる
おでん屋の丁度となりにパチンコ屋

西宮市　奥田　みつ子
外面がよいので妻が困ります
行きずりのバスで出会った福の神

橋本市　岸本　木魚
アメリカはかかしの小声踏みにじる
一列のはしの電話が話しよい

羽曳野市　田中　透太
ご近所の天狗の鼻はすぐ折れる
困るのはあんたとメモに書いてある

鳥取県　西原　艶子
老眼鏡まだ恋文を書いてます
母さんのおしゃれへ子の目光ってる

青森市　工藤　甲吉
台風が来て風鈴を狂わせる
月給の前借りをしたこともある

西宮市　西口　いわゑ
秋ざくら蝶と浮き名を流しけり
ボールペン時どき嫌なことも書く

鳥取県　さえき　やえ
手さぐりで作った稲が穂を垂れる
移りゆく秋を煮つめて子に送る

和歌山市　古久保　和子
鏡台で笑顔の練習して出かけ
馬耳東風だけどひとこと言っておく

鳥取県　江原　とみお
スッポン食って不埒なことを考える
この道を歩くと家が遠くなる

鳥取市　小谷　美っ千
産声の太郎に聞かす父の声
助走路で産むことなどは考えず

岸和田市　三輪　通彦
小説の中で不倫が美化される
善人の証と思うブービー賞

倉吉市　渡辺　菩句
鏡の中に父母の傑作品のぼく
がまがえる怒ったら火を吐くのかな

有田市　生馬　芙美子
天井に描いてる夢が果てしない
いさかいは夢でよかった髪を梳く

堺市　神原　文
あきらめてLL寸を選っている
身についた字はおいそれと変えられぬ

姫路市　大原　葉香
帯解いて義理を果した顔になり
手袋の握手は票につながらぬ

八尾市　片上　英一
街の風　情け容赦はないのです
ヒーローになれずピエロにようならず

宇部市　中村　三良
腹の底見せて善人いなされる

和歌山市　後藤　正子
消えてゆくものが愛しい萩の径

鳥取県　新家完司
どろんこになったらママに叱られる
兵庫県　酒井靖子
塩つぼは確かな嫁の手に渡す
米子市　八木千代
もう少し生きて芸くらべをしよう
米子市　新正子
坊やへはいつも黄色い旗を振る
米子市　政岡日枝子
母とした指切りだから忘れない
羽曳野市　吉川寿美
妻にも見せぬ河を男は持っている
米子市　小塩智加恵
お隣の猫が私の呆けを待つ
和歌山市　山口三千子
あかんべえすれば貴方はふり返る
黒石市　相馬一花
裸婦像の前を男は急ぎ足
倉敷市　田辺炎六
家計簿の引算ばかりして老いる
相生市　中塚礎石
電話口　十円だけの砂時計
米子市　林荒介
コピー氾濫古い手本は捨てられる
米子市　林瑞枝
林檎むくおんなが帯を解くように
海南市　三宅保州
日曜日張り切る妻と寝る夫
豊中市　辻川慶子

一球のミス人生を変えさせる
宝塚市　丸山よし津
保護色が好きで礫は飛んで来ぬ
米子市　石垣花子
貧乏の頃が笑って話せます
大阪市　橋元美恵
父と娘と屋台のおでんコップ酒
堺市　近藤豊子
しっかりと食べてますかと電話口
和歌山市　堀端三男
ピノキオの鼻ぐらいなのたんといる
静岡市　沢田きん
落ち込むと悪魔がみんな寄ってくる
唐津市　仁部四郎
着いてから地獄のことは訊ねよう
和歌山市　田中みね
プライドを捨ててダイヤの五割引き
鳥取市　近藤秋星
おくやみの欄に目がゆく癖がつき
尼崎市　住谷石舟
弔電の仮名に漢字を振って読み
鳥取市　上田俊路
辛口の批評も愛と受け止める
堺市　宮本かりん
一呼吸おいた言葉がやわらかい
米子市　小西雄々
点滴のしずくへ妻の目が縋り
米子市　青戸田鶴
切りつけた言葉がきつくはね返る

唐津市　山口ふさ子
着るあてもないと知りつつ帯を買う
米子市　小村てい子
一部始終メモ取りをして嫌われる
姫路市　福島姫女
あの人に見てもらう絵を出展す
和歌山市　山川克子
助手席の無口　手に汗握ってる
米子市　沢田千春
行動派の友に時々けとばされ
大阪市　藤森小雅子
嵌められた罠ならいつかはめかえす
和歌山市　桜井千秀
曖昧な返事へ駒を隠される
東大阪市　今岡貞人
よく喋る女の背に隙がある
唐津市　野崎ハル
サイレンと蟬が合唱する真昼
岡山県　小林妻子
漬物石ずらり並べて秋深し
堺市　山本半銭
逢いに行く素足へコスモスが乱れ
唐津市　福島紀一
茄子トマト早目に枯れてごくろうさん
姫路市　本多茂章
群生美げにすさまじき　ほてい草
岸和田市　古野ひで
仔を守る猫のはげしさ切なかり
寝屋川市　堀江光子

きれぎれに祭囃子のとどく駅　米子市　白根　ふみ

雑草にも精一ぱいの花ことば　出雲市　板垣　夢酔

松茸が朝鮮民謡唄い出す　川西市　松本　ただし

肝移植神の手助けする外科医　静岡市　渥美　弧秀

度忘れが慢性となるおそろしさ　岡山県　井上　富子

農暦今年も祈る嫁ききん　失名

学校の門扉スイスイ赤トンボ　有田市　松井　かなめ

人の手で四季を知らない花咲かす　岸和田市　芳地　狸村

平気ではおれぬ水着が多すぎる　岸和田市　清野　こう

御心労ざむ皇后様のしわ　豊中市　田中　正坊

火遊びはもうやめなさいフセインよ　広島市　名和　喜一郎

旗振った手に軽すぎる二度の職　伊丹市　樫谷　寿馬

公報の福祉の中で生きんとす　尼崎市　春城　年代

ベランダの花が九月を病んでいる　寝屋川市　江口　度

救急に国境はない大火傷　唐津市　久保　正敏

松茸は敬遠してる市場籠　岐阜市　渡辺　杏村

老人も若者なみの体育祭　熊本県　増田　一乗

ドヤ代りオールナイトで見て眠る　東大阪市　松山　隆

花博のすむを待ってる菊人形　大阪市　藤田　頂留子

ＯＢの負担をよそに勝ち進み　唐津市　山口　高明

結局は娘　都会に盗まれる　米子市　光井　玲子

紀三井寺の蚊に献血をして下りる　和歌山市　福本　英子

電話線切ってやりたい長電話　鳥取市　岩原　喬水

素うどんのような貴方が好きと言う　米子市　茂理　高代

怒鳴らなくなった夫が他人めく　和歌山県　寺田　裕美

子を五人育てた乳房には勝てぬ　出雲市　竹治　ちかし

人が笑っても大きい箱をとる　米子市　田中　亜弥

真実だけ言うから話もつれて来　唐津市　浜本　ちよ

神様も手の鳴る方へ行きたがる　箕面市　椎江　清芳

エリートがポロリ落球することも　鳥取市　武田　帆雀

自分史のここだけは嘘通します　千葉県　上鈴木　春枝

やり込めるセリフ別れてから気付き　和歌山県　三原　三究

嘘すこし混ぜた弔辞がよく泣ける　七尾市　松高　秀峰

行く程もかからないので長電話　河内長野市　植村　喜代

鏡見るように同級生の皺　豊中市　安藤　寿美子

よいことで逢う日秋風髪すくう　東京都　山口　新子

夕顔の実の裏側が濡れている　今治市　渡邊　伊津志

華やかな過去を舞ってる枯葉たち　吹田市　山本　希久子

花博の花よ地球よいつまでも　茨木市　井上　森生

お客様のように台風待っている　鳥取県　田村　きみ子

満月が教えてくれた水たまり　静岡市　永倉　柳華

おにぎりがとってもうまい景色だぜ　鳥取県　土橋　はるお

食べる物皆美味しくて登る山　大阪市　松尾　柳右子

高槻市　川島　諷云児
外は雨　珈琲館の温い椅子

竹原市　信本　博子
四季の彩うつして川の寡黙なる

米子市　服部　朗子
故郷にツンとすましたビルが建つ

今治市　藤本　のぶ夫
軍服を着ると勇気が湧いてくる

羽曳野市　芦田　絢子
浮雲を見れば如意棒欲しくなる

岡山県　富坂　志重
お帰りと言いにくい娘の里帰り

和歌山県　西口　忠雄
お隣へ相談に行くのし袋

大阪市　町田　達子
時として付和雷同も処世術

堺市　高橋　千万子
聞く亡母になんと短い盆の経

茨木市　堀　良江
コンピューターの決めた相手と結ばれる

唐津市　浜本　治幸
耳遠くなってでっかい声を出す

静岡市　小木　久子
夫は留守手抜き料理で済ませましょ

今治市　月原　宵明
昨日のことは川の流れに忘れよう

大阪市　今西　静子
義肢鳴らす義弟の背がやせてゆく

十和田市　阿部　進
大学は出ないが村の生字引

出雲市　森山　健歩
握手するたびに善人騙される

岡山県　江口　有一朗
世辞言うてそこから話進み出し

唐津市　中村　弘
荒海を漕いだ卒寿の母祝う

羽曳野市　徳山　みつこ
健康のバロメーターとなる強気

熊本県　立道　英子
酒やめた父ちゃん好きになりました

倉吉市　奥谷　弘朗
了見の狭い男で荒れている

大阪市　尾崎　黄紅
ライバルに長生きだけは勝ちました

大阪市　津守　柳伸
健康を肝に銘じた山歩き

松原市　小池　しげお
旅で出会うてそれからリンゴ年毎に

守口市　結城　君子
親切が過ぎて警戒されている

弘前市　波多野　五楽庵
肩書の重い名刺にうなされる

和歌山市　青枝　鉄治
昇進へ味方の数も敵も増え

大阪府　深日　白光子
マーガリンよりは茶漬けが口に合い

大阪市　北勝　美
秋晴れの天の高さに狂いそう

羽曳野市　麻野　幽玄
今ここで死ぬかも知れぬ乱気流

河内長野市　岡崎　実
一線を退き派手な服似合う人

弘前市　真喜内　實
スーパーに客呼び込んだにわか雨

弘前市　村田　善保
影法師だけが私を見捨てない

今治市　矢野　佳雲
渋柿の頑固は渋いままがいい

岡山県　福原　辰江
金の欲捨てて気軽うなる余生

大阪市　大福　留吉
トイレにも三面鏡の先斗町

岸和田市　島崎　冨志子
ブラウン管に出る百歳は皆達者

吹田市　栗谷　春子
こだわっている自分にも愛想つき

茨木市　藤井　正雄
自己弁護遂に泣き出すおさげ髪

八尾市　籾山　隆
ファンシーな夢は果てない銀河系

▼投句は、毎月15日までに川柳塔事務所へ。

川柳塔鹿野みか月結成満十周年記念川柳大会（**11月11日**）へのご参加を心からお待ち申し上げています。

川柳塔鹿野みか月事務局

女性コーナー

黄香の忠

八木千代選

昔　昔　子ども育てた　ことがある

この昔　昔の、子ども育てたの、と、胸につかえるような軋んだ書き方はどうでしょう。読むほうだってつまされて、人ごとではなくなります。今の豊かな時代と違って花子さんの子育ての頃、それは私のそれとは似たことも似ていないこともあるのですが、心の奥底を流れ続ける、生涯絶えることのない、かなしみの流れはたぶん同じだと思うのです。

六人のお子を育てられたご苦労をよく知っている私には、いっしょにすうっと花子さんの気持に入って行けそうです。少しも愚痴の匂いはしなくて、ほんとうの所はこの掌の中に今でもありありと子育ての実感は実存しているのだけれど、昔々と言い、育てたことがあると書いているのは、子に疎まれまいと距離を置こうとする世の親の宿命でしょうか。

米子市　石垣　花子

境界を作ると僕が枯れてくる

ひとたび自分の領域をもってしまうと愛着も湧き、本能的にわが城を守りたくなってくるのは、私も含めて大方の意志であろうとおもいます。テリトリーを宣言するのは正直で素朴な主張でもっともなこと。けれどですね。かたくなな高い塀をめぐらしても、安心できるどころか自縄自縛になるのではないかと、「僕が枯れてくる」と、森子さんは断定しています。明るい言い切りかたで、それも的を射ているからあざやかです。

富田林市　池　森子

海が深いと誰もが知っている事だ　和歌山市　田中　輝子
秋だから逢いたい人に会いに行く　大阪市　鈴木　節子
一つなら誰も輝くものがある　米子市　足立由美子
動かない浮きを見つめて生きている　西宮市　奥田みつ子
荒あらしいこころに白を募らせる　和歌山市　後藤　正子

命がけでわたしの紙と向かい合う　島根県　松本　文子
満月の夜が怖くて閉じこもる　藤井寺市　高田美代子
一本の薔薇が私を埋めつくす　名古屋市　藤井　高子
すでに秋　塩の壺には塩満たす　和歌山市　西山　幸
少し汚してあなたを帰すことにしよ　佐賀県　寺中三枝子
許そうかここにも深い靴の傷　大阪市　田中　弘子
過去未来　今の私が見当たらぬ　姫路市　丁坪サワ子
行き着いた家で雑巾刺している　米子市　寺沢みど里
あの人も他人だったと草をぬく　吹田市　栗谷　春子
やわらかい指鉄砲の的はボク　富山市　舟渡　杏花
傷痕をゆっくり巡る観覧車　大阪市　冨上　朝世
松は立ち枯れ　言っておきたいことがある　大阪市　佐藤　奏月
残暑まだ人憎む日がつづくなり　松江市　竹内寿美子
おぼれても縋れぬ藁がそこにある　和歌山市　桜井　千秀
太陽の神にいじめは有りませぬ　米子市　林　瑞枝
いま翔ばねば翔ばねば水かさ増してくる　和歌山市　木本　朱夏
生きざまを呑み込み鏡老けてゆく　米子市　政岡日枝子
すっぽんが何がなんでも嫌という　松江市　安食　友子
名指されて瞬時天狗になり切ろう　大阪市　町田　達子
血縁をすっかり忘れよくねむる　尼崎市　春城　年代
こわいから楽天的に生きている　和歌山市　森　茜
仲秋の月にならんと満ちて行く　茨木市　堀　良江
愛の深さだろうか　哀しい顔やね　堺　市　山本　半銭
星占い　母の思いと遠い距離　大阪市　本間満津子
夕映えの今の暦はめくれない　米子市　青戸　田鶴

暗中模索　脱ぎっぱなしの服たたむ　大阪市　神夏磯典子
歩き疲れて少しよそ見をしています　堺　市　板野　美子
灯に祈る大悲無倦の仏の掌　出雲市　園山多賀子
三分の電話へ情けきりつめる　堺　市　高橋千万子
大丈夫　父と母との娘です　米子市　新　正子
も一人の私が渦の外にいる　和歌山市　山川　克子
裏切った罪の深さは量れない　河内長野市　植村　喜代
太い絆がぷっつり切れる手品師の影　米子市　川上より子
引き潮に悩みを全部くれてやる　大阪市　亀井　円女
失うことで摑んだものも一つずつ　米子市　野坂　なみ
傷心に巻く包帯が見当たらぬ　大阪市　板東　倫子
一つ山越えた苦しみ忘れまい　和歌山市　坂部紀久子
口外はせぬと日記に書いておく　寝屋川市　坂上　高栄
仮の世のつまずきばかり助詞　動詞　羽曳野市　吉川　寿美
強引な虫に魅かれている小虫　堺市市　鈴木　可愛
いい雰囲気で次の遊びを考える　米子市　金山　夕子
立ち読みで少し空腹満たされる　唐津市　浜本　ちよ
企みはなくてもバラにトゲがある　岡山県　清水悠貴女
べそかいて優しい手紙読みかえす　大阪市　新井　朋子
花びらほどの幸せ続きますように　米子市　小村てい子
自由の身　夏にお礼を言いすぎた　米子市　坂口　一江
永らえて年の数ほど闇を知る　倉吉市　淡路ゆり子
柿照葉　きざしはすでに燃えている　米子市　白根　ふみ
猫の背をなでて明日を考える　和歌山市　内芝登志代
今までは筋書き通り生きている　米子市　沢田　千春

萩の花好きでひとりに馴れている
露草の露より白い幸がある
こおろぎが鳴いて生きてるなと思う
迷路にはひざをかばって近寄らぬ
さまざまな空気に溶けている無色
わたくしの星です可愛いもみじの手
晩年を描くジグソーパズルかな
淋しいからイタチの訪問うけている
伏兵をよみ違いして絵が崩れ
トンネルの合間合間の晴れやかさ
絵葉書の絵になぞなぞがありそうで
交わりやすい白を過保護にしてしまう
風化した歳月までも知る鏡
しかたないから膝と相談してみよう
スリッパも靴もわたしへよく靡く
椎の実がはじけよも山ばなしする
ひとり居へ幸水梨の甘すぎる
鯉一尾　死んだ日からの鬱つづく
満天の星のひとつと相聞歌
思いきり叫べば帰り来るこだま
物差しをソフトに変えて交わろう
雑巾をきれいにすすぐ秋の天
可愛い子が二人　隣家の鳩時計
何かいいたげ　ひまわり細く咲く

八尾市　宮西　弥生
鳥取市　小谷美っ千
倉吉市　野中　御前
米子市　中井　ゆき
和泉市　中川　楓
八尾市　高杉　千歩
三笠市　山田すみ子
和歌山市　福本　英子
岡山県　山本　玉恵
富田林市　片岡智恵子
羽曳野市　芦田　絢子
米子市　田中　亜弥
西宮市　西口いわゑ
堺　市　神原　文
鳥取県　西原　艶子
米子市　光井　玲子
大阪市　津守　柳伸
西宮市　門谷たず子
岡山県　矢内寿恵子
大阪市　樋口シマ子
貝塚市　池田寿美子
豊中市　辻川　慶子
宝塚市　丸山よし津
東京都　山口　新子
八　木　千　代

投句先　〒683　米子市花園町14―8

天

水粉千翁選

ななかまどの天は静かに炎えている　文
疑わず杉は一途に天をさす　南奉
草に寝て蒼さ極まる秋の天　義美
付き合ってくれる人ある天の川　敦子
惜敗の無念を天が知っている　重人
天高く私に痩せるすべがない　あやめ
天の意が二人を渡す丸木橋　信義
夢を追う無限の天に蒼さ追う　柳五郎
天高く妻はたしかに太りすぎ　喜一郎
父越えて天まで翔べよ竹とんぼ　寿美
人間のテーマよ天と地のはざま　寿恵子
決断が天の一声待っている　智加恵
逆境へ頑張れ天の声がする　悠泉
道問えば仏だまって天を指し　清柳
天性は生まれたままのコスモスで　恵美
公害の空で天女の咳しきり　石舟
秋の雲遊ばせている天守閣　宵明
ベテランが一瞬天に祈りこめ　伊津志
恋なって満天の星みな味方　たつみ
蒼天へ身構えている竹トンボ　美代子
天下国家論ずる酒を追加する　どんたく
天を撃つ紙鉄砲に自問する　博友
天才と言われてからの肩の凝り　鉄治
天蒼し一度とびたい紙の鶴　早苗
満天の星の一つに問いかける　清芳
天駆ける夢をみた日も吹き溜り　枯梢
天の声聞きたく祈り深くなる　博子
虫の声　天涯孤独の身を攻める　希久子
晴天を信じてめくる花暦　克枝
天空へ哲学で描く円と線　史風
生きざまを見せて大樹は天をつく　悦子
躓いた坂の小石が天を向く　ひでの
天井に貼った計算書が合わぬ　はるお
花匂う謙虚な色で天仰ぐ　照子
天井のないどん底に空がある　保州
寝転んで天へ追想果てしない　愛論
言い勝って空しさ天に叫びたい　芙美子
爽やかに天の高さへ秋ざくら　勝美
井の中の蛙に丸い天がある　度
雑草の祈りを天は見捨てない　克枝
お蔭さまで生かされている天の下　螢
正直に生きてる私の青い天　雀踊子
天と地の間で運命聞いてます　杜的
地
秋の天　昨日のことは忘れよう　正坊
天
頂点に立って聞こえぬ天の声　京子
軸
天下泰平話せばわかることばかり

文化

山田高夫選

農民の文化が眠る元庄屋　博子
漬物をきらう文化と思うてる　裕美
働かぬ人間ばかりにある文化　保夫
文化国家ずらり並んだ兎小屋　みつ子
文化祭うどんを食いに行っただけ　抜智
ふるさとの文化に土の香がこもる　蕗児
黒字国　文化国家とおだてられ　金吾
文化財重荷になって寺貧し　志重
日本の文化が匂う菊日和　元江
文化人八方美人の舌を持ち　愛論
飽食の文化国家の使い捨て　螢
眼病の地蔵が村の文化財　明水
綿菓子が作れる文化かもしれぬ　小鹿
異文化の中で程よく中和する　美代子
パスポート国の文化に触れてくる　浪速子
ゴキブリが文化のスキを生きのびる　南奉
文化人らしく絵画の前に佇ち　清柳
文化人らしく見せたいベレー帽　弘朗
カタカナが日本文化に帰化される　豊
むずかしいことは文化で逃げている　狸村
文化大革命テレビ買い替える　保州
漬物の自慢故里文化論　四郎

カプセルに文化遺産を詰めて埋め　高明
名前ほど文化包丁切れもせず　ふさ子
パチンコの文化勲章なら取れる　鉄治
町の文化じっと見てきた辻地蔵　京子
小刀を使えない子を生む文化　正坊
生活の文化ストレス増えてくる　文
文化いま性と漫画と個人主義　あずき
キッチンの文化　老母へチンと鳴り　可住
カルチャーで今日も仕入れて来た文化　寿美
世間体ばかり気にして文化都市　秀峰
花魁は文化でないと野暮な奴　正敏
たこやきが一番売れる文化祭　よし津
草餅に母の文化が生きている　たつみ
文化財ハンドマイクがよく喋り　しげお
文化には遠く目刺を焼いて食う　義美

佳

文化財に住んで不自由しています　正子
みかけだけの文化に踊る蛸の脚　雄々
人間を退化させてゆく文化　雀踊子
文化果つる地の美しい大自然　希久子
平成へ先頭の文化継ぐ太鼓　どんたく

人

文化財とてもやさしい仁王の目　重人

地

食文化歯並みの弱い子に育て　白光子

天

文化都市バキュームカーがまだ走る　杜的

軸

異文化を繋ぎ合わせた駱駝の背

親しい

柴田英壬子選

お茶漬の親しき味や旅帰り　夢酔
親しみの瞳変らぬ十年目　右近
親友でいようと別れそれっきり　裕美
風さやか親しい友の安否など　高夫
ティールームまでで親しくなれぬひと　文子
ツーカーの響くものあり五七五　多賀子
犬同士親しくなった散歩道　博子
平家の流れ山に親しい人多し　のぶ夫
親しさはちっとも年を取らさない　木魚
親しさのあまり撲ったことにされ　保州
親しさはみな割勘で払ってる　抜智
手ぶらでも親しい友を見舞う日々　秀峰
親しさは肯くことが多くなる　伊津志
世界中の花と親しみ飽きぬ年　路子
犬も花も親しく垣根越えてくる　達子
親しさの中に棘ある京都弁　杜的
親しさを確かめ合うて出る暖簾　清水
親しくしてます一線引いてます　シマ子
親しいからこそお金は貸せまへん　愛論
一度見たら忘れぬ顔で親しまれ　可住
財産も負債も君と僕の仲　宵明
貧乏神と親しくなったのは誤算　枯梢

魂胆があって親しい貌をする　美代子
糸通し親しい女にプレゼント　隆
親しみがわいて出てくる花の種　狸村
親友の訃を聞いている仏桑華　正坊
赤とんぼ親しい人を呼びもどす　芙美子
親しさは実印までの間柄　しげお
ライバルの笑顔が親しすぎないか　重人
親しさの判る男女がいるロビー　規不風
親しさが愛に変ってから自閉　冬葉
太陽と親しくなれぬ深海魚　正敏
親しさの仲にも溶けぬラムネ玉　希久子
親しさやへのへのもへじ砂に描く　清柳
迎え火に親しい人を連れ戻す　寿恵子
目の高さ変えて親しい人が増え　ただし
親しいと思った影がついて来ぬ　みつ子

佳

親しさは時間かまわぬぶぶあられ　あやめ
愚痴もなく灯火親しむふたりぼっち　螢
故郷の風が仇名で呼びとめる　寿美
ホテルより家に泊れといってくれ　弘朗
つまずいた石と親しくなりました　はるお

人

流された河童に親近感がある　度

地

干物の下を親しみくぐらされ　雀踊子

天

湖を親しく抱いて逆さ富士　虹汀

軸

親しみを込め再会の肩を抱く

初歩教室

題―来賓

辻　白渓子

今月の題「来賓」は、祝辞、挨拶の句が中心になっていたように見受けられ、全く同一の次の句がありました。「来賓の長い祝詞にあくび咬む」「あくびする」。これは誰もがすぐ思いつく着想で賢明とは言えません。この場合は、「退屈をさせる来賓祝詞読む」にすれば面白いと思います。

来賓の末席けがす雑魚で居る　一枝
（来賓の末席代理らしい顔）
感動もなく唯来賓の顔並べ　高栄
（来賓の顔ぶれみんな齢を取り）
選挙前　来賓の席狭すぎる　和枝
（選挙事務所　来賓が来て盛り上げる）
始球式来賓の球まとはずれ　杏村
（来賓の球がそれてる始球式）
自己紹介まずしてからと言う祝辞　悦子
（来賓の挨拶　選挙のにおいする）
来賓のダイヤ遠くまで光ってる　登代
（来賓のひとりが目立つダイヤ嵌め）
来賓が中座潮時考える　君江
（中座する潮時来賓弁える）
来賓へ苦手な敬語少し出し　ますみ
（先生と来賓呼ばれることに慣れ）
来賓の真近の席で緊張す　民子
（来賓に近い席しか空いていず）
来賓は下手な演説気にしない　昭治
（演説が苦手な来賓だって居る）
来賓で招かれあぐら組めもせず　侑里
（行儀よく来賓最後まで座り）
来賓に笑顔の種類使い分け　忠禄
（来賓が笑顔で応えているゆとり）
来賓の祝辞に時計見る司会　みつ子
（来賓の祝辞時間を気にしない）
来賓のやたらでっかい花かざり　友子
（胸に花つけて来賓らしい顔）
来賓席　安定薬飲んで行く　富恵
（来賓席何の薬か飲んでいる）
来賓の知事つぎつぎと中座する　呼風
（来賓の知事がそわそわする中座）
来賓の村長さんの髭りっぱ　すみれ
（村長と分かる来賓髭生やす）
教え子が来賓に来る卒業式　ようじ
（来賓の中に教え子一人居る）
筆太く来賓席の寄付の額　幸枝
（来賓の寄付筆太に貼り出され）
来賓の祝辞が毎年きまってる　(松)隆
（代り映えせぬ来賓の祝辞聞く）
老人会来賓の話聞きあきる　ますお
（来賓の祝辞に老人席が倦き）
来賓の長い挨拶私語多く　静江
（来賓の声聞きにくい多い私語）
来賓の模範演技へ沸く拍手　はる子
（型通り来賓演技をした拍手）
来賓席真面目な顔を作り上げ　ちづ子
（雛壇のように来賓顔そろえ）
此所からは来賓席と綱をはり　春風
（来賓の席だけカバーを掛けた椅子）
来賓があると校舎清掃され　ひさ子
（掃除行き届き来賓待つ校舎）
幼馴染が来賓で来る村おこし　絢子
（幼馴染と来賓席で顔が会い）
義理の席ぎこちがなくて落着けぬ　志華子
（来賓の席で代理が落着けず）
万歳三唱主待つリボン三つ残り　明吉
（来賓が三名揃うてないリボン）
疲れた耳に来賓話又同じ　美代子
（来賓がおんなじ祝辞しか言わず）
よそ行きの顔で父さん来賓席　好花
（来賓に父が居るので落着かず）

来賓の頭テレてる男子席　志重
（来賓に似合う頭の光りよう）
停年で初めて座る来賓席　高雄
（停年が来賓席に座らされ）
場数ふみ来賓ソフトな挨拶し　一乗
（来賓の流石に慣れている祝辞）
ユーモアの祝辞来賓受けている　ふさ子
（ユーモアで来賓祝辞締めくくる）
来賓のネクタイちょっと曲ってる　彩子
（ネクタイの歪みを来賓気がつかず）
来賓の欠伸もならぬ祝辞聞く　敬
（欠伸しながら来賓の祝辞聞く）
来賓がやおら取り出し眼鏡拭く　保夫
（間を置いて来賓眼鏡拭き直す）
来賓席胸のバッジがよく光る　和子
（来賓席バッジが光るのも混じり）
来賓へ村の診療も顔ならべ　繁男
（来賓の席へ村医も来て座る）
祝辞の来賓受けるスピーチが　芙美子
（来賓の祝辞会場笑いこけ）
大物はすぐ姿消す主賓席　時弘
（顔見せるだけで来賓喜ばせ）
来賓の話上手に拍手湧く　姫女
（来賓の話上手に座が和む）
来賓席どんなお方が見えるかな　茂章
（来賓の席があいてて落着けず）

あの頃は来賓席に亡父の顔　秀香
（来賓の父勲章をつけて居た）
会費不要上座へ来賓鎮座する　芳水
（来賓へ花つけ会費辞退する）
来賓席次の選挙をねらう顔　金吾
（次期選挙ねらい来賓如才ない）
選挙前　来賓席は議員さん　紫晃
（来賓へ議員が顔出す選挙前）
来賓が入って空気ピンと張る　豊子
（来賓が揃い拍手をさす司会）
掛け持ちだとすぐ気付かせる来賓者　富喜子
（掛持ちが来賓席の端に掛け）
来賓の髭に慌てた接待役　隆雄
（来賓の髭へ世話役気を使い）
来賓の席で寄付の話を聞く　義
（寄付額の順に来賓並べとく）
来賓の祝辞待ち兼ね鏡割　太一郎
（来賓の祝辞が済んだ鏡割）
来賓の祝詞に園児眠りかけ　春子
（来賓の祝詞　園児に分からない）
来賓のレースへ拍手促され　春枝
（来賓の競技へ校長拍手する）
来賓の席でクシャミが出て困る　伊都子
（来賓の席で怠えているクシャミ）
預ける時の笑顔は何所へ借りる時　洋史
（来賓の扱いされている預金）

来賓の長文　頭上通り過ぎ　静子
（来賓の挨拶末席聞き流す）
来賓の自己PRに座がしんしん　昭子
（来賓が序でに自己を自慢する）
来賓の数で司会者力見せ　吉太郎
（来賓が多くて司会気が疲れ）
来賓の並ぶ席での内輪もめ　(親)隆
（来賓の顔ぶれライバルも揃う）
来賓の席の割には固い椅子　章久
（同じ椅子並べ来賓座らされ）
両陛下迎え千代の目が光る　洋
（正面に陛下を迎えている土俵）
来賓が去って宴会盛り上り　和枝
（来賓が去んでカラオケ盛り上る）
着想と表現が巧みな句
水引の分だけ来賓飲んで食い　章久
雛人形のように来賓座らされ　芳水
来賓の言葉をのんでいるテープ　静子
来賓の代理で席に浅く掛け　(石)美恵子
来賓の慣れた祝辞を冷めて聞く　〃
私の句
来賓が走って運動場が沸く　白渓子
猪口置いて来賓の芸ほめておく　〃

題「番　組」　**11月15日締切**（1月号発表）
宛先　〒569　高槻市桜ヶ丘北町3—19
辻　白渓子

川柳と季節

川柳こぼれ話

田中正坊

俳句には「季語」を欠くことができない。と言うよりも、「切れ字」とともにたいせつな要素となっている。川柳はもともと季語は関係がないとされているが、四季がめぐる国の短詩型文芸であるかぎり、季節にかかわりのあることばが使われるのは当然であろう。本号に編集部として同人吟から「四季百句」を抄出したが、大ざっぱに数えて約四分の一の句に、春夏秋冬あるいは季節を表すことばが入っていた。

では季節をどのように区分するのかということになるが、一般的には立春・立夏・立秋・立冬をそれぞれの季節のスタートとしており、歳時記の多くは春（二・三・四月）、夏（五・六・七月）、秋（八・九・十月）、冬（十一・十二・一月）に分類している。しかし、本洲の気候を中心にして考えると、二月を春、八月を秋というのは、実感としてピンとこない。そこで、江國滋の『きまぐれ歳時記』では、春（三・四月）、夏（五・六・七・八月）、秋（九・十月）、冬（十一・十二・一・二月）としている。

また、奥田白虎の『川柳歳事記』は、一応現行の歳時記の四季区分に従ってはいるが、メーデー（五月）を夏、朝顔（八月）を秋とするのは、生活実態とややズレがあるとし、編集にあたっては旧来の区分は参考程度にして、体感的な実態を基準とした、と述べている。なお、二至二分、すなわち春分・夏至・秋分・冬至で季節を区分することもでき、この方が実際の季節感覚にもマッチするようだ。私としては歳時記に準処しながらも、それにこだわらぬ白虎説に賛成である。

ついでに触れておくと、季節を現すことばとしては、春夏秋冬とそれを含んだ熟語（秋日和・冬銀河）、月の名とその異称（霜月・師走）、それにいわゆる季語と祝祭・記念日、行事（大文字・運動会）と忌日（路郎忌・白秋忌）などがある。

まえおきがたいへん長くなったが、私がここで提言したいのは、川柳にもっともっと季節にかかわることばを使い、季節感あふれるフレッシュな句を柳誌あるいは句会で発表してほしいということである。先輩の句に

秋風の中で乞食に拝まれる　豆秋
曼珠沙華きれいな死に方ではないか　藻介
四面楚歌　故郷は豆の花の頃　薫風

など、季節をおりこんだ佳句が少なくないことに注目してほしい。

しかし、季語やそれに類することばを使うからには、きちんと歳時記を繰って四季を確かめてほしい。句会においては、やはりその季節に合ったことばを使うべきだが、句報・柳誌に発表される場合は、作句の時点から一か月間ないし二か月間の間隔があるから、多少のズレはやむを得ないだろう。とは言っても、十一月号に「葱坊主」（春）や「蟻」（夏）が顔を出すのはどうかと思うし、真冬の一月号に「春の川」、「コスモス」（秋）、七月号に「花ごろも」（春）、「若菜」（冬）が登場するのもちょっと困る。

あくまで季節にこだわるなら、あらかじめ発表の月にきちんとピントの合った句を作るのも一つの方法だが、そこまでしなくとも、秋には秋、冬には冬、少なくとも季節に異和感を与えないような作品を発表したいものだと思う。そのためには、辞典とともに歳時記を常備すべきであり、私は机上用に山本健吉の『基本季語五〇〇選』、携帯用に角川書店編『新刊・季寄せ』を愛用している。

生々庵句碑除幕と記念句会

田中透太

中島生々庵句碑

快晴の九月二十二日午後一時、栞主幹、生々庵前主幹未亡人の小石さんはじめ三十二名が出席、柳宏子氏の司会で除幕式が行われた。

まず、神酒と塩で句碑を潔めた後、建立者上田翠光氏のお孫さんの手で除幕された。

生き甲斐は男同士が信じ合い　生々庵

男ならずとも人間同士はかくありたしとの思いの中で、句碑に彫られたこの句がずっしりと胸に落ちた。

参列者献花の後、翠光氏から生々庵師への思いを馳せながら、句碑建立までの感慨をこめた挨拶があり、栞主幹の軽妙な祝辞、小石未亡人からお礼の言葉がのべられ、一同感激のうちに無事、式が終った。

句碑の付近には「スズラン」が自生しており、また、この日を祝うかのように赤とんぼが群がって飛んでいたのが印象的であった。

この後、記念句会に移り、三時過ぎ、少し離れた翠光氏の邸内に四十年前建立された麻生路郎師の句碑を訪れ、往時の師を偲んだ。

名も知らぬ山の起伏をうれしがり　路郎

長い間風雨に耐えて来た句碑は、栗の木の下で路郎師の風格を備えて立っていた。

翠光さん、そして、ご家族の皆様、たいへんお世話になり、有難うございました。

記念句会における各題秀句は次のとおり。

席題「牛」　阿萬　萬的選

牛の瞳に故郷の秋が写ってる　美房

赤トンボ　牛の優しい眼に出会う　章

近寄れば近寄ってくる島の牛　紫香

兼題「すずらん」　橘高　薫風選

すずらんの咲く高原で癒え近し　弥生

すずらんの愛　全身で揺れている　英壬子

スズランを活けて独りのカップ麺　章

兼題「男」　上田　翠光選

男の子でしょと泣かせてくれぬママ　頂留子

曖昧を嫌う男で疎まれる　太茂津

嘘のない男の顔は美しい　狸村

京都塔の会　吟行

とき　**11月18日**(日)　午前10時集合

ところ　阪急「長岡天神」駅西口

句会場　粟生の光明寺

兼題　「器量」「束(たば)」「教える」

会費　4000円

申込先　〒601　京都市南区西九条開ヶ町41—1

松川杜的

(電〇七五—六八一—五〇六七)

平成二年度川柳塔社同人総会

10月7日（日）　大阪市立労働会館

平成二年度の川柳塔社同人総会は10月7日午後2時10分から大阪市立労働会館で開かれたが、出席者は52名、例年をはるかに上回る盛会で、約2時間にわたって活発な討議が展開された。

総会は西田柳宏子氏の司会で始まり、野村太茂津氏が開会の辞を述べた後、西尾栞理事長を議長に選出して議事に入った。はじめに高杉鬼遊氏が平成元年度の収支計算書・貸借対照表を掲示して詳細に説明、松川杜的氏が会計監査報告を行った。

つづいて藤井一二三氏が別項要旨のとおり事業経過報告を行い、田中正坊氏から川柳塔社規約（同人規約）案の改正経過と主旨を説明して文書で提示、次いで黒川紫香氏が役員改選を提案した後、質疑討論が行われた。

なお、規約については参加者の発議による二か所の追加も含めて全議案が満場の拍手で採択され、阿萬萬的氏の閉会の辞で総会の幕を閉じた。

（規約全文は、本号別冊・同人名簿に掲載）

■事業経過報告

（事　業）

1年10月1日　同人総会（大阪市立労働会館）
同　11月12日　川柳塔碑の開眼法要を高野山奥の院霊園で挙行、西尾栞主幹ら同人・誌友多数出席
2年1月14日　高橋操子一周忌追悼句会を岸和田市薬師院で開催
同　1月15日　新春おめでとう会（大成閣）
同　2月25日　淡路島吟行バスツアー
同　4月1日　麻生路郎句碑建立除幕式を大阪市阿部野神社で挙行
2年4月8日　宮崎シマ子路郎賞お祝い句会を八尾市労働会館で開催
同　4月14日　吉原紅月追悼句会を姫路しらさぎ会館で開催
同　4月15日　土居耕花一周忌ユーモア川柳大会（大原町総合センター）
同　4月22日　尼緑之助三回忌追悼句会を出雲市銀輪荘で開催
同　5月6日　『川柳堺』二五〇号記念句会
同　5月20日　川柳ねやがわ15周年記念句会（寝屋川市）
同　5月20日　川柳藤井寺句報一〇〇号記念句会（藤井寺市）
同　6月1日～「大阪の人写真展」に西尾栞主幹の写真を展示
同　6月24日　池森子、吉岡美房受賞祝賀句会（富柳会・富田林市）
同　7月6日　路郎忌本社句会
同　7月21日　翠柳吟社創立15周年記念大会への参加バスツアー
同　9月9日　川柳塔わかやま吟社20周年記念大会（和歌山市）
同　9月22日　中島生々庵句碑除幕式（奈良上田翠光宅地）

その他

。一路賞を新設
。女性のページ「ひみこさろん」

を開設
。川柳塔社業務運営規定を制定
。「愛染帖」（橘高薫風選）を「銀河系」と改め、2年1月号より河内天笑が担当
。「初歩教室」担当を1年11月号より阿萬萬的から辻白渓子へ交替
。川柳塔賞選考委員（2年度）を河内天笑から宮口笛生へ、同（3年度）を谷垣史好から玉置重人へ交替
。玉置重人の各地柳壇賞推薦者を解嘱

（受賞）

宮崎シマ子　平成元年度路郎賞
福本　英子　同　同賞準優秀作第一席
田中　正坊　同　同賞　同　第二席
池　森子　平成元年度川柳塔賞
山根　八重　同　同賞準優秀作第一席
森　茜　同　同賞　同　第二席
八木　千代　平成元年度愛染帖賞
西口いわゑ　同　茴香の花賞
小池しげお　同　月間賞永久保持
牛尾　緑良　同　一路賞
吉岡　美房　同　各地柳壇賞
岩本雀踊子　同　文化功労賞（桜井市）
里　小路　同　文化功労賞（寝屋川市）

（句集発刊）

羽原　静歩　句集『雪月花』
柴田英壬子　句集『夾竹桃』
波多野五楽庵　「波多野五楽庵句集」
小西　雄々　句集『松露』

（物故者）

吉原　紅月（平成1・12・24）
菊田いさむ（〃　2・1・31）
米沢　暁明（〃　2・3・30）
新谷　忠昭（〃　2・9・1）

■新同人

岩佐ダン吉（岸和田市）西尾美与子（八尾市）秋元てる（西宮市）山崎君子（伊丹市）岸本木魚（橋本市）岩崎瑞穂（和歌山県）西口忠雄（和歌山県）高橋操漕（岸和田市）桝本露児（大阪市）長谷川司（守口市）芳鉄心（大阪市）松川芳子（京都市）阿部進（十和田市）村田善保（弘前市）金村青湖（出雲市）松村迷観子（香川県）三輪通彦（岸和田市）井上照子（吹田市）内田結実（和歌山市）野村静雄（川西市）岡本清水（竹原市）清水利武（大阪市）井上富子（倉敷市）高野律子（島根県）幸家單車（鳥取県）渡辺圭坊（京都市）荒川磯子（堺市）最上和枝（鳥取県）新正子（米子市）＝29名

■新役員

主　幹　西尾　栞
理事長　橘高薫風
相談役　東野大八・大坂形水・正本水客
副主幹　黒川紫香・野村太茂津
副理事長　西田柳宏子・阿萬萬的
会計監査　松川杜的・里　小路
参　与　岩本雀踊子・河井庸佑・谷垣史好
常任理事　小池しげお・奥田みつ子
理　事　西口いわゑ・宮崎シマ子

◎常任理事・参与・理事全員の氏名は本号別冊・同人名簿に掲載
◎会計担当については、10月より高杉鬼遊から春城武庫坊・川島諷云児に交替

（同人総会出席者） 栞・薫風・形水・紫香・太茂津・柳宏子・萬的・鬼遊・杜的・雀踊子・翠光・小路・笛生・吸江・武庫坊・千梢・千寿子・紀美女・きみえ・多賀子・三郎・吐来・素身郎・透太・文秋・勝美・天笑・白渓子・月子・庸佑・しげお・諷云児・幸・英壬子・清水・〆女・小林英子・正坊・智子・凡九郎・重人・松本文子・朱夏・三男・登志代・武雄・五楽庵・福本英子・一二三・美房・松川芳子・冬葉　（52名）

平成二年度二賞表彰

本社　十月句会

10月7日(日)午後5時半
大阪市立労働会館

平成二年度の二賞表彰十月本社句会は十月七日午後五時半から大阪市立労働会館で開かれた。今年も受賞者は全員出席、波多野五楽庵さん（青森）はじめ遠来の参加者も多く、百四名という大盛会となった。

初めに栞主幹から路郎賞の奥田みつ子さん川柳塔賞の野村京子さんらに賞状と盾が授与され、それぞれ所属の柳社・句会から花束贈呈があり、川柳塔鹿野みか月からは祝電が寄せられた。今回のおはなしは田中正坊氏でテーマは川柳と季節、その要旨は本号の「川柳こぼれ話」に収録されているので、ここでは省略する。

初出席は、岡本清水（竹原）野村京子（今治）石尾かつ乃（鹿野）園山多賀子・吉岡きみえ・松本文子（出雲）の六氏。月間賞は、町田達子さん（大阪）が獲得した。

（進行―岳人）（受付―福本英子・登志代）
（記録―天笑・月子）（清記―みつ子）

出席者―柳宏子・吸江・きみえ・紀美女・文秋・文子・千寿子・多賀子・朱夏・かつ乃・庸佑・勝美・冬葉・諷云児・登志代・凡九郎・天笑・月子・美房・透太・重人・三郎・年代・武庫坊・頂留子・柿木英一・はつ絵・シマ子・勝晴・雅文・保州・房子・文・正坊・満津子・典子・寿美・白兎・元紀・甘平・章久・達子・利武・章・岳人・〆女・千梢・絹子・ダン吉・楓楽・度・柳影・トメ子・光代・敏・規不風・紫香・美智子・恭昌・千秀・たず子・一二三・吐来・眉水・形水・五楽庵・憲太郎・しげお・栞・薫風・鬼遊・歌子・片上英一・八斗酵・白洋・寿子・京子・みつ子・いわゑ・英壬子・照子・三男・寿美子・武雄・太茂津・雀踊子・萬的・小林英子・福本英子・清水・幸・悟郎・白渓子・杜的・芳子・智子・笛生・まさお・春子・二南・美代子・君子・素身郎・狸村

席題「じっくり」　波多野五楽庵選

じっくりと見ればお前も美人やな　敏
じっくりとコーヒーを飲む昼下り　いわゑ
じっくりと作戦を練る玉の輿　歌子
じっくりと聴くシャンソンに秋がある　元紀
秋の夜じっくり妻と飲むとする　月子
じっくりと心の中に入る人　春子
無口だがじっくり聞いてくれる父　保州
老母がいてじっくり芋が煮えてくる　はつ絵
じっくりとボディブローが効いて秋　朱夏
じっくりと聞かれて汗を出してます　ダン吉
嫁ぐ娘と今日はじっくり夜を明かす　照子
鬼瓦じっくり話すことがある　しげお
じっくりと殺し文句でくどかれる　正坊
じっくりにうかつがあった時間切れ　勝美
じっくりと無念の涙咬みしめる　文子
じっくりとしては居れない救急車　吸江
じっくりと話せば判る筈でした　達子
じっくりと話するにも酒が要り　素身郎
じっくりと般若心経読んでます　三男
じっくりと見たら増えます顔の皺　天笑
落し穴じっくり考えたはずなのに　千梢
じっくりと結果を待っている余裕　房子
じっくりときけば涙の出る話　栞
腰すえてのめば一升空けるかも　笛生
六法をじっくり読んでワルになる　雀踊子
共稼ぎじっくり話す暇が無い　芳子
玄関でじっくり嫌味聞かされる　白渓子
じっくりと構えて男見失う　美房
じっくりと話の裏を読んでいる　吐来
じっくりと聞けば元手の要る話　吐来
じっくりと夫婦は別の策を練る　美房
じっくりと妻の寝顔を見る恐怖　恭昌
佳
招かざる客がじっくり腰を据え　素身郎
自己暗示かけてじっくり幸を待つ　規不風
じっくりと我が哀しみを飲み下す　文子
じっくりと考えすぎて貝になる　武雄
じっくりと構えて知恵の輪と遊ぶ　美智子

人

じっくりとさとす母には負けました　柳影

地

じっくりと殺し文句を考える　八斗酥

天

じっくりと見るとドガの絵踊り出す　武庫坊

軸

冬眠の穴をじっくり掘っている　五楽庵

兼題「仮り」　林はつ絵選

仮りの世をしたたか生きる能の面　道胤

背広着ると企業戦士の顔になる　八斗酥

選者と二賞受賞者：（左から）清水絹子・野村京子・奥田みつ子・石尾かつ乃・栗谷春子・春城年代さん

仮りの世の花言葉など何としょう　繁男

ひょっとこの仮面の裏で泣いてます　小鹿

あなたとの仮りの宿でも美しい　シマ子

仮り植えが図太く根づき動かせぬ　形水

当人も仮りのポストと知っている　一二三

仮りの名が河童アブクで生きてます　登志代

仮面など似合わぬ父の顔が好き　〆女

良妻の仮面を外して楽になる　天笑

仮りの世を時計まわりに生きてます　寿美

仮説の中で回るわたしの風車　文子

仮りの世をまだ捨てられず石を積む　元紀

能面に狂った仮りの世が燃える　朱夏

仮りの世の縁かばってくれる傘　(柿)英一

仮りにも男確と覚えた死の作法　五楽庵

仮りの世の柘榴大きく割れはじめ　眉水

大臣になると仮面を用意する　正坊

気まぐれにつけた仮面がはずせない　天笑

仮りの世の節ぶしに食う赤いめし　颯云児

仮り親に返せぬ恩が山とある　千梢

仮り縫いに手間かけた程に見てくれず　智子

仮りの名でうまい珈琲飲んでいる　文子

仮りの世の眠りが日々に深くなる　多賀子

良識が仮眠、健忘症らしい　透太

表札が二つ並んだ仮住い　紀美女

仮説の中に本音も入れてある　柳伸

仮縫いも鼻声になるマタニティ　千梢

煩悩のたかぶり仮の世と知りながら　いわる

仮り初めの恋人になる傘の中　しげお

仮装した鼻へ河内の声かかる　佳

仮りそめの恋わたしに過ぎた人でした　みつ子

仮りの世の仮りの呪文を唱え合う　美智子

仮初めの恋が噂の野火となる　颯云児

内縁にこだわり持たぬ洗濯機　雀踊子

仮の世の蒼くほのめく愛溜めて　妻子

人

いずれ落ちる水滴　葉は仮り住居　白兎

地

燕が去って仮の世は寒くなる　螢

天

一冊の六法全書と仮り住い　岳人

軸

仮住まい小さな灯り点けたきり　はつ絵

兼題「余生」　安藤寿美子選

これも余生灯にすがりつく冬の蠅　早苗

ボケ封じの寺にも詣っておく余生　典子

趣味多忙余生まだまだ銭が要る　〆女

三人の孫も育ててきた余生　笛生

凶と出た余生に腹がすわります　ダン吉

亡夫の忌やあなたの余生ももろてます　千寿子

余生安泰　妻が横に居てくれる　杜的

折角の余生を呆けていられるか　文秋

余生塗る絵具の赤が未だ足りぬ　武庫坊

火消壺とび出すチャンスを待つ余生　信義

願わくば余生の地図は紫に　敬

人間がだんだん好きになる余生　小鹿

余生かな時計を持たぬ日の楽し　みつ子

時刻表捨て鈍行で行く余生　朱夏
虹をまだ追いかけている余生なり　いわゑ
余生なお女でいたい姫鏡　たず子
主導権妻が握っている余生　芳子
年金を残さず使こて元気です　天笑
余生とは淋しきことば吾亦紅　正坊
まだ燃える火種を抱いている余生　諷云児
土の香にしみた十指にある余生　雀踊子
漢字よりひらがな好きになる余生　透太
余生まだ秋の構図が決まらない　みつ子
火と水の性で余生も小競合い　シマ子
余生考えると雨が降ってくる　度
コスモスの種を余生に植えておく　五楽庵
ルーブタイ粋にこなしている余生　(小)英子
身辺の整理しきれぬまま余生　紫香
祈り疲れても余生は軽くしておこう　文子
好きなよにしなはれ余生つき放し　憲太郎
自画像を描き直している余生　保州
葬式代ぐらいは貯めてある余生　しげお
余生やない私主役の二幕目　頂留子

佳

余生尚　父は時々逆立ちす　(柿)英一
夫よりひと日長生きしてみせる　文
あなた知っていますか蟻の余生　白兎
浦島の余生案じた玉手箱　登志代
胃薬をとんと忘れている余生　はつ絵

秀

余生まだこれから靴を買い替える　柳宏子

軸

名刑事　余生はとんぼもつかまえず　寿美子

兼題「当分」　宮口笛生選

当分は黙っておこうレントゲン　吸江
当分は肚に納める処世術　吐来
球形が当分ひずむ秋の雨　白兎
当分と思いしパートが板につく　悟郎
当分は単身赴任たのしむ気　吐来
当分は猫かぶりあう嫁姑　千秀
当分は別居しますとはしり書き　雅文
当分は塩漬けにする株下落　萬的
当分は妻もやさしい病みあがり　たず子
当分は靴も磨いてくれた妻　杜的
当分は株のヤケドを忘れない　重人
当分は知らん顔して泳がせる　満津子
当分は此処で暮すと姑が来る　かつ乃
当分はヤツをいたぶるネタがある　寿美子
一寸先は闇　当分のカネもない　文秋
当分は僕の配下になるだろう　妻子
当分の我慢ですがとそっけない

敬

腹立って当分逢わぬことに決め　早苗
当分は黙っていよう当りくじ　恭昌
当分は逢えぬつもりのメモを書く　冬葉
カレンダー当分酒飲む日が続く　〆女
当分は冷却期間とるとする　庸佑
年金はあるが当分働く気　紫香
タイガースのことは当分忘れます　元紀
当分はなんぼ言うても駄目ですワ　(片)英一
当分は二人をそっとしておこう　いわゑ
定年後当分遊ぶつもりです　鬼遊
肉食を当分医者にとめられる　月子
当分は病気もできぬ祝い事　まさお
当分は酒断ちますと嘘を言う　幸
当分は愛称で呼んでいいですか　多賀子
料理教室当分カレー食べさされ　一二三

佳

当分は逢わずにおくもテクニック　白洋
当分は未練が残る好きだった　登志代
当分はひとりで居たい恋がある　狸村
当分は会わぬつもりで切る電話　透太
反抗期　当分かまわぬ方がよい　信義

人

当分は耐えてなはれと他人様　光代

地

当分は老いのリズムを崩さずに　紀美女

天

金切れた当分逢わぬ事にする　甘平

軸

犬猿の仲　当分は続きそう　笛生

兼題「一緒」　岩本雀踊子選

亀と一緒に走って兎追い越そう　千寿子
死ぬ時は一緒と夫が言っている　文子
地獄まで一緒の鬼とめしを喰う　清水
もうちょっと一緒に居たいおぼろ月　寿美子
秀才と一緒にされて痩せこける　素身郎
ここからは一緒に行けぬ向う岸　満津子
一緒なら死ねると怖いことを言う　白渓子

秋風と一緒にふうせん旅に出る　幸
一緒なら黒も白だと言い切れる　歌子
ご一緒に赤信号をかけ抜ける　(新)正子
狂うなら一緒に狂う酒にする　太茂津
秋風と一緒に遊ぶ曼珠沙華　岳人
秋の虹一緒に見たいひとがいる　正坊
朝露と一緒に昨日消えてゆく　みつ子
ほろ酔いの月と一緒に散歩する　いわゑ
ふたりで一人前という一緒　天笑
野仏と一緒に濡れる通り雨　千秀
萩の庭一緒に歩いてくれる人　(福)英子
一緒にするからややこしくなって来る　千梢
そばにいただけで一緒に叱られる　庸佑
もうパパと一緒に歩くのはご免　月子
とぼとぼと月と一緒に帰り着く　月子
故里が一緒気の合う縄のれん　庸佑
一緒に食べたくてスープが冷めました　多賀子
一緒になる金をコツコツ貯めている　規不風
妻の写真といつも一緒にいる飯場　度
ライバルと一緒にされて背伸びする　光代
癖までも一緒　親子の証だろ　美代子
何時からか妻と出掛けたことがない　美智子
影法師いつも一緒にいてくれる　佳
喜怒哀楽一緒に並ぶ風羅漢　(柿)英一
秒針と一緒に掬う夢がある　秀　寿子
軸
一緒には越えぬ妻の水だまり　雀踊子

兼題「いのち」　西尾栞選

すばらしい恋かまきりが持つ命　雀踊子
火傷坊や国境越えていのち燃ゆ　登志代
長らえたいのちの重み車椅子　芳子
恐山いのちの風が来て遊ぶ　五楽庵
あなた一人のいのちではない薬包紙　たず子
こおろぎといのちのはなし秋深し　月子
燃えてくるいのちも秋のせいにする　幸
いのち延びここらで予定変えてみる　君子
湯が溢れ今日のいのちをたしかめる　紀美女
受胎告知ついにいのちが重くなる　楓楽
雪が舞う八十路のはんのいのち燃ゆ　透太
もう歳に不足は無いといういのち　笛生
いのち尊し僕に師の恩母の恩　清水
花のいのち今もさまよう芙美子の碑　吸江
にぎりめし一粒ずつにあるいのち　正坊
うたかたの命を月に笑われる　勝美
しらうおのいのち愛しく喉をすぎ　朱夏
輪廻するいのちガンジス河に水がない　しげお
失言がまた内閣のいのちとり　ダン吉
大の字で眠る主張のいのちなり　はつ絵
名匠がいのちを込めて目を入れる　敏
月掛けの保険いのちのバロメーター　千秀
あの星は母のいのちと信じてる　三郎
私の命預けた子の十指　千寿子
ひとつしか持たぬ命を持て余す　美智子
この辺で薬と妥協する命　照子
頂点に立つといのちを狙われる　幸
一粒の重みいのちの種を播く　保州
いのちより大事なものを探してる　年代
日々好日いのち冥利に生きている　房子
引替えに出来るいのちは持って無い　白渓子
碑にいのち吹き込む倶会一処　寿美
佳
腎バンクの順番待っているいのち　天笑
低工賃いのちを削る音がする　ダン吉
靖国のいのちだんだん軽くなる　芳子
父の矢が尽きてもいのち強かに　太茂津
いのちがけで添うた人です粗大ゴミ　(福)英子
人
いのちまだ惜しく薬草干している　多賀子
地
命なり終の栖はここでよい　まさお
天
芸術に燃やすいのちの秋が好き　達子
軸
戦争の軽い命のほめ言葉　栞

夜市川柳募集

題　選者　締切
第6回「拾う」　高杉　鬼遊　11月末
第7回「女」　住田英比古　12月末
第8回「妻」　板尾　岳人　1月末
第9回「積む」　古川　一高　2月末
第10回「猫」　中尾　藻介　3月末
投句先　〒593　堺市堀上緑町2－9－2　河内天笑方　堺川柳会

こんぴら詣で

（その二）京都

布施幸子

祇園歌舞練場と背中合わせ、京の遊里のまんなかに安井金比羅宮がある。

讃岐の金刀比羅宮から元禄八年（一六九五）に勧請された大物主神、崇徳上皇、それに源頼政を祭神としている。

こんぴらさんといえば、まず海上守護を思い浮かべるが、安井金比羅宮の御神徳は、一に『縁切り』ではないか、という気がする。社殿の辺りには、悪縁断ちを祈る絵馬がひしめいているからである。そして奉納者のおおかたは女性なのだ。

場所柄、艶な女人のお詣りが目立ち、ひとごとながら願いごとの筋を想像したくなってくる。どんな男と縁が切りたいのやろ？

境内の絵馬殿には、五十四歳女性の『禁男』の絵馬があって話題を集めてきた（ただし三年間の期限つきの禁男で、五十七歳には解禁になったはずである）。その影響で縁切り絵馬がひしめいているのかどうかは知らないが。

このお宮の起こりをたずねると、千三百年も昔、藤原鎌足（六一四―六六九）が建てたという『藤寺』に行きあたる。鎌足ははじめ中臣鎌子といって、河内に住む中臣氏の一員だった。ところが大和に進出して朝廷の祭官になり、力を蓄え、中大兄皇子に協力して大化改新の第一功労者となった。その功に報いる褒美の一つとして、朝廷から貰ったのが、〝藤原〟という姓である。

藤波の花は盛りになりにけり
平城の都を思ほすや君

万葉集にある歌だが、いにしえから奈良は桜や藤の名所だった。鎌足の住んだ高市の藤原にも、初夏のころ紫や白の蝶型の小花が、みごとな房をこしらえたことだろう。

居住地の藤原の名を苗字として拝受した鎌足が、一族の栄えを念じて建てたのが藤寺で、境内には藤の木がたくさん植えられた（ただし賜姓は鎌足の死の直前だったという説があり、藤寺建立はあるいは子または孫だったかもしれない）。

『年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず』とか、鎌足の時代から光陰は大きく移って久安二年（一一四六）、花は変らぬ美しさ

寝屋川市民川柳大会

とき 11月3日（祝） 正午開場
1時締切

ところ 寝屋川市立総合センター4階
（京阪寝屋川市駅からバス②乗場
総合センター前下車すぐ）

会費 1000円（記念品・句集呈）

題と選者
「毒舌」 里 小路選
「ビデオ」 岡 良三選
「走る」 田中 新一選
「地図」 中林 酔虎選
「顔色」 西出 楓楽選
「斑」 橘高 薫風選
「市民」 西田柳宏子選

席題 なし

出句 各題2句（出席者に限る）

賞 各題秀句に選者色紙と記念品呈

主催 寝屋川市川協協会
後援 川柳ねやがわ

を見せる藤寺には、崇徳上皇の寵妃、阿波内侍が住んでいた。藤寺のたたずまいを愛でた上皇は、阿波内侍をたずねて度々行幸した。

うら若き上皇の心中は常に孤独だった。鳥羽法皇の第一皇子でありながら、「実子にあらず」とうとまれ、帝位を下りて幼い異母弟（近衛天皇）に立場をゆずらねばならなかった。退位の条件として、近衛天皇の次の帝位は、崇徳上皇の皇子が継ぐという約束も、結局は反古となっている。

一一五六年、鳥羽法皇の死がきっかけとなって起こった保元の乱は、そんないきさつをめぐる皇位争いと、摂関家の勢力争いが絡みあって、骨肉相食む戦いとなった。戦いに敗れた崇徳上皇は、讃岐に流されて八年後に崩御した。「われ魔性とならば王を奪って下民となし、下民をとって王となし、この世に世乱をなさん」と呪いの言葉を残し、荼毘の煙は白峰の空から都へ皇居へとなびいたと伝えられている。

上田秋成の『雨月物語』の『白峰』には、山中で西行法師と対話する崇徳上皇の亡霊が、鬼気せまる筆で描かれている。

朱を注いだ顔に、櫛けずらぬ髪を乱し、白い眼をつり上げて、獣のごとく爪を伸ばした魔王の姿で、亡霊は声高く笑いつつ「人の幸せは災いに転じ、世の平和は戦乱に変えてやる」とすさまじい怨みを述べる。

実際、上皇の死後の京都には、病いがはやり火事がつづき、政情不安定で貴人の死が相ついだ。正しく怨念のしわざだと、人々は恐れおののいたという。かつては、阿波内侍との逢瀬の場であっに藤寺にも夜な夜な怪しい光り物が現れた。内侍は上皇の御霊のしるしと考えてその場所に光堂という庵を建て、尼となってその庵にこもった。

光堂は後に光明院観勝寺という寺になったが、神仏分離の折り、嵯峨大覚寺と合併した。が、崇徳上皇の慰霊碑だけは、さわると祟りがあるといわれ、今もひっそりとその場にある。心なしか寂しげに見える石碑である。

白峰に近い讃岐の金刀比羅宮では、上皇崩御の翌年、ひそかに神霊として迎え、ここで上皇はこんぴらの神様となった。一八六八年、御霊が京都の白峰神社に還遷された後も、金刀比羅宮では祭神大物主神と併せ、相殿神として祀っている。東山の安井金比羅宮は、その二神を歓請し、源頼政も合祀して今日に至っている。

信心には、「怨霊となって祟るほどの神だからこそ霊威が強い」という考え方が大きい。おひとよしの神さまは祟りもしないかわりに、頼りがいもないらしい。

安井金比羅宮の神さまは、とりわけ女性に頼りにされ、とくに縁切りの願いごとに応えるため骨折っておられるようだ。

もっとも、絵馬の中には「向うが縁切りをお願いしても、ぜったいに切らないで下さい」と書いたのも混じってはいたけれども…。

住田三鈷川柳遺作集

B6判　135ページ

頒価　1000円（送料210円）

申込み先

〒689-24　鳥取県東伯町徳万597

新　家　完　司

花地抄壇

1人1句、1か月分、30句以内厳守。
毎月23日締切。　担当・玉置重人

富柳会（八月分）　池森子報

少年の大志の夢は小さくなる　生子
遺言を書いた時から楽になり　二三子
朝起きて夕べの夢は秘めておく　トシ子
夢多き息子の部屋は踏み場なし　トシエ
大夕立そんな情熱ほしくなる　維久子
夢を見る男におんな苦労する　透太
涼しさを撒いて夕立遠ざかる　智久
遺言を春夏秋冬書きかえる　美房
火と燃える夕焼け空に過去の恋　花子
夢からさめると味噌汁の匂いする　花梢
夕立ち来森羅万象よみがえる　(伊)勇
夕焼けに帰りそびれた赤トンボ　文次
その時は夕立ちだった別れ道　岳人
夢をみる眩しいほどの女下駄　森子
遺言に戦意なくした影がある　荘次

川柳大阪　中原比呂志報

決断はあなたまかせの十字路で　亮太
掛け声と鉢巻きありて寿司は活き　喜楽
背伸びして届かぬ知恵に迷う今日　柳弘
そうめんのうまさに丸い凡夫婦　洛酔
ヒマワリの不運はビルの谷に咲き　しげお
婦唱夫随　棚板一枚出来上がる　敏
そこんとこ会計　話の判る人　凡九郎
サービス券一枚もらって穴に落ち　司
数え歌十でしっかりしめくくる　美津留
弱者には贈収賄の話ない　希久志
納税があほらしなって来た癒着　金太
十人十色みな虹を追う道で　重人
弁解が多い男の固い椅子　本蔭棒
ベテランの会計赤いペンがない　笑風
食堂のロック流れる店を避け　正之
無い無いが口ぐせ主婦の貯め上手　のもと
都市砂漠緑がほしい鉢を買う　鉄心
ベランダに鉢植え並べ四季の色　鈍泉
ジャンケンで役員決めるPTA　雅単
幸せは十指に余る友が居る　与呂志
歩くこと忘れアクセル踏むばかり　比呂志

川柳クラブわたの花　片上英一報

我が恋はつらぬき通す鬼あざみ　シマ子
燃えろ恋　年など僕に縁がない　美津留
消えたとて七色の恋ゑびす橋　友甫
蟬しぐれ　短い恋に命がけ　道子
アルバムが語っているよな恋の詩　芙美子
盆踊り　故郷恋うての若い衆　トシエ
戦争が奪った恋は大きすぎ　みき子
アホ　バカと恋女房は愛される　能子
夢で会う初恋の人若きまま　ますみ
一文字の恋は尊く思うとし　幸枝
相手みなヴィーナスに見え青き恋　一雄
恋の路ここは和泉の信太山　英一
雄猫も雌に死なれて燥鬱症　初子
雄叫びはエレキギターにかき消され　その
タップ踏んでみどりの森の若い頃　弘直
お土産の小さな木沓船来よ　市子
土産などいいのに言うてうれしそう　龍襄
初孫の名は家成と推挙する　隆
バテた夏　処暑で愛着沸いて来る　信
古寺の甍に派手なさるすべり　暁子
紫外線まだ足りぬのか甲羅ぼし　泰成
かぶと虫　父権が戻る夏休み　君江
今年鳴くせみもいただろ造成地　春子
涼を呼ぶ風鈴までがのびた夏　朝子
夏ばてへドリンク今日は変えてみる　一風
サンオイル夏の女は大胆で　章
建売屋　大人を騙す旗を立て　鬼遊

川柳化粧櫓　植村客遊子報

想い出の小川が消えている田舎　岳詩
里帰り母地下足袋で駅にくる　大鷹
定年になると冷たい風あたり　サワ子
子や孫の笑顔が囲む旅帰り　輝月
セーラ服女を固く守ってる　葉香
負け戦だけは語らぬ忠魂碑　礎石
鉄腕で競う球児の金字塔　三青
思い切り海へ怒鳴った終戦日　悲子
水着ショー海辺でおじん楽しそう　拍秋
恥じらいも女も捨てる母強し　秋信
旅帰り草背伸びして出迎える　千代香
飲み干したグラスの底に謎がある　朱玉
大きなの鳴って吃驚　梅雨上る　茂章

此の出逢い一生忘れず大切に　美代
夏休み孫の予定が芯になる　嘉
夏の床寝付かれぬのに早目覚め　姫女
夕涼み浴衣へ似合う薄化粧　はる子
老いる程こぼれて広がる義理の種　好花
大自然異常に暑く気にかかる　永楽
唇が恋しい夜のチョコレート　客遊子

岸和田川柳会　植山　武助報

写真では美男だけれどもてまへん　希久志
盆帰省往きも帰りも土産提げ　通彦
人類の土産が核とならぬよう　ダン吉
何よりの土産元気な顔を見せ　柳宏子
中元がまとまって来るたまの留守　浪速子
母の留守兄妹仲よく米を研ぎ　ひで
押売りに留守番ですとうまく逃げ　一弥
鬼の留守よいことにして飛び歩く　小紋
老夫婦いつか一人になる準備　冨志子
準備した膳へ予期せぬ客がふえ　こう
ご近所へハワイ旅行をふれ回り　月子
アルバムの抜けたところが気にかかる　文
軍刀と髭の写真は見たくない　勝晴
見合い写真女神のように見えた妻　甘平
バスガイド写真の隅のよい笑顔　白光子
遺言に光る言葉を準備中　恵空
地をはってタンポポ春へ準備する　さよ子
定年に離婚を準備する女　武助
優勝の準備せわしい舞台裏　狸村
整えたレールにそっぽ向く子供　すみえ
旨いもの食べていただくいそがしさ　天笑
仁王解体順番のエフ準備して　萬的

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

忍耐の二字で回した夫婦独楽　伊久栄
老いの日々お国任せの医者通い　ふさえ
すみませんその一言ですむ言葉　江山
公民館七十の欲いどむ趣味　美恵子
小鮒釣ったあの頃の川なつかしみ　保恒
思い返す心飽食からこぼれ　山人
あの頃の米の話が噛み合わず　恒心
おこぼれを戴く蟻のきらわれる　吟平
スクラムを組む蟻達に負けそうだ　志重
炎天下　蟻は無心に荷を運ぶ　甫正
蟻の巣の上とは知らぬ腰をすえ　邦人
この人も言葉の端に鬼を飼い　賛平
伴奏が音痴の喉と折り合わず　半仙
あの頃の青春籠の鳥時代　秀香

川柳東大阪　森下　愛論報

殻脱いだ蟬は命の限り鳴く　文秋
制服を脱いで自分の顔になる　美子
照明のムードを変えて脱ぎ始め　真柳
働いて来た靴下を丸く脱ぐ　孤舟
砂時計籍の話にまだふれぬ　雀踊子
やさしくて熱い砂漠を行くラクダ　湖風
砂の砦にとかげは青き尾を捨てる　作二郎
廃校の砂場に草が生えました　愛論
睡気吹きとばした空調異常ベル　柳宏子
目覚し時計鳴らなくなった夏休み　勝美
目覚しのベルは布団で鳴りつづけ　しんじ
ボーナスで隣ベンツを買うと言う　度
歓心を買う筒抜けの下心　二南

買い過ぎてしまうカードにある打算　晋吾
買う事が好きな女に嵌める枷　章久
簡単に買えるカードに落とし穴　庸佑
地球丸ごと買うかも知れぬ日本人　慶三
大陸の傷が消せない黄砂降る　隆
熱球と砂の青春夏ドラマ　頂留子

おっぱこ川柳会　松村迷観子報

心配をかけぬつもりの嘘一つ　迷香
ライバルに見せてはならぬ過去の傷　ひかり
水の中暑さと歳を忘れさせ　よしみ
ひまわりの一つの種が生むドラマ　チカエ
補欠でもいつかコートに出る望み　吟笑
旧婚で視野を広げた空の旅　マサエ

佳句地十選（前月号から）

西口　いわゑ　選

かかる時なんと息子の頼もしい　房子
負けそうになるとか弱い女です　頂留子
冗談の出やすい風が吹いている　天笑
ふところの深い話を酒に聞く　欣之
迷路から出られぬ日には文をかく　千春
煩悩の深さ知ってる塔の影　典子
一度だけなら許すつもりの花泥棒　年代
ひまわりも夏もゴッホの絵を沸かす　元紀
風船の軽さ重宝されている　緑良
花の朱へ一度は期待してみたい　雄々

ボーナスがユーレイのごと消えてゆく　明人
目薬の一滴　今日が動き出す　かおり
年金のゆかた踊の輪に入る　スミエ
外国の旅は肩の荷おりてから　白柳子
広告で探せど求人五十まで　放任
金持ちの国でリゾート大繁昌　迷貫
一輪の花も生き延ぶ力見せ　伽名子
夏の海暮れると静かな広い浜　いさむ
不安定雲の合間にある日射し　迷観子

岩美川柳会　羽津川公乃報

楽な方へとわたしはいつも流される　幸代
俳徊の胸に哀しい迷子札　公乃
占いを信じ始めてから迷う　芳江
強欲で三途の川でまだ迷う　單車
嫁ってから親の小言が効いてくる　照女
ドクダミが効いたか浮気せずに居る　大漁
角砂糖ゆっくり溶ける母の部屋　美代子
年金のくらしに溶けてゆとり持つ　長治
皇室も庶民に溶ける時代来る　さなえ
愛情が溶けた母乳に吾子むせぶ　嘉津江
合掌の中に邪心が溶けてゆく　忠良
持ち味の色溶かし合い丸く住む　美恵子

いずも川柳会　吉岡きみえ報

仮の世の幕はきれいに引いてやる　昭二
幕切れに愛という字を書いてみる　蘭水
どこで幕引こうと悔いは残さない　文子
終幕の白いピエロが動かない　寿美
銀幕の向うへいくつ消えた星　良子
ひと幕の喜劇にも似た人生譜　幸一

先達の遺蹟へ幕はおろされぬ　肇
トランプへ占う夜の風さわぐ　芳正
占いが当った今朝の美味いお茶　篤子
占ってからは迷わぬ嫁仕度　きよし
占い師信じ心の紐をとく　房子
子の未来占う母のほつれ髪　しま子
辻占の一言気に病み眠られず　勝水
占い師もとをただせばただの人　リチエ
占いに凝って暦を持ち歩く　叮紅
守護霊がいますと言われ振り返る　流石
占いに凝って名を替え職を替え　青湖
階段の途中で停年に出合い　美磯
階段でつまずくこともある若さ　ちかし
階段で聞いてしまった内緒ごと　満江
石段を登れば優しい仏さま　ひろし
階段の足音燗が届くらし　義良
階段を登りつめれば椅子がある　久栄
タラップを降りる虚像の影法師　雀踊子
メモ通り階段がある有夫恋　早苗
その先を言うてはならぬ浴衣がけ　芙佐子
父さんが着せた浴衣の左前　義弘
思い出の中で浴衣が会話する　元之介
兄ちゃんの浴衣が着れる子沢山　房緒
夜遊びに出る階段の軋む音　代仕男

南大阪川柳会　中川滋雀報

仲人に買いかぶられている美点　度
誰にでも一つ位はある美点　勝美
美点なら探して明日の糧にしよ　善信
ライバルの美点を思う日のゆとり　潔
欠点も美点に見えて惚れている　トミ子

初めから美点に惚れた仲でんが　久子
水増しの水それなりの情けもつ　楓楽
水増しを知らぬコップが酔っている　章
水増しの謎解きほぐす鬼の角　憲太郎
水増しをした水褒が漏れている　智子
甘い余徳水増し分で稼ぎ出す　悟郎
目の鱗取って水増し見つけねば　章久
水増しをした幽霊の頭かず　新造
羅漢群像今を皮肉る顔並ぶ　萬的
天と地の恵みで今を生かされる　寿美
余生だから今を大事に生きている　凡子
今日一日しっかりと生きる老いの杖　公一
人間に戻る今でも遅くない　雀踊子
今だから私も言える日記帳　シマ子
のれん守る味は理詰めで作れない　文秋
逃げ道をちょっとのぞかせとく理詰め　柳宏子
鉛筆をゆっくり削っている理詰め　白兎
理詰めではいかぬ世間を甘く見る　真柳
その場だけ理詰めで勝った酒の味　千梢
痛いのは承知で探る茨道　滋雀
カラオケに凝る風邪気味の喉チンコ　柳伸
痛いとこ突かれ答弁あわてない　庸佑
痛い目にあってもこりぬでくの坊　頂留子
心と心ふれあう痛さ抱いている　凡九郎
痛い事言うなと酒の席で言い　覚然坊

三幸川柳教室　桜井千秀報

ぶら下がる風鈴のびて無表情　芙美子
古ぼけた風鈴風もそっぽ向き　信一
風鈴が非番の眠りさまたげる　好笑
風鈴もせめて週休ほしくなり　道子

風鈴に風の子供がたわむれる　和子
風鈴とわたし待ってる風便り　広美
風鈴が思いおもいに鳴る夜店　(上)幸子
バテる日は風鈴さえも病んでいる　玉枝
気分いい日は風鈴の高笑い　当代
瞑想の風鈴そっとしておこう　千秀
花博のかげでソロバンはじく人　可笑
花博より土用うなぎの店へ行く　正雄
花博の花の心で溶けたうつ　鉄治
花博の疲れもさげて市場籠　千枝子
花博の花よもうすぐ原爆忌　靖子
花博へようこそ花の選手団　みね
唇をすこし淫らにラフレシア　茜
花博へ行ってきたかと蝶仲間　重次
花博もいいが家業のバラ作り　育子
豊かさを阻んだ針のない時計　桂香
針箱の底に女の夢がある　由梨
行き詰まり指針を神に問うてみる　三千子
揺れ動く心に欲しい羅針盤　孝子
絆縫う針あたたかい血が通う　精子
雑魚は雑魚なりに針路を崩さない　保州
千人針夢で還ってくれました　(松)幸子
殺したいひと視野におく含み針　朱夏
職を退く今日から針のない時計　高夫

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

青い空うつして孫とボート漕ぐ　幸江
いい齢になっても悪が抜け切れず　信江
影のような母の才能父を抜く　美代子
父の死後母は涙を物陰に　保子
病床の父が涙をくれました　正道
里帰り母は辛抱せよと泣く　静生
少々は手抜きも必要五十坂　明美
北の宿でも北枕避けようか　きみゑ
わが宿はマッチ箱でも幸は大　覚
道祖神今宵あなたの宿に居る　天涯
珈琲に涙が落ちてさようなら　盛桜
杭を打ちかえた流れに乗ってくる　野草
真っすぐにきれいな道を歩こうね　八重子
野良犬が変わる景色を見て暮す　芙美
遠景の中で手をふる父と母　みさ子
薔薇の露　涙にかえておめでとう　正恵
涙拭いて完結編に花咲かそう　智恵子
怒ってもほんとは涙もろい父　三千代
情を注ぐ涙の池に生かされる　隆風
幸せと我慢くらべの涙壺　美っ千
君はいま涙のなかで母になる　小鹿
エンジンを止めて悠々川下る　喜与志
自由化をよそにお米はよく稔り　洋史
父の技越せないままに齢を越す　富恵
男の野心そっと見抜いて遠まわり　幸技
味噌作る技を烏が笑っている　きみ子
哀しさを流す技だけあればいい　夕峰
古々米が土蔵の奥で泣いている　はるお
ほとばしる炎五尺をつき抜ける　しげる
意識から湖　青を取り戻す　和子
青空がとっても好きなしゃぼん玉　かつ乃
青空が見たくて栗の実がはじく　くに子
将来の青写真もうできている　早苗
青の余韻生きつづけてる喜寿の夏　汲香
夢を抱くとき大空は青く澄む　幸代
群青の海をぎっちら舟でゆく　公弘
進め進めと信号青になる　螢
空　海の青に染まりにゆくいのち　(新)正子
沖へ出る青から蒼となる情け　諷人

川柳たけはら　森井　菁居報

さかなはおよげるからいいな　幼裕介
あつい夏きょうちくとうはつよいなあ　小三歩美
ラジオ体そう毎日はやおきしています　小三千枝
夏の夜一番花火が似合ってる　小五史子
助手席の父がけむたい仮免許　菁居
蛙の目悟っているのだと思う　蘭幸
酢蓮根今夜の酒はうまい筈　ヤスエ
鈍行であとから追うてゆく私　麻代
満期来て小さい保険笑われぬ　勲
筆順はどうあれさすが看板屋　静佳
母娘独楽ぶつかり合って回ってる　愛子
開運のお守り神は留守らしい　栄恵
有難しお経を口に無我の天　浪子
信号を守って帰る押し車　喜美子
氷あずき孫と二人の内緒ごと　一枝
意見チグハグそれでいいのだ孫といる　清水
一日をハイビスカスに負けぬよう　淑子
ベッドまだ髭が気になるからよろしい　房子
振り切れぬ想いのままの岐路に立ち　博子
呑む真似でよい盃にある掟　静風
ジャズへ寄るボクの愉快な仲間たち　新造
人間を人間らしくさす夕陽　一路
平和だろ鳩公害と言うなかれ　笑子
手鏡へ良いばあちゃんでありたいわ　喜久恵
一年で筑後の夏に慣れている　伸子
空しさは写経ぐらいで鎮まらぬ　照子

初盆へひょっこり義母が出て来そう　節夫
つまずいたことのあるのが先をゆく　卓三
なまんだぶキャベツにたかる虫がいる　政己
おかぐらのひょっとこ私かも知れぬ　こうじ

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

最後の見栄だ　りっぱな墓石だ　とみお
丑の日のために鰻に美食させ　玲子
フセインが月の砂漠を歌い出し　次男
朝ぼらけ鼻歌が行く青田道　寿朗
河川改修と言う名に鰻の住めぬ川　とめ子
夕焼けにむかって歌う赤とんぼ　螢
夫には鰻食べさせ稼がせる　雄々
失うとわかっているのにどびん口　美智子
ひと昔前から村に嫁が来ぬ　独歩
籠の鳥飛び立つチャンス失った　久子
頭の毛失ったってアデランス　さつき
土用のうしに死んだ鰻の呻き聞く　ゆり子
失った昨日をとても悔いている　康子
ああ夫婦　斟酌きしり気にならず　和枝
うなぎ食う昔はもっと旨かった　よしえ
歌心あるから楽しいバスツアー　喜美子
歯の痛み忘れるために飲むお酒　御前
戦争で失ったもの還らない　碧水
君が代をうたうとおこる人がいる　やえ
歯が痛いこれは貧乏よりつらい　ひろし
歯の痛み足の指までジンと来る　秋人
歌はもう止めてお話しませんか　京子
肩書きを失くしてからの父が好き　秋女
歌わぬと誓った歌が胸にある　康志
いのち以外もはや失うものがない　菩句

山陰合同吟行出題「技」　森山盛桜報

嘱託という名で技を惜しまれる　美っ千
父の技越せないままに齢を越す　富恵
嫁ぐ娘のタンスへ母の技を入れ　正恵
技を磨くつらくて遠い道がある　幸代
世渡りの技はもたない夫です　みさ子
眼に見えぬ紐が夫をリードする　幸枝
メロンなら成らす技術を持ってます　野草
技のないくせに初めに仕掛けて来　洋史
手抜きして暮らす技などいりません　正道
目立たない友が奇妙な技をもつ　みさ子
銀行に儲ける技を聞きにゆく　小鹿
寝返りの技がだんだんうまくなり　螢
逆立ちをしてもとどかぬ父の技　智恵子
標的を前に技量となる立ち居　諷人
畳の上に男をかえる技がある　はるお
笑うのも笑わせるのも技であり　汲香
技におぼれたイルカに帰る海はない　天涯
綱渡りする技ばかり磨いている　公弘
哀しさを流す技だけあればいい　夕峰
借りものの技を試してみたくなる　正子
眼ざしの技が一枚上でありテクニック花にも壺があるらしい　しげる
神技か私をかばう風が吹く　隆風
必殺の技を抱いてる深海魚　八重子
　　盛桜

川柳岩出　小倉　アサ報

遠慮した座席　一駅空いたまま　瑞穂
紫の気品　私を寄せつけぬ　精子
色と香と秘めて親しむ紫蘇の皺　綾子
遠慮すないうて箒を立てている　忠雄
青天のへきれき違う顔で生き　昌子
戦勝へ賭けた青春砂の城　春子
友の椅子遠慮よそうて奪い取り　愛子
青春の過激叩いた赤信号　アサ
遠慮せず俺とお前の仲の友　喜市
青虫の円やかな線ひと目惚れ　義美
海と空一線を引く青色に　千代子
紫のけだかさ持った絹ふくさ　英子
新妻も今日から母と強くなり　正直
遠慮せず腹八分目で止めておく　永年
紫苑咲く頃にはかない恋終る　和子
寝たきりの窓の青さの無表情　与呂志

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

秋時雨枯葉も降るが如く散り　喜久亭
紀子さまの慣れませんから流行りそう　ふさ子
子と嫁の好意で今日も医者通い　ちよ
打ち水に揚羽ゆらりと媚をみせ　紀一
親の金当てにするなと子を訓し　治幸
自販機もある民営の汽車走る　義美
内職の必需品だと買わされる　高明
花菖蒲にまろべば青い青い空　ハル
親しさを賭けて放った平手打ち　四郎
合掌の背には微塵の嘘もない　虹汀
振り向けば又振り返る夏浴衣　旭恒
天敵の如き輩と共に生き　弘
彦星の逢う瀬ぞ見たき天の川　朴竜
夏バテで味覚の秋も通りすぎ　剛司
少女Aに教師は敵であり味方　正敏

川柳ささやま　遠山　可住報

還る日を信じて席はそのまんま　純　子
まっすぐに生きて世間が気にならぬ　(安)美智子
それごらん世間の口が待っている　恵　美
自慢さえ言わなきゃほんとに好いお方　貞　子
塩つぼは確かな嫁の手に渡す　靖　子
この海へ消えた子もいて盆供養　ヒサ子
一級の資格を抱いてねむくなる　和　子
真実を一つ投げ込む広い海　つや子
ときどきは決め手の塩を効かす母　百合子
塩味もちょっと効かせた賞め言葉　テ　ル
みんなみんな海へ行ったと夏休み　(家)美智子
犬猿に資格やったのが政治　越　山
自慢せぬ母のきれいな筆のあと　文　平
離婚してもいける資格はとってある　可　住

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

使いすて文化のつけがやがて来る　正　子
白日のもとに晒した古い傷　松　子
空白の刻が黄金に思われる　寿々子
白旗はもう上げないはずなのに　玲　子
突然に白い巨塔がのしかかる　千　春
白紙に返して今日は友になる　八重子
その時のためにも白は白く洗う　千　代
白菊を捧げて悔みの列の中　登　栄
白紙出す心の疵を癒やさねば　亜　弥
白木蓮はひと声欲しい顔で咲く　瑞　枝
手の届くところにあった白い花　ふ　み
白絹を見ていて鳥になって翔ぶ　てい子
生傷をうちふところに持つ白紙　日枝子
白い壁しみの痛みは語らない　恵　子
めぐる忌に白い絵具は売り切れる　荒　介
女の日に白いスーツを着る器量　より子
ぎりぎりの布でブラウスできました　保　子
ぎりぎりに女の声が斬りつける　朗　子
終列車発車まぎわにのるつもり　晶　子
眼のうろこぎりぎりの時ながれおち　ゆ　き
ぎりぎりで命救った棹の先　花　子
ぎりぎりまで堪えて大きな花咲かす　田　鶴
ぎりぎりのところでおんな妥協する　や　え

城北川柳会　神夏磯典子報

新しいうちみがきたて自家用車　きみ子
花博を手押し車で一周し　午　郎
生甲斐を求めて今日も学の道　輝　子
主婦の座にいつまで暑いフライパン　春　雄
送り火へいつか私も送られる　典　子
宿下駄を引きずって聞く夕河鹿　八重子
目の玉もかわくかと思うこの暑さ　ふ　み
トロ火という加減に嫁も馴れてきた　眉　水
夏バテもいとしい花に和まされ　寿美礼
茄子藍の色よきことも小さい幸　春　蘭
かがり火へ鵜匠がさばく動と静　史　風
肩ひじを張った衣を脱いで会う　昭　子
すいすいと抜いて電動車椅子　新一郎
人生の余白の日々を持て余し　秀　夫
ひと言をすべらしてから気にかかる　登美子
占いの女難をひそかに待つ男　静　子
精霊を送って脱いだ夏帽子　達　子
乗りかけた舟だひと肌脱いで漕ぐ　満津子
暑さからのがれて朧な月と逢い　きくゑ
三歳児既にゆずらぬ自己主張　文　子
スピードをあげて凶器がやってくる　純　子
根は他人割り切って暮らすカタツムリ　佐津乃
暑い暑いとカツラの下で汗が浮く　テルミ
サーブ権妻が握って譲らない　白　峰
火あぶりにしよう私の中の夜叉　倫　子
凡人の暮らしカードに包囲され　静　歩
火加減でこんなにうまい飯の味　温　子
口笛を乗せるとペダル軽くなる　ただし
脱ぎすてた鎧がひとり歩きする　公　一
猛暑にも何とか勝って虫を聞く　右　近

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

一夫一婦で秋の空気を吸っている　美　幸
秋が来るゆるんだネジを締めにくる　度
日照り続いて痩せた蛇口と秋に入る　まさお
ああ平和　秋の包丁研ぎなおす　重　人
思いっきりお喋りしたい秋桜　隆
人生の秋にも萩が咲いている　正　好
秋遍路生ける大黒天探す　一　志
秋は確かに街の時計の振り子にも　泰
欲望の輪廻が秋の空にある　冬　葉
欲捨てたとこから背中丸くなる　勝　美
欲の皮タヌキの皮で出来ている　春　堂
欲得を捨てると視野が広くなり　三　男
無欲枯淡　五百羅漢は風の中　章
美容整形してから欲が太りだし　夕　花
直角にぶつかり合った過去を持ち　弘　直
直角に言えば傷つく姫鏡　憲太郎
直角に曲がる男で妥協せず　シマ子
直角の思考できっと呆けるだろ　欣　之

折り紙の角をあわせて命乞う　朝子
権力に溺れて涼しい顔の嘘　年人
安らぎの涼しさ古い扇風機　しづ子
水打って女将涼しく客を待つ　晋吾
藍染ののれんが涼と客を呼び　一風
涼風にコスモス街道今盛り　宏子
涼しさを五百羅漢の暗がりに　柳宏子
涼しさや駅に父待つ乳母車　春子
食べられぬ鯨が海で潮を吹く　美津留
海育ち赤銅色に芯も鉄　しんじ
何も彼も許してくれる広い海　頂留子
海上もスピード好み出る犠牲　喜風
海見える部屋でロマンが膨れだす　柳伸
海鳴りに故国を偲ぶ流刑の地　雅士
おおらかでいつでも温い母の海　甘平

京都塔の会　松川杜的報

父の背でぐったり眠るUターン　英子
子沢山死にものぐるいのUターン　栄
Uターンした身にしみる向かい風　福子
少年の夢をわかせたUボート　武庫坊
脱サラへUターンするほお歯下駄　百合子
ふるさとで充電をするUターン　求芽
情熱に燃えた遠い日の不倫　花代子
まだ燃えるものあり八十路を意識せず　〆女
日日好日燃えた日もある日記帳　芳子
燃え尽きた姿で明治のデスマスク　杜的
退屈をさせぬ話題がみつからず　白渓子
退屈をしに窓際へ出社する　紫香
退屈で竜宮城を去る太郎　正坊
退屈の虫が浮気をそそのかす　諷云児
味噌汁の実に手作りの秋茄子　圭坊
角出せば鏡悲しい顔をする　達子
検温血圧朝の寝ざめへ生きている　水客
退屈な人と恋愛ごっこでも　年代
退屈はさせぬ仕組みのパビリオン　飛鳥
退屈をしたいと思うた頃が花　倫子
退屈で河馬顔まけの大欠伸　三求
本当に燃えては困る産油国　巨詩
燃える血がまだ少しある生命線　ただし
京都弁上手に汁の蓋をとり　しげお
ドリンク剤より中年のとろろ汁　礫

川柳塔まつえ　恒松町紅報

寡婦故の自由切符が使えない　満江
相続税自由に評価してくれる　長三
鼻唄で妻を自由にさせてます　芳江
不自由な自由に慣れて檻の猿　代仕男
お隣の自由に困る松の枝　房子
日本の自由イラクに通じない　清志
屋根の上までついて来る影法師　鶴丸
少年の心に戻る屋根の上　ちかし
雨の音終止符を打つトタン屋根　多賀子
流れ星降って大屋根眠れない　小鹿
色屋根が増えて田舎の風変る　たつみ
雨足がトタンの屋根でさわいでる　邦代
おさまりが気になりながらする読書　友子
名作に涙流している読書　静恵
読み残ししばしあずける農繁期　幾子
蠅たたき片手に読んでる八雲集　清子
文庫本重ねたままで秋になる　寿美子
いつか読む芙美子の本が本棚に　早苗
高原に来て夕焼けと赤とんぼ　みえ
農を継ぐ二人を夕焼け離さない　良子
待ち人の来ない夕焼け赤すぎる　与根一
夕焼けに続く明日の絵が描けぬ　太泡
夕焼けがすとんと落ちた竿の先　章峰
夕焼けに明日の農を思案する　登志子
聞こえない振りも時々して暮らす　雄々
時々は神のつぶてに裁かれる　文子
二階から時々他所をのぞくせ　きみえ
時々は電話で消息確かめる　静江
時々は日の丸の旗出して干す　桂子
時々は復員船の夢を見る　叮紅

西宮北口川柳会　林はつ絵報

声の無い会話に手話の楽しそう　圭坊
フセインのプライド捨てる声を待つ　宣子
補聴器を外して弥陀の声を聞く　武庫坊
声のない声を神様からもらう　静子
回廊の闇で仏の声を聞く　〆女
わだつみの声嫌い抜く地球儀よ　国公
生垣の向うの声と夕焼ける　年代
方向音痴に大阪辻が多すぎる　柳影
四辻の地蔵に何時も花がある　杜的
辻々に案内人がいる葬儀　白渓子
開発へ辻の地蔵の行きどころ　光代
朝どりの無花果辻で売る農婦　きよ子
しみじみと秋を嘆いて散る落葉　夜船
しみじみと話したいのが敵にいる　正坊
花のいのちしみじみ思う花鋏　(松)芳子
単身赴任しみじみ判る妻の味　春蘭
月の暈しみじみ人を恋うている　英子

しみじみと過去ふりかえる曲り角　園歩
しみじみと病窓で外眺めてる　遊美
しみじみと今年の暑さ身にこたえ　江美
コオロギとしみじみ酒を呑んでいる　いわゑ
しみじみと語れば悪い人はない　みつ子
風九月　戻らぬ白い陽を語る　元紀
背いてもいずれは戻る竹とんぼ　颯云児
縒り戻す気にはなれない自尊心　二南
星の砂拾うて離れ島から戻る　萬的
戻る気はさらさらないが掃いておく　香子
妻に戻って二合の米を炊きあげる　たず子
角帯を締め呉服屋の顔になる　獏沓
スーパーへ避暑に行きます孫つれて　保蔵
ふた七日　満月すこし明る過ぎ　富喜子
町に一軒亡父を飾った写真館　(河)芳子
鍵束を妻が放さぬので困る　佳秋
ペン持てばどこかで秋の音がする　美智子
待ちぼうけ花を見ている眼ではない　てる
まだ咲いてくれる朝顔抜きかねる　よし津
狂わない時計がとてもいとおしい　はつ絵
総入歯洗ってジョギングしに出かけ　紫香

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

窓あけて自由な長屋熱帯夜　栄
男の鍵に合うた楽器を持っている　正一
反抗期鍵を無闇に掛けたがる　歌子
金魚掬いの母子に鍵の鈴が鳴る　作二郎
神経科の仕切り廊下に鍵がある　定人
追憶の思慕に生命の灯を貰う　敬
栄光の過去思い出す遠花火　文夫
自問自答闇の中にて回想す　梨枝
回想へ女は数珠を買いました　萬的
僕の詩をぽつんと書いて以下余白　静夢
お下げ髪の思い出ゆれる秋桜　武庫坊
回想のひとこま火種秘めたまま　英子
夏休み孫に教わるテレビゲーム　正子
学ばねば取り残されるかたつむり　年代
書を学ぶひたすら良寛の書に学ぶ　杜的
乳呑子の成長母として学ぶ　紫香
音楽会ネクタイの柄よっている　保蔵
宇野千代にあやかろ天寿終るまで　〆女
マイペース亀にもきっと陽は昇る　伊三郎
使えないハンカチにする森英恵　園歩

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

裏切った男を許している月日　歌子
手の内を見抜きまんまと裏をかく　いわお
墓地裏の花のたえない水子塚　敏之
裏道を通って帰る若夫婦　義嗣
裏道を歩き故郷が遠くなり　石舟
なるほどとビールと一緒に聞いている　保蔵
水襲を少し満たしてくれた慈雨　すみ
迷ってる背中を風に押されてる　美智子
ジョギングでもするかと膝に聞いてみる　修水
もう一度たしかめたくて念を押す　十四郎
困難は承知で船出した二人　澄子
額縁に入れてはならぬ此の命　六浦
里帰り母がどこへもついてくる　昌子
飲めぬから隣の女に酌いでやる　紫香
お下りの服が弟に長すぎる　弘治
長生きの叔母に秘訣を聞かされる　向西
長い夢無事に来ました金婚式　夢之助
二人なら長い橋でも渡りきる　武庫坊

川柳塔とっとり　岩原　喬水報

節約をしただけ欲しい物を買う　多可志
欲しい物買ってやらない愛もある　由多香
ライバルの強気私にも欲しい　帆雀
明日からは止める煙草に火をつける　輪多朗
神様よ癌の進行止めてくれ　友夫
ゴマスリを止めて大樹の外に立つ　俊路
児の荒れを親　真心で堰き止める　砂山花
厚化粧やめて素顔を輝かす　艶子
面会を止められ花を置いて来る　呼風
お喋りが生きがい女燃えている　旋風
母の座に居ても女が顔を見せ　粗粒
湯上がりの妻を女と認めます　秀和
売り上手女の見栄を読んでいる　侑里
いい女身近にいても気がつかぬ　圭一郎
あきらめて誇りだけでも高く持つ　一枝
勲章に明治の誇り色が褪せ　喬水
勲六が私の誇る宝です　新風
誇りある男一匹筋通す　山人
百姓の誇り笑って稲が伸び　洋々

聴障川柳　稲田　豊作報

夕立が水車のテンポ早くする　豊作
早く来いゆっくり帰れの親心　みつる
早いより遅いが目出たい命です　珍妙人
聞き上手で呑み込み早い会長さん　三香
早口に顔見るばかり難聴者　一晄
洗濯もの早く入れろと雨蛙　鏡香
病む母が早くお迎え口にする　たみ

早いもの戦争あれから四十余年　健太郎
盆踊り馴れない扇が早く舞い　八恵子
コオロギの知らすや早い秋の風　静子
早い返事来て真心に感謝する　真女
手早くて手荒なことは承知ずみ　柳香
仕上りの早いが取得とミシン踏み　才女

川柳塔わかやま　牛尾　緑良報

大合唱はたち輝くものばかり　栄美子
心はひとつはたちの翼信じきる　寿子
噴き上がるはたちの主張風を斬る　はつ絵
いたわりの目に不甲斐なく馴れて来る　可住
いたわりの言葉はひとつあればよい　一二三
いたわりの言葉長寿の良い薬　富代
手鏡に選び疲れた男運　白光子
サイコロが選んだ責めを持ちつづけ　康勝
飢餓のニュース聴きつつ美味い米を選る　寿美
利き腕の中でときどき亡父に逢う　荒介
腕枕月日は流れ止まらず　俊平
腕の差を知ってる石がしゃべり出す　熊生
ふるさとに三尺帯が置いてある　克子
引きずった帯は女の重たさか　森子
しがらみも帯も仏のはからいか　千代
広目天の筆にあしたを書かされる　恵美子
友の書く便りは花が咲いている　千春
のの字書く見合いの頃は花だった　惜春
足跡は海に流そう貝になれ　狂虎
足跡を消せばぐっすり眠れそう　文子
余生の足跡写経の文字を丹念に　すゞ女
子の希望聞けば新幹線の運転士　杜的
叱って叱って希望を捨てさせず　天笑

実社会希望だんだん小さくなる　武助
あそびでも選ぶことにはしんけんだ　小三弘一
足跡に小さな花がふたつみつ　宣子
楷書から草書へ女熟れてゆく　好笑
夢の木を一本植えてきたはたち　輝子
明日の覇者挑むはたちの始発駅　アサ
言い逃れできぬはたちの海に出る　裕美

川柳泉尾　吉川　寿美報

螢火のはかなく盆の闇に消え　あさこ
セキセイに聞いてもらった愚痴ひとつ　伴子
高熱にあえぐ私もおおさかも　淑子
露草の露の干ぬ間の今朝の夢　トミ子
背に爪を立てたいほどの熱は冷め　靖子
ごくろう様夫の汗に抜くビール　はつ子
舞台終え汗と涙が入りまじる　途子
いい汗を流して終る甲子園　美南子
汗だくの山路かすかな滝の音　一枝
ひと言が過ぎて冷汗かきっぱなし　良子
かるがもの交通違反に拍手出る　マリ子
違反する車は平気でまた違反　義一
違反して帰ってこないブーメラン　美子
ルール違反　太郎と花子愛し合う　弘子
旅に出てちょっぴり違反したくなり　洋子
よそ見する男に違反切符切る　美津子
契約違反鬼の刺客となるみとめ　寿美
パトカーに追われて違反の恐さ知る　(中)文子
再起誓う君の瞳に宿るもの　可愛
村おこし一役かったカブトムシ　悦子
我がルーツ掘り起こしても並を出ず　(寺)文子
寝起きする我家の壁が性に合い　葉子

永遠に起きてはならぬ核兵器　シメ子
八起き目のいい顔してるお立ち台　敦子
もう一度起きる力を溜めている　美代子
起伏するこれから進む長き道　シマ子

川柳藤井寺　高田美代子報

実権を握る我が家の山の神　悦子
握らせば道理も曲げる悪の華　信子
拝まれて手を握られて票にされ　与呂志
舞台裏に本音を握る人がいる　寿美子
逆転のチャンスを握るバットです　三郎
勘定を気にして時価の握り寿司　志洋
明日がある握手ですもの弾みます　政代
嬉しくてお握りふんわりまあん丸　伴子
過労死の父もラッパを握ってた　たかし
吊り橋で頼る男の手を握り　繁男
薄い手で握り返している野心　治子
火種もつ女と握手してしまう　敦子
命綱離せば両手楽になる　美房
体温計今年は使う気象庁　淑子
価値観を知れば無口になるだろう　美代子
爪染めて男嫌いと言う女　ケイ子
末席で女の爪がうずきだし　キミ子
爪の垢気にせぬほどに老いている　吸江
逆転続き予想狂わす甲子園　みのる
荒れ狂う北の漁場の冬の月　義一
ついかけた情が仇で狂い出し　三夫
直感が狂いさまよう風の街　彩
狂いそうで心の窓を開けておく　おさむ
幸運をつかんで狂い出す人生　比呂志
女捨て切れず私を狂わせる　修六

残されて歯車一寸ずつ狂い　婦美枝
ゆっくり堕ちるあなたとわたしだけの闇　和子
完璧をのぞむと狂う夫婦独楽　透太
愛した日からリズムが少しずつ狂う　森子
憎む事出来ぬ女の淡い夢　きよし

翠洋会　中西兼治郎報

この暑さカッパの皿もすぐかわき　兼治郎
皿割って別れた人を思う秋　透太
自分で割って自分で買ってきたお皿　しげお
値上がりと踊らされてたNTT　絹子
回される皿回す人生かしてる　真
エデンより追われた旅はまだ続く　英一
ジョギングを延命地蔵に見送られ　千歩
泥鰌のないを掬って入れる安来節　宣司
フルコース皿だけ並べ待たされる　正雄
灰皿がいつの間ににかベランダへ　すすむ
毒を食い皿まで食って社を追われ　恭昌
笑ってる僕によく似た地蔵さん　東雲
ひんやりと皿が格もつ小京都　さと美
秋茄子を嫁と分けあうぬくい皿　楓楽
水子地蔵おニューになって願が解け　為子
あみ笠の中を覗いてみたくなる　良江
家宝の皿いつまで眠る箱の中　照子
白い皿もういちじくも終りけり　春子
訃を外に歌っておどる人気歌手　綾子
プライドはもう捨てました紙の皿　正坊
野仏へ葉っぱの皿の供えもの　光子
受け皿があるので女はしゃぎすぎ　みつ子
皿欠けていました言えぬ引出物　いつを
フランス料理食べる地蔵のよだれかけ　鬼遊

堺川柳会　河内月子報

馬鹿に効く薬探している私　小雪
出直した靴にすてきな友が増え　満州
一つ一つの高さ比べず露流る　楓
比較されせめて笑顔を投げかける　星子
マネキンも靴を脱ぎたい日もあろう　あか里
十円の値うち比べて祖母のぐち　かりん
置き薬屋へあやまっている元気　文
太平洋泣いて渡った赤い靴　彗梢
食べるだけが精一杯の靴のヘリ　千万子
肩の荷はまだまだ下りぬ父の靴　庸佑
屑籠に本音ちかちか光ってる　豊子
増長をするから相好崩さない　二南
脚線美靴が素敵に見えてくる　冨志子
置き薬昔は風船くれたけど　ひで
新調のシューズでワルツ軽く舞う　武助
郷ひろみ比べる方が間違いで　東雲
星屑の一つ幼く逝った子か　紀美女
お隣と比べてと寄付取りにくる　一二三
片べりの靴が男の意地を見せ　春蘭
星屑を私の胸で光らせる　美緒
結束を崩す男の二枚舌　頂留子
一コマの漫画で屑となる運命　森子
掃除洗濯それが私の安定剤　泰子
医者の嘘信じて薬飲みつづけ　素灯
くずカゴは溢れて街は病んでいる　月子

打吹川柳会　奥谷弘朗報

縁のない話であくび噛んでいる　孝恵
縁側で居眠る母を真似る猫　勝見
縁起など笑い飛ばして生きてやる　筋子
縁談が進んだらしい畳替え　幸子
縁に立つ祖母の昔が浮かびます　幸枝
金に縁ないとわかった外れくじ　善政
一升香典持って悔みに行ってくる　螢
縁遠い娘へ言葉えらぶ母　温子
考えりゃあれもこれも皆縁　杜的
年寄りの孤独を縁にして儲け　たつみ
出世した途端に縁者急に増え　邦俟
振り返る縁一会の水車　妻子
会者定離このひとときを大切に　寿美子
福相と言われ金には縁がない　佳女
これも縁です骨を拾わされ　早苗
蔭の女で一生終るこれも縁　紫映
合縁奇縁おかめひょっとこ半世紀　紫泉
選挙戦すめば縁者もみな忘れ　雄々
辛抱と努力に縁も味方する　弘朗

川柳ねやがわ　高田博泉報

証言に無口がうまく急所つく　波留吉
黙ってる情けもあって子は育つ　吉之助
直線で進めぬ恋の遠い道　菜月
真直ぐに神へ歩まぬ罪深さ　光子
ウルトラC努力と運の金メダル　一笑
糠味噌に亡母の特技が生きている　良三
バランスがほどよく弾む皿まわし　雅文
切なさに夕陽の波に娘の名呼ぶ　高栄
暗い波間にこころを誘うものがある　礫
轟の滝すすり泣く水不足　度
花博の人情に触れ車椅子　勝美
十二分説明聞いて「うん」とだけ　頂留子

直線で結ぶ彼方に老母がいる　三千子
波一つ越えてがっくり老けました　あやめ
送り火の精霊の名が多くなり　シマ子
比べても口に出してはいけません　冬葉
荒波に耐えて仏の丸い顔　権太
酒好きが孫に教える酒の害　時弘
大波を越えて小波に蹴躓き　一途
忙しい人と座禅の旅約す　英壬子
言訳のように一輪むくげ咲く　君子
波乱万丈　昭和を生きた父の背な　速水
さわやかな波音を聞く瀬戸の朝　紫香
岩を噛む波に絵心誘われる　庸佑
暑いのに戦争などはよしなさい　かすみ
グルメ旅食わず嫌いが一人居る　柳宏子
雷が好きやと女騒がない　章芳
青春が燃えると灰も残さない　一藍
甲子園うちの高二はまだ寝てる　薫風
竿頭もねぶたも三日後の味

サークル樺樣　大澤三四子報

それまでは無断で軒を貸していた　泰子
骨休めそろそろお茶にしませんか　美緒
どくだみ茶ブームになって刈り取られ　雅子
無断では休めぬ仲間持っている　今日子
台風に振りまわされた二三日　千代女
宇治の里出されたお茶は健康茶　三四子
茶を点てて苛立ち少しずつ消える　智恵子
台風の夜も書斎を降りて来ず　薫風

むらくも川柳句会　藤井明朗報

観音様のやさしい顔に似るあなた　秀子
風やさし九月の駅に佇つ私　寿美子
やさしさが私をとりこにしてしまい　鶏生
タイミングいい日信号青ばかり　文子
大笑いいい潮にして腰をあげ　義良
タイミング風も後押すホームラン　林蔵
ひと夏を病んでやさしい秋の空　一葉
やさしさに焦点合わす見合い席　幸夫
バス降りる雨が止んでるタイミング　竹乃
そよ風にタイミングよい花吹雪　久仁
なにかある夫がやさしい顔になり　仲子
年重ねやさしい杖にすがりつつ　千里
種まけばタイミングよく宵の雨　島子
字典みるぱっと見開くタイミング　はる代
カラオケの余興　祭は更けてゆく　三津江
豊年へかかし迷惑そうにたち　幸子
減反をよそに豊年　米が出来　峰雪
豊年はうれし今年も米が出来　梅園
道草とならない趣味をもてる幸　保子
油断して失敗するたび教えられ　さくら
一しゅんの油断思わぬ事故になる　八重子
道草がきらい定時に帰る夫　節江
道草の兎は亀に追い越され　ふさえ
道草で目的くるい回り道　寿
道草をしながらゆっくり老いの道　昭子
残暑まだきびしくにぎわうビアガーデン　ゆき子
残暑にも負けぬ日やけのランドセル　昌子
残暑などいっては居れぬ農繁期　翠晶
ライバルに先手打たれたタイミング　明朗

いさり火川柳会　尾崎三代治報

おいしいが肥り気になる秋ですね　智恵子
不機嫌をおいしい料理笑みに変え　八重子
旅に出て据え膳の味忘れない　豊子
おいしいと胃の内側で声がする　武士
酔いざめの水に銘水汲んである　由多香
新米の粒かがやいて秋うまし　三代治
手を拭いてこれが最高にぎりめし　孝人
嫁の味褒めておいしい膳囲む　伊都子

川柳高知　川竹松風報

女房に飼いならされた味でよし　竹萌
弁護してやりたい寡婦にある噂　春童
お年とは別に下着の色を選り　功
ああこれも齢か太字の辞書を買う　佳風
ユニホーム脱いだら誘いやすくなる　和広
伸び切ったゴムにも似たり昨日今日　菊野
異議無しと言わす男を飼ってある　高重
まだ余裕あるから涙こぼれ落ち　有佳
打ち水の庭が涼しく客を待つ　一求
終戦日　夾竹桃も風化され　千恵子
孫達の笑顔に愚痴が救われる　憲一
リゾートの目玉ゴルフに明け暮れる　健二
無駄骨を折った若さが生きてくる　朱坊
見てくれる子供は居ない酒の量　松風

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

竹垣が隣の小話聞いている　聖子
こんな時雑草だって考える　智重子
洗い髪　噂話を聞きながら　はるみ
竹馬に乗れば取れるかお星さま　歳栄
ふんぎりが悪くて顔をまた洗い　民子
真直ぐに生きてて竹は妥協する　鈴江

黙々と傷口洗うとき独り　かつ子
竹垣に朝顔もつれ夏が逝く　ヒデ子
伸びすぎて竹には竹の悩みあり　好栄
地球病む声なき声の山や川　芳枝
冷房が神経痛に効いてくる　悦良
夕立がよほど嬉しい雨蛙　博利
前ぶれの雷夕立つれてくる　世似
夕立が峠を越せず喘いでる　清泉
腰かけて海に素足を洗わせる　白汀

川柳後楽　従野　健一報

こだわって欲しいあなたはすぐ赦す　草風
悪を斬るドラマに老いの血がたぎる　たけ志
ひと匙の毒盛りつける愛もある　青銅
ブランコのゆれで幸せ抱いている　拓治
炎天が好きです日照り草の青　浄美
流れ星いざ反撃の肚を決め　佐加拒
生きている証し仕事に精が出る　桃風
少額へ防犯カメラのぞきこむ　美智子
熱帯夜ねむれぬ今宵安定剤　柳五郎
父に会いたく母に会いたく川渡る　健一
老いの杖　努力の艶を見せている　博友
人間経験豊かに生きて丸くなり　哲郎
太陽が痛むのか暑い日が続く　金吾
にこやかに見栄を入れ合う市場かご　正秀
残り火をまだまだ消せぬ手術台　玉水
罪ひとつゆるすゆとりのある心　夏彦
厳しさと優しさを持つ母の愛　秋月
両袖のイスでゆとりのない気持　吉則
感動の匂いも失せし日章旗　義親
一服のゆとりにヒント考える　照路

川柳はびきの　塩満　敏報

還暦はまだこれからという節目　美代子
日盛りの不義理向日葵知っている　重人
水虫も秋の気配はわかるらし　ダン吉
鰻屋の隣に住んで寿司が好き　かつみ
城を出てだんだんお辞儀深くなる　隆
青春の火種を残す甲子園　悦子
白いドレスで男一人を狩りに行く　比沙胡
惰性でもいいから夢を見ていたい　与呂志
薬包の紙で祈りの千羽鶴　健二
わだつみの声聞き涙　孟蘭盆会　たけし
ふる里に甘えて帰る夏休み　末一
達筆が涼しさを呼ぶ見舞状　昇
雨やどりパチンコ屋には席がない　敦子
氷割る音に観念する患者　二南
暴落の株のことなど口つぐむ　胡村
金蔓を女将は社長と離さない　繁男
年金を少し与えて犬を飼う　泰子
活造り今夜はお酒の方がいい　絢子
政治家はうまい話はよくつまみ　みつこ
おつまみに蝗出てくる北の旅　志洋
秋風に己の邪心包み込む　ぎいち
お袋が包んでくれた里の味　キミ子
丁寧に包んだ義理を持ち回る　希代司
バスツアーここでもマイク離さない　葉子
強気出し値切って植木市　志津江
一つまみ塩加減する母の味　ケイ子
おトイレの一人の帰り待つツアー　利武
老妻が財布を握るフルムーン　吐来
朝の陽よ父の苦痛をやわらげよ　敏

大阪文化祭川柳大会

とき　11月17日（土）
午前11時開場・午後1時締切
午後2時から披講および表彰

ところ　大阪府中小企業文化会館
（地下鉄谷町線「谷町9丁目」または「四天王寺前」下車）

兼題　「本」　岩井三窓選
「意外」　久保田半蔵門選
「最近のニュースから」　三川美左選
「瞼」　友田茶の子選
「幻」　高橋古啓選
「つなぐ」　辻白渓子選

席題　当日2題発表
選者　片岡湖風　安藤寿美子

出句　兼・席題とも2句
（出席者に限る）

会費　1000円（作品集代を含む）

主催　大阪府・大阪市
大阪府・市教育委員会

■各地句会だより

川柳塔鹿野みか月

中原　諷人

昭和五十四年十二月、森山盛桜ほか数名のきもいり有志によって川柳教室をスタート。小林由多香・両川洋々のお二人を講師に招聘して基礎を教えて頂き、全員の学習意欲は旺盛でもあったが、翌年六月八日には〝みか月川柳会〟を創立することができました。

初代会長の故山下以草夫は「大根も双葉から育つ、恵まれた環境を川柳の里にできないものか。川柳を趣味だけに終わらせたくないのだが」と〝町の起爆剤〟になるよう推奨。〝みか月〟記念大会を毎年のイベントにして大勢の川柳作家の皆さんに鳥取県・鹿野町へ来訪いただけることを念い、本年で満十周年。因に、創立記念大会から昨年の満九周年大会まで（鳥取県大会を含む）に一、一六一名の出席参加者と三〇三名の欠席投句によって支えられながらの成長でございます。

生前、「岡山県・弓削に先達の良いお手本があるから一度行ってみよう」と西日本大会に参加し、以来、「川柳は身近にして立派なことに兼用できること証明す」とした上で、「品格のない作品を生まぬようにしなければ、低俗なものとして再び魅力失せるようにされるだろう」を口癖にしておりました。

現二代目会長の土橋螢も長く俳句をやっていたので、美しく明るい句を好み、初心貫徹につながる会の運営となり、ユーモア句こそあれ、会員も低俗な句を嫌っています。また、行政畑の総務課長であった会長によって、交通安全を願う川柳、さくら祭り雪洞の短冊、銀行、郵便局ロビーの短冊展等、川柳をフルに活用する〝ジゲ起こし〟運動。その甲斐あって昨年十一月九日には県知事一行〝ジゲ起こしキャラバン隊〟を迎えるに至り、立派な〝訪問記念杯〟を受けました。

毎月、第一または第二日曜日が定例句会で町福祉センターで開いており、県川協への登録者四十五名に未登録者を加え、農繁・子守り等で差し障りのある日を許しながら楽しく厳しい句会をやっておりますが、米子・赤碕東伯・倉吉・鳥取・岩美など県内の東中西部からベテランの応援もあり、とても和やかな雰囲気の勉強会にしていただいております。

良い意味での競争心を煽るため例会日ごとに天の天賞（互選）と総合優勝を設けており、翌月の例会選者の栄を与えられるので各々が悲喜交々の貌を見せ、これまたユニークです。

一昨昨年の四月には、私の母校である鹿野中学校に必修クラブとして〝川柳クラブ〟を採用して頂き、微力ながら私が講師で出かけています。また本年八月から、町中央公民館にも〝川柳初歩教室〟が生まれ、会長の螢と私が同人の援助の下に講義を進めています。

史蹟城下町と温泉の町〝しかの〟に住むもの訪うもの川柳愛好家となり、昭和六十二年十一月、仰ぎ頂いた『川柳塔』の三文字を汚すことなく満月へ満月へ。和を以て川柳の絆が満ち溢れるよう念じつつ、満十周年大会へのご参加をお待ち申し上げています。

■句集紹介

小西雄々句集『松露』

小林由多香

昨年、句碑を建立、そして今回の川柳句集『松露』の発刊、川柳歴四十有余年の小西雄々さん最高のよろこびであろう。

昭和二十八年、川柳雑誌社不朽洞会員になって以来、麻生路郎師の薫陶を受け、「生命ある句を作れ」をモットーに、松露川柳会を主宰するほか、いずも川柳会、川柳塔まつえ、打吹川柳会の指導的立場で活躍、数多くの佳句が詠まれており、どの句にも路郎師の教えがにじんでいるように思える。

今年、古希を迎えられたのを契機に、毎日の生活の中から生まれた作品一千句を自選集に大成され、発刊されたものである。

雄々さんの作品は、実直な性格がそのまま詠まれ、ハッタリのない真実味、人情味あふれるものばかりで、難解句らしきものは一句もない。まさに伝統川柳の手本といっていいのではなかろうか。

粒ぞろいの作品の中から、抜粋して触れ、小西雄々さん川柳句集『松露』を紹介する。

川柳を始めて間もないころであろう。子育ての愛情がしみじみ伝わってくる。

子沢山誰かの鼻緒切れている
海苔の香の手で遠足の子を起こし
よそよりは高く揚げたい鯉幟

愛妻家で知られるが、奥さんの句も多い。

流行に遅れる妻をよしとする
舟舵を妻にまかすと風となる
ある日ふと妻の敬語にうろたえる

まじめ、きちょうめんで、あまり酒を好まない雄々さんには、さすが酒、女の句は少ない。あえて拾えば、

酒飲めぬ弱みは見せず黒田節
蕾でも酒さえあれば手をたたく
毒消しのいらぬ女でよく眠る
さそり座の女へ過去は話すまい
大ジョッキ女かなしい虚勢張る

ところが雄々さんもやっぱり男。こんなところへも目が向けられている。

健康な乳房がゆれる拭き掃除
ヒップだけ去年の田植よりめだち

しかし、これらの句にはいやらしさが感じられない。軽いうがちをきかせておかし味の、湧いてくる句も多く、句集全体を楽しくしている。

日本語で売れず英語に書きなおす
非常ドアその時説明など読めず
祈祷料はずめば威勢よい太鼓
練習をした定石で攻めてこず
わが子より若い巡査に叱られる
世相へ対しても、敏感に作句されている。
紀子さんの表情に見る鶴の舞い
フロンガスは宇宙の誤算かも知れぬ
カルチャーで脳細胞をふくらます
嫁よりも弱い姑が増えてきた
節約をすると近頃笑われる

豊中市民川柳大会

とき 11月23日(祝) 正午開場

ところ 豊中市立中央公民館1F集会室
(阪急宝塚線曽根駅東200米)

席題 (当日発表) 清水 斗升選
宿題 「煙」 波部 白洋選
「卵」 西川 景子選
「橋」 保木 寿選
「道」 奥山 晴生選
「車」 河内 天笑選
「旗」 片岡つとむ選
「顔」 森中恵美子選

会費 1000円(記念品・発表誌呈)

柳界展望

集録＝敏・武庫坊

★小西雄々句集「松露」発刊記念川柳大会が**9月24日**米吾ステーションビルで一二三名が参加し、盛会であった。

★第4回堺市民芸術祭川柳大会は**9月30日**、堺市立栂文化会館で開かれ、池森子さん（富柳会）が兼題「利休」の秀句賞となった。

茶筅から激しく雫する利休

★有線テレビのSVU（スペースビジョン）が毎週金曜日の午後零時半から「薫風の川柳教室」の時間を設けることとなり、**10月5日**橘高薫風氏による初放映が行われた。

★岡山県芸術祭参加・第13回ますかっと川柳大会は**12月2日**午前10時から岡山市中央公民館で開かれる。兼題と選者は、忘れる＝小野真備雄▽ときめき＝谷川渥子▽ドラマ＝木下草風▽裁く＝青山岳峰▽砂＝遠藤枯葉▽席題2題（いずれも各2句・投句拝辞）、会費1500円、川柳岡山社主催

★第9回川柳Z賞作品募集自由吟30句を11組、平成2年発表または未発表作品。選考委員は細川不凍・大野風柳・尾藤三柳・福島真澄片柳哲郎・橘高薫風・森中恵美子・寺尾俊平・田口麦彦・杉野草兵の各氏。用紙は出句専用紙を事務局に返信用封筒同封で申し込むこと。締切は**平成3年1月31日**、会費は不要、発表誌希望者は千円（切手可）のこと送付先〒039-52青森県下北郡川内町浦町　高田寄生木方川柳Z賞選考委員会事務局

★札幌川柳社は『川柳さっぽろ』400号記念誌上川柳大会を行う。課題は雑詠で選者は橘高薫風・東野大八・森中恵美子・寺尾俊平田中好啓・時実新子・定金冬二・大森風来子・大野風柳・柴田午朗・下村梵・尾藤三柳・田口麦彦・斉藤大雄の各氏、投句数は2句、投句料は1000円、投句先は〒069・江別市文京台46―16　藤谷怠民愚方大会事務局、締切は**平成3年3月10日**、発表は同誌7月号。

★いずも川柳会（久家代仕男会長）は創立65周年を記念して**平成3年4月21日**、記念川柳大会を開催する。

★『川柳宮城野』9月号の「川柳アラカルト」欄に本社同人5氏の句が掲載された。

丁寧な言葉で遠い人になる　門谷たず子

なるようになるさ夕餉の目刺し焼く　嘉数兆代賀

人間の大きさ負けたなと思う　吉岡　美房

きざはしのまるみも女人高野なり　藤井一二三

またの日は朱に交わってみるいのち　西山　幸

▽**ご芳志**△

■故長野文庫氏長女の南さん、故米沢暁明氏夫人のフサノさんからそれぞれ金一封を受領いたしました。厚く御礼申し上げます。

（**川柳塔社**）

▼お願い▲

■「柳界展望」欄は読者のためのニュース版です。各地句会や同人の動静などを編集部あてにお知らせください。写真があれば添付をお願いいたします。

（**編集部**）

新同人紹介

最上和枝
―薫風・独歩・洋々・由多香推薦

荒川磯子
―薫風・天笑・月子推薦

新正子（あらし）
―薫風・千代・瑞枝・日枝子推薦

11月各地句会案内

	日／時および題	会場と投句先
尼崎 いくしま	2日(金)午後1時から 家族・角度・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号　田淵定人 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
堺川柳会	4日(日)午後1時から 結構・元気・蹴る・煙	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2－9－2　河内天笑
西宮北口 川柳会	5日(月)午後1時から 輪・おっとり・諦める・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9－4　西口いわゑ 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
川柳塔 まつえ	10日(土)午後1時半から 荒れ・味・真似る	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
八尾市民 川柳会	10日(土)午後6時から リズム・人徳・上り坂・息	八尾市立労働会館(山本)　近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1－15　宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	11日(日)午後1時から 方便・掘る・骨	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14　野村太茂津
富柳会	15日(木)午後1時から 落選・裸婦・乱暴	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353　池森子
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木)　正午から 飼い主・観察・診察・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1－7－7－905　福盛京童 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
南海 川柳会	16日(金)午後6時から 透明・運命・国際・信頼	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15－18　寺井東雲
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時から 暦・感謝・微か・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
南大阪 川柳会	19日(月)午後6時から 円滑・潔白・関の山・手軽	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
川柳 東大阪	24日(土)午後6時から 深い・財布・やんわり・芝居	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5－6－23　桑原喜風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
はびきの 市民 川柳会	25日(日)午後1時から 猿・左遷・サービス・(盛り場)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満敏
岸和田 川柳会	29日(木)午後6時から 自然・杖・証拠・素直	岸和田市立福祉総合センター　南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7－36　植山武助

※川柳ねやがわは3日(土・祝)第13回寝屋川市民川柳大会(90頁参照)
※京都塔の会は18日(日)吟行(83頁参照)

★特に記載がない場合　句会費 500円、投句料 310円(62円切手5枚)、各題3句以内

編集後記

☆毎日新聞の余録に百一歳で亡くなられた画家の奥村土牛氏の語録が載っていた。それを年代順に追ってみると、七十一歳の時は「このごろ初めて、自分の描きたいものを描けるという気になりました」と。そして八十四歳の時は「今でも仕事をしている間は二十代と変りなく、少し病気で十日も寝ると老人になります。私は今仕事をするだけで生きています」。また「私はこれから死ぬまで初心を忘れず拙くとも生きた絵が描きたい。芸術には完成はあり得ない。要はどこまで大きく未完成で終るかである」。そして九十歳の時には「若い人に負けまいと意気込んで見たものの、この年になってようやく自分には自分の絵しか描けないことがわかりました。そう思うと気持が自由になって」と言っておられたそうだ。

☆先だって天王寺の美術館へ南画展を見に行った。その時いつも表紙絵でご厄介になっている直原玉青先生の大作二面に接してきた。先生は近く米寿を迎えられるが、その筆勢には誠に驚かされるものあり。芸一筋に生きておられる方には、自ら頭が下るのを禁じ得なかった。私たち川柳人も一歩でも半歩でもその境地に近づきたいものだと思った。

☆十月六日、高野山大霊園の「川柳塔」に物故者二十二名の方々が合祀される法要が営まれた。近年、独身女性や身寄り少ない方々が合祀される廟や墓所が各所に設けられているが、同じ趣味の友が死後も語り合える川柳人は、何と幸せなことだろう。

（萬）

▼A新聞をM新聞に変えても一向に株価は上らない。今度はY新聞に変えたが、これを〈貧すりゃ鈍する下手の悪あがき〉という。アンチ巨人にとって少し抵抗があったが、これも勉強と思ってY新聞に変えた。だが株価は一向に上らない。新聞の話はこれまで。

▼九月三十日に浪花の祭り〝花の万博〟も、一八三日の幕を閉じた。二〇号台風も何のその、前売券が惜しくて雨の中を損をしたくない大阪人らしく二〇万人で賑わった。期間中いちょう館に幽霊が出ると新聞にまで噂が載った。今どき幽霊などと思うものの、わざわざかどうか知らないが、数人の人が幽霊を見に来たのは事実である。

▼当会場で三か日間展示の〈きり絵〉に出品したかかわりで、妻が当番をしていた時、中高年の男性が〈きり絵〉の前を往ったり来たり、果ては妻に、いちょう館の幽霊はこれですかと、加藤義明氏の作品（これは能登の民話、かたおかしろう著『ごじんじょ鬼の村』をテーマにした鬼の面をつけた一揆の物語）の一連を指して尋ねたという。世の中いくら発展しても、こんなことをまだ信じるのは、大企業が祀る稲荷信仰に一脈通じるようだ。これらの信仰が現代の経済発展の力になったことを否定できない。非科学的なあいまいなものと同居しているところが人間的で面白い。（き）

★川柳塔社の結社としての年間における主要行事である同人総会と二賞表彰記念句会、そして前日の川柳塔碑供養が同人・誌友ら多数の参加によって行われた。法要の後、何年ぶりかで霧が立ちこめる奥の院に参詣し、同夜、普賢院の宿坊に一泊し、朝の勤行にも参列した。不信心の私にもすがすがしい一日であった。

★精進料理の朝食を頂いた後、正面の鴨居を見ると、一枚の扁額が掛っていた。「鎮護国家」とあまり巧くない字が書かれており、戦前における右翼の巨頭で、政界の黒幕でもあった頭山満の書である。そして座敷を距てた対面にも扁額があって「總親和總努力」とあり、これは渋沢栄一の書。

★渋沢は人も知る第一国立銀行の創設者で、明治財界の大御所である。八十九歳の筆とは思えぬほど、頭山とはうってかわって端正でみずみずしい。そのコピーでも川柳塔社の事務所に飾りたいと秘かに思った。

（正）

本社11月句会

日時　11月7日（水）午後5時半
会場　メンズファッションセンター3階
中央区内本町1―1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

おはなし　吉岡美房
兼題「嫌う」　春城年代選
「根」　吐田公一選
「めくる」　板尾岳人選
「倒す」　阿萬萬的選
「その後」　西尾栞選

席題　1題　当日発表　各題2句以内厳守
会費　500円
投句　柳箋（4cm×19cm）1葉に1句を書き、投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社12月句会　7日（金）

兼題　「腹」「からっぽ」「うるさい」「疲れる」「無理」

作品募集

1月号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）　西尾栞選
水煙抄（10句）　黒川紫香選
銀河系（3句）　河内天笑選
茴香の花（3句）　八木千代選

吟課題（3句）
「開く」　大矢十郎選
「鏡」　秋元てる選
「未来」　相馬一花選

初歩教室「番組」（3句）辻白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

2月号課題吟「豆」「運動」「散る」

11月から同人費・誌代などのご送金は、すべて川柳塔社事務所へお願いします。
所在地は下記奥付のとおり
振替口座　大阪　8―33368
誌代　半年分 3,800円（送料共）
1年分 7,500円（送料共）

NHK川柳作品募集

課題「流行」　橘高薫風選
ハガキに3句　11月10日締切
投句先　大阪市中央区馬場町3―43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表　11月25日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「姿」　橘高薫風選
ハガキに3句　11月15日締切
投句先
〒540　大阪市中央区谷町2丁目2―20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料51円）
平成二年十月二十五日印刷
平成二年十一月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六九一―六九一四番
振替口座大阪8―三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二一年十月二十五日 印刷
平成二一年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七六二号 川柳塔 十一月号
定価 六百円（送料五十円）

Pierre Parchen

Daniel Moushell

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマン

SUPER OSK

オーエスケーの
紳士服

株式会社オーエスケー
〒540 大阪市中央区南新町1－4－7
(06) 941－8018

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

豊津住宅株式会社

代表者 大矢喜一

豊津店
〒564 吹田市泉町5丁目11－14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店
〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886

雑誌 05703－11